

添付書類1 主要面談者リスト

<国内>

青年海外協力隊事務局

海外グループアジア第一チーム チーム長

アジア第一チーム

技術顧問 日本語

技術顧問 日本語

技術顧問 小学校教育

技術顧問 リハビリテーション

魚屋 将
澤田 寛之
佐久間 勝彦
小林 基起
関 健二
富岡 詔子

青年海外協力協会

常務理事事務局長

事業部企画開発課主任

駒澤 彰夫
羽田 一三男

日中技能者交流センター

常務理事・教育交流部長

古川 恵夫

(財) 日本シルバーボランティアズ

理事

理事

参与中国派遣部

羽賀 慧
横塚 武
神服 巖

<現地>

在中国日本大使館

一等書記官

武隈 義一

中国 JICA 事務所

所長

次長

主査

協力体調成員

協力隊調整員

協力隊調整員

協力隊調整員

古賀 重成
藤谷 浩至
植村 吏香
今間 智子
渡邊 憲夫
多田 誠治
平野 ゆかり

世青中学

校長	王 虹
世青中学中文教師	何 濟平
世青中学中文教師	銀 雪

国際交流基金北京事務所

専門家	小西 広明
-----	-------

英国海外志願服務社

(VSO, Voluntary Service Overseas)	李 国志
-----------------------------------	------

韓国国際事業団(KOICA)中国志願団事務所

所長	南 淳恵
----	------

日本科学技術振興機構

北京代表	李 清
------	-----

中日友好病院

外事処 副処長	祭 福軍
リハビリ科 医師(CP)	謝 欲曉

遼寧省人民政府科学技術庁国際合作処

副処長	譚 鳳楛
-----	------

遼寧省対外科学技術交流

中心副所長	羅 乃明
通訳	張 麗麗

瀋陽市朝鮮族第一中学校

学校長	白 圣男
日本語教師	超 海淑
日本語教師	鄭 燕
日本語教師	中村 直子

遼陽市対外科学技術交流中心

主任	王 魯傑
----	------

遼寧大学外国語学院

日語・語言文学教授	張 萬夫
日本語教師	李 敏

国際交流処	孫 君
<u>協力隊の元 C/P</u>	
療陽天河消防自動設備製造有限公司	孫 経徳
遼陽市光荣院院長	王 勇
<u>大連市人民政府科学技術局国際合作興招商処</u>	
処長	劉樹東
項目官員	姜 述鋒
<u>大連市第三十中学校</u>	
書記	王 風敏
日本語教師	張 玲
日本語教師	郭 愛軍
日本語教師	孫 麗芬
青年海外短期派遣隊員日本語教師	飯田 美穂子
<u>河南省人民政府科学技術庁対外交流中心</u>	
主任	荊 明新
副主任	馮 國湘
項目部部长	衡 杯生
<u>新郷市科学技術局</u>	
主任	評 強明
<u>新郷市対外科学技術交流中心</u>	
主任	宋 以久
<u>河南省新郷体育学校</u>	
校長	張 建新
副校長	宇 曉
野球 CP	李 勤冬
青年海外協力隊野球隊員	久保田亮
<u>開封市科学技術局</u>	
副局長	孫 勇
国際合作所科長	周 凱
<u>開封市群英幼稚園</u>	
副園長	李 振華
副園長	阮 世藩

書記	麴 広
幼稚園教諭	李 姮
幼稚園教諭	藩 歌
青年海外協力隊幼稚園教諭	松井 愛子

開封市衛生学校

院長	席 建成
党書記高級講師	張 玉枝
副校長	李 雲英
衛生校書記	候 裴盈

天津企業管理培訓中心

主任	張 世平
国際合作部部长	顧 紅
中心日本語教師主任	王 淑華
国際合作部	姚 莉娜

天津体育学院

科研国際交流処	漆 平
事務所主任	楊 乃東
競技訓練部棒球主教練	劉 松波

新疆ウイグル自治区科学技術庁

国際合作処副処長	張 忠
国際合作処担当	陽 延琴

新疆大学外国語学院

学長	付 鴻軍
外事秘書	阿 利亞

新疆農業大学

外事処国際交流事業担当	馬 咏梅
-------------	------

新疆職業大学

教務処	鉄木爾巴図
学生工作（＝活動）部副部长	金 珠

新疆蒙古族文化教育促進基金会

阿 力瑪

新疆師範大学

国際合作・交流処長	張 兵
-----------	-----

外国語学院副学長	木合塔爾・艾則孜
外国語学院日本語学科日本語教師	馮 豫傑
外国語学院日本語学科日本語教師	茹先・伊明
外国語学院日本語学科日本語教師	李 朝千
青年海外協力隊日本語教師	大向 宏

黒竜江省科学技術庁

国際合作処担当	馬 海燕
---------	------

ハルビン理工大学

外国語学院日本語学部主任	徐 英東
外事処対外中国語研修センター	金 基永

ハルビン工程大学

外国語学部日本語教研室室長	王 映哲
外事処副処長	劉 文
外事処	丁 学忠
外事処	白 振国

黒竜江省中日友誼病院

主任医師	金 哲秀
骨外科主任医師	張 忠哲
外事弁公室主任 (C/P)	于 元龍

湖北省科技厅

対外科技合作処主任	孫 剛
外事処 元副所長	余 養銓

湖北省カン寧市科技局

副局長	王 衛平
工程師	陳 生江

通城県政府

副県長	田 利
-----	-----

通城県科技局

局長	王 胡 強
副局長	李 慮炎
通城県人民医院	

院長	金 凌
副院長	李 金根
青年海外協力隊 看護師	管 朋美
<u>黄崗市科技局</u>	
副局長	張 建民
科長 現協力隊担当	胡 艷清
科長 元協力隊担当	院 仲斌
<u>黄崗師範学院</u>	
国際交流処 処長	赤 進仕
外国語学院 院長	李 輝望
外国語学院 日本語系主任	張 金栄
外国語学院 書記	劉 傑
外国語学院 副院長	岑 海兵
外国語学院 教師	魏 娟
<u>黄崗市代代江幼稚園</u>	
園長代行	黄 花煜
教諭 CP	郭 薇
教諭 CP	夏 玲
<u>黄石市科技局</u>	
局長	王 志超
副局長	李 晚平
<u>湖北師範学院</u>	
对外合作交流処 所長	羊 国欣
外国語学科主任	張 光葉
財務主任	平 培新
日本語主任	藩 並洋
<u>黄石市中心病院</u>	
副院長	胡 並貨
<u>黄石理工学医学院</u>	
看護教育主任(元黄石衛生学校 C/P)	皮 彗敏
<u>荊州市科技局</u>	
科長 協力隊担当	戴 治平

荊州市中心病院

副院長

周 先略

科学教育科

睨 利蓉

看護部 副主任(2 隊員の CP)

付 沫

荊州市人民第 1 病院(長江大学付属第 1 病院)

副院長

劉 偉

科学教育科課長

王 玉景

科学教育科副課長

蔡 宇

普通外科看護師長 CP

鄧 世紅

看護師 CP

陳 静

湖南省科技厅外事处

処長

魯 華

協力隊担当

劉 文宇

中南大学

副校長

李 桂源

国際交流処所長

梁 淑金

国際交流処副主任

張 薰

外語学院日本語学科教授

陳 月吾

湖南大学

国際交流処

湖南師範大学

国際交流処

宋 雪梅

株州市科技局

合作科科長

史 灯

株州市婦女子児童活動中心

園長代行

唐 唐

衡陽市科技局生産力促進中心

候 小波

衡陽市第 7 中学校

校長

任 放明

副校長

謝 元雄

書記

曾 德琳

日本語教師

王 幼

日本語教師	周 敏
日本語教師	王 芳
<u>四川省科技厅国際合作処</u>	
処長	梁 晋
<u>徳陽市科技局</u>	
副局長	趙 緒全
国際合作科 科長	李 増強
野菜弁公室 主任 釣隊員 CP	鄭 康
旌陽区農業局 局長	吳 志强
<u>西昌市科技局</u>	
副局長	朱 美煙
課長	胡 莉
<u>涼山州紅十字会</u>	
公衆衛生 協力隊シニア隊員	増田 宮子
<u>涼山民族中学</u>	
日本語 協力隊シニア隊員	友貞 新
<u>JICA 涼山州造林プロジェクト</u>	
リーダー	嶋崎 省
<u>攀枝花市科技局</u>	
担当	郭 忠明
<u>攀枝花市競技場</u>	
コーチ (3人の隊員受け入れ担当)	趙 勇
<u>攀枝花市スポーツ中学校</u>	
校長	彭 格
副校長	羅 興成
ソフトボールチーム監督 隊員 CP	楽 開顔
ソフトボールコーチ (煤孫隊員教え子 赤井隊員 CP)	楊 傑
野球チーム監督 (煤孫隊員、赤井隊員 CP)	劉 波
野球チームコーチ	李 寅
<u>広西壮族自治区科技厅</u>	
国際合作処処長	彰 枝

国際合作処	簡 慧芳
<u>来賓市興貴賓区科技局</u>	
局長	韋 壯
副局長	蒙 貴芳
担当	華 丹
<u>小平陽鎮 紀律検査委員</u>	彭 臣孔
<u>牛遼村 元村長</u>	藩 濟清
現村長	藩 濟庁
<u>謝村 主任</u>	回 漢香
<u>松柏村（竜眼果樹園） 書記</u>	毛 祖喜
<u>柳州市科技局成果科 副科長</u>	蔣 冰
<u>柳州市人民病院</u>	
書記 業務副院長	胡 世紅
神経内科 主任	郊 小鷹
神経二科 科長	杜 娟
科教科 科長	欧陽 小琳
神経内科 リハビリ師	韋
柳州市人民病院 協力隊員	金沢 郁恵
<u>柳州市直属機関幼稚園</u>	
園長	栗 玉
書記	陳 霞
<u>桂林市科技局</u>	
副局長	戸 向堅
国際合作科 科長	李 旭
国際合作科 科長	吴 林佳
<u>桂林市芦笛小学校</u>	
校長	陳 海栄
副校長	林 娜
副校長	斎 偉麗
美術教師	李 芳

協力隊員 美術教師	千田 恭子
<u>桂林師範高等専門学校</u> 物理と情報技術学科主任(副教授)	莫 建平
<u>桂林市七星幼稚園</u> 副園長 書記	秦 艷鈴 馬 蓉暉
<u>桂林市旅遊職業中等専門学校</u> 副校長 桂林市奇星芸術教育センター長	李 依奇 馬守正
<u>桂林旅遊高等専科学校</u> 校長 国際交流処 処長 外語系主任 旅遊系主任 国際交流処	李 羊生 姜 ビン 饒 莉拉 戸 例玲 李 云
<u>青年海外協力隊員</u> オルドス市第三中学日本語教師 広西師範大学日本語教師 湖南農業大学日本語教師	宮原 雅代 木佐貫 麻美 磯田 彰

添付書類 2

面談録 東京 1

2006年10月31日
 記録者： 青木 憲代

日 時	10月31日(火) 午前10:00-11:30
参 加 者	青年海外協力隊事務局海外グループアジア第一チーム チーム長 魚屋 将 青年海外協力隊事務局海外グループアジア第一チーム 澤田 寛之 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 宇田川 和夫 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 青木 憲代
収 集 資 料	中国における JICA 事業の概要 2006年6月 平成18年度 ボランティア事業実施計画書 青年海外協力隊 業種別集計表 シニア海外ボランティア 業種別集計表
場 所	協力隊事務局
概 要	<p><魚屋チーム長></p> <ol style="list-style-type: none"> 中国における関連機関、関係者、協力隊員の満足度を見ると同時に、600名の派遣による影響を評価してほしい。 <p><澤田職員></p> <ol style="list-style-type: none"> 中国における JICA 事業の説明がまずあった。2008年をメドに円借を取りやめ、その後技協、ボランティアを中心に協力を行う予定。JICA 国別事業実施計画における援助重点分野は、1) 環境問題など地球規模の問題に対処するための協力、2) 改革・開放支援、3) 相互理解の増進、4) 貧困克服のための支援であり、これに従い協力を進めている。 課題としては、JICA のプログラムアプローチの中に盛り込めていないので、連携する部分がないことが多く、エイズ予防対策、ワクチン予防の技協プロジェクトなどと関連性をもたして派遣を考えていきたい。 協力隊の職種については、これまで日本語教師と看護師の比較優位が明らかであったので、継続している。日本語教師については、拠点となり波及効果の高い大学を派遣対象とし、中学高校では、英語教育の需要が高まっている中、日本語教師派遣を行っている。社会人教育や職業教育における日本語教師派遣では、裨益効果が望まれる組織に派遣を行っている。リハビリテーション関連の技協プロジェクトとの関連性で、理学療法士、作業療法士をさらに派遣したいと計画している。 基本的に内陸部を中心とする派遣となっており、沿岸部の派遣は行わないことになっている。湖北、湖南などボランティア制度をよく理解している地方科学技術庁では要請も多く、県レベルでも派遣が行われている。山西、新疆ウイグル自治区、青海などでも受け入れの理解があり、少ないが派遣が行われている。雲南省、安徽省など制度の理解が足りない省ではまだ要請は少ない。今後理解が増せば、派遣は増える可能性がある。受け入れ機関には、派遣する前に、質問表を送り、協力隊は単なるマンパワーではないことを確認している。 隊員のグループ派遣は、農業などの分野で派遣がなされたが、日本側の人材が不足しており、継続しなかった経験を持つ。協力隊は職種ごとに勉強会を行っており、また、同じ地域に同種の職種を派遣するなどして積極的に行き来ができるようにしている(中国式複数派遣) 日本語教師については、国際交流基金と協力隊が勉強会を開いている。基金は、北京、大連など大都市への派遣が多い。基金には日本語の調整員もいる。 Koica との連携の可能性についても検討している。 シニア海外ボランティアについては、現在桂林などに派遣されているが、今後は派遣を拡大したい意向である。職種は環境や日本語教師などの分野を想定しているが、今回の調査であれば、どのような分野がよいかの提案を求める。 帰国隊員については、看護師、幼児教育、スポーツなどの隊員が任期中に語学力をつけ、帰国後中国で活躍するものもいる。 <p style="text-align: right;">以上</p>

面談録 東京 2

2006年11月2日
記録者：青木 憲代

日時	11月1日(水) 午前14:00-16:00	
参加者	青年海外協力協会常務理事事務局長 青年海外協力協会事業部企画開発課主任 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント	駒澤 彰夫 羽田 一三男 宇田川 和夫 青木 憲代
場所	青年海外協力協会(JOCA)	
概要	<p><駒澤事務局長></p> <ol style="list-style-type: none"> 中国への協力隊派遣10周年の記念事業では、体系だったハードなものは作成していないが、「10年を振り返って」という冊子を作成した。これは中国事務所にあるはずである。派遣当初は、科技部が要請を吟味し、要請をだしてきた。後ほど要請書すべてがあがってくるようになった。 立ち上げ期には、東北三省と一部北京、上海で日本語教師、看護師、水泳、果樹、加工、保守操作、経済などの職種が派遣された。国営企業を今後どうするかという時期にもあたる。このころ地方科技厅職員を研修に日本に送り、JICA事業全体の理解を進めるようにした。その後、派遣がさらに拡大され、チベット、雲南、海南を除く省で派遣が行われた。 <p><羽田主任></p> <ol style="list-style-type: none"> 職種もさまざまなものが含まれたが、専門家との違いやニーズと合わないものであったりしたので、その後、職種を絞り、派遣を進めるようにした。事業に理解を示してくれた重点地域は、湖南省、河南省、広西省などである。今日では、職種を変えるチャレンジを進めており、貧困対策との関連で貴州などへも派遣している。国営機関が減少したことから、その意味では、教育機関に限られてきている傾向がある。 成果という点では、内モンゴル自治区派遣のスポーツ隊員が育成した陸上選手が北京で優勝したなどがある。日本語教師派遣により教え子が日本へ留学し、日本企業・ビジネスの分野で活躍するなどがあげられる。 日本語教育については、東北三省では、大学に派遣しないことになっている。中等教育を中心に行っており、日本語で大学を受けられるようになっている。黄河から南の日本語教育後進地域では大学を中心に派遣している。よくできる日本語教師が沿岸部へ転職することがある。 <p><駒澤事務局長></p> <ol style="list-style-type: none"> 日本語教育の目的は、いくつかあり、技術技能を学ぶため、観光ガイド、ビジネス、日本企業への就職、日本への留学などである。協力隊派遣9-10年目のあたりでは、基金が高等機関、JICAはそのレベル以下でというすみわけをしていた。また、連携も進められ、教材を補完するようになり、これは現在も続けられている。 <p><羽田主任></p> <ol style="list-style-type: none"> 大学が第一専門、第二専門と分け、第二専門で日本語を履修するものも増えている。第二専門は、土日、余暇を使うものであるが、就職などに役立つため理工系で日本語を選択するものも多い。 帰国隊員の社会への還元としては、友好都市の自治体の職員になる帰国隊員もいる。内モンゴルの砂漠化防止のため、中国物産を購入し、販売し、利益を得たら、中国で植林を行うという帰国隊員もいる。大学院などへ進む場合もある。杏林大学や慶応の教授や助教授になったものもいる。中国からの帰国者を対象とした日本語教師の職に就くものもいる。帰国隊員同士が結婚し、夫婦で貧しい子供たちのために学校づくりをしているケースもある。帰国隊員のメーリングリストがあり、300名に達している。羽田主任が帰国隊員の情報交換の取りまとめを行っている。 グループ派遣の経験としては、ライヒン縣植林、稲作、農業土木が行われたときには、グループ派遣の事例としては珍しく灌漑などに対して投入の予算がついた。 KOICAのKYV(Korean Young Volunteer)が韓国の企業が多い地域を主な対象地として派 	

遣されている。吉林、山東、遼寧省であるが、韓国語やテコンドーなどの指導にあたっている。平和部隊は、四川省の教育局を受け入れ機関として英語教師を送っている。

11. シニア海外ボランティアについては、中国では、A1 フォームを使用して要請があがってきたのを、個別専門家にするか、SV にするか中国側で決めている。今後は、専門家に近い立場というよりも、ボランティアとしての SV が期待される。

12. 日本シルバーボランティアズは、科技部の国際交流中心(JOCV の受け入れ部とは異なる)が事業の受け入れ機関となっており、これまでは、SV の募集などの事業を請け負っていたが、来年 3 月で JICA との関係を切り、SV の事業は、JOCA とシルバーボランティアズなどとの競争受注で SV 事業がなされることになる。

13. シルバーボランティア派遣による業績の効果により、技術移転が進められたものの、農業分野でのブーメラン効果もあり、中国産との競合が激しくなっており、日本の比較優位を保ちつつ職種を決める必要がある。

<駒澤事務局長>

14. 評価に対する期待としては、JOCV、SV の活動の成果を見られるようにしてほしい。

<羽田主任>

15. 日中交流技能センターが退職した国語教師を中心に日本語教師を派遣している。日本語教授法などの習得が課題となっている。

<駒澤事務局長>

16. 当初は、「日本鬼子」と石を投げられ、思想政治などの観点から監視状態に長い状態に置かれた隊員もいる。現在では、もうそのようなことはなくなり、自由になった。日本の若者にとっては、中国での生活や隊員活動はそれなりのプレッシャーとなっているものの、中途帰国者はいない。

以上

面談録 東京 3

2006年11月7日

記録者: 青木 憲代

日 時	11月7日(火) 午前10:00-11:15	
参 加 者	日中技能者交流センター 常務理事・教育交流部長 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント	古川 恵夫 青木 憲代
収 集 資 料	「日本語教師-中国の大地をいく」日中技能者交流センター編中江要介元中国大使監修 毎日新聞社 1998年	
場 所	日中技能者交流センター本部事務局	
概 要	<p><古川常務> 設立は、中国共産党下にある中華全国総工会主導のもとに中国職工対外交流中心に対応する日本側の窓口として日中技能者交流センターが1986年に設立された。</p> <p>1. 派遣実績 中国の4直轄市、23省、5自治区の各大学、外国語大学などに1986年から合計1300人の日本語を派遣してきた。派遣地域の中心は、新疆などの西域を除く省に派遣してきた。派遣人数としては、東北3省、北京、上海が多いが、地域は、全土にも及んでいる。年間40名ほど派遣。</p> <p>2. 派遣対象者 66才以下で国語または英語の教職経験が10年以上あるもの。または、日本語教師の資格・研修修了証を持っていて、3年以上の日本語教育経験があるもの。</p> <p>3. 受け入れ機関・派遣先機関 受け入れ機関は、中国国家外国専門家局であり、派遣先は大学を中心としているが、職業技術学校、外国貿易技術学校なども含まれる。</p> <p>4. 派遣前研修 3週間、国際日本語教育普及協会(AJALT)による日本語教師教授法の研修を受けることになっている。</p> <p>5. 派遣の条件 住居、水道光熱費、日本からの旅費は中国側の負担。学校内の「専家桜(外国人専門家宿舎)」に住む。手当ては、月5000元の生活手当を支給。医療は現地の赴任地基準の公的医療が提供される。</p> <p>6. 財政的基盤 1989年から2005年まで日本財団の支援を受けてきた。日中技能交流センターでは、中国からの研修生受け入れ事業を行っており、この収益を日本語教師派遣事業にあてている。</p> <p>7. 派遣状況 教員経験があるため、評判がよい。中国側が熱心に学ぶ姿勢があるので、日本で教鞭をとってきた教師であっても、中国の生徒たちは真摯な学習態度と教師に対する礼儀がよく、「教師冥利に尽きる」と現地での活動について良い印象を持つ教師も多い。任期は1年であるが、3年まで延長できる。</p> <p>8. 派遣中の困難さ 当初は、東北三省で日本人ということではばをばはかかれたりしたこともあった。受け入れ状況は概してよく、反日的な暴動が起こった時には、日本語教師に治安のガードがついた。</p> <p>9. 帰国後の活動 帰国後、在住の地方で日中友好などの活動をする帰国教師もいて、特に元校長、元教頭ということで、地方の名士であるため、中国での経験を語る会なども多く、日中友好親善の役割を果たしている。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

セミナー・聞き取り調査記録 東京 4

2006年11月11日
記録者：青木 憲代

日 時	11月11日(土) 午後1:30-17:00
テ ー マ	世界が直面する砂漠化～中国での防止の試み
主 催 者	日本経団連自然保護協議会 世界銀行情報センター(PIC 東京)共催シリーズ第2回
セ ミ ナ ー 参 加 者	明日香壽川さん(東北大学東北アジア研究センター教授) 中村 英さん(朝日新聞総合研究本部主任研究員) 高見 邦雄 (緑の地球ネットワーク事務局長)
場 所	協力隊広尾ひろば
概 要	<p><緑の地球ネットワークの活動概況></p> <p>11. 中国山西省大同市の黄土高原で緑化協力を行う会員制のNPO。環境問題や緑化、国際協力などさまざまなテーマで勉強会を開いている。現在600人の会員で運営している。事務局は4人のスタッフで運営。事務局は大阪にあるが、関東ブランチもあり、関東でも活動を行い、中国へのワーキングツアーにも参加している。</p> <p>12. 1992年に発足。15年間の植林事業の成果が認められ、2001年には中国政府から国家友誼賞を得ている。現在では、民間企業からの寄付金なども増えている。中国側カウンターパートは、大同市総工会の緑化協力事業部。日本からワーキングツアーが年2回春と秋に中国に訪れ、体験植林をしている。参加者は、年齢を問わず、子ども連れの家族や学生などさまざま。民間企業の労働組合なども独自のツアーを組み、現地を訪れている。1年間訪れる人は200人。活動当初は、試行錯誤であったが、少しずつ軌道に乗り、地球環境林、小学校付属果樹園、霊丘自然植物園と3つの緑化事業を持っている。</p> <p><高見氏></p> <p>13. 15年間の歩みを見ると川から水がなくなっており、3つのダム貯水能力の10%しか水がない状態となっている。降水のパターンが変化している。中国政府は、中国の砂漠化対策のために政策を打ち出している。「タイコウカンリン」という傾斜地などの条件の悪いところの耕作はやめ、植林を進める政策を打ち出し、一方では、基本農地の保護政策を打ち出している。首都緑化計画や万里の長城緑化計画を政策とし、北京に迫る砂漠化の危機を回避しようとしている。植林の際には、土地所有の問題があり、使用権や共有地などに植林を長い期間続けられるようにする必要がある。現在、杏を植えているが、杏はオイルが作れるため、生計向上にも結びつく。</p> <p><明日香教授></p> <p>14. 気象庁の調査では、中国からの影響で酸性雨に降るとい調査結果はこの数年でておらず、中国から悪いものが来るという側面的な発想はやめた方がよい。</p> <p>15. 緑化事業のために羊や山羊の放牧が禁止された影響も人々にでていることも考慮したほうがよい。今後も農業の作付けについて環境上の配慮から禁止されることがありうる。</p> <p>16. 自立発展性という点から、若い人にバトンタッチできるかどうか鍵である。</p> <p><高見氏></p> <p>17. 現時点では、自分が関わらざるを得ず、大同以外での緑化も考えていない。その他の国の緑化も考えていない。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>

面談録 東京5

2006年11月8日
 記録者： 宇田川和夫

日 時	11月6日(火) 午後13:40-15:00
参 加 者	青年海外協力隊 技術顧問(日本語) 佐久間 勝彦 青年海外協力隊 技術顧問(日本語) 鹿児島大学留学生センター 小林 基起 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 宇田川 和夫
配 布 資 料	中国・ウズベキスタン・キルギス日本語教育分野巡回指導調査報告書 H15年9月(小林) 国際交流基金及び国際文化フォーラムとの協議資料 2000年9月(小林) 日本語教育事典より抜粋 海外日本語教師のネットワークづくり(小林)
場 所	協力隊事務局
概 要	<p><佐久間></p> <ol style="list-style-type: none"> 協力隊員は他の組織の日本語教師をサポートし、中国における日本語教育のネットワークづくりに貢献している。日本の日本語教育学界で、昨年日本語教育事典(大修館)を出版しました。この事典は世界各国の日本語教育事情を取り纏めたものだそうです。その中で、日本語教育機関のネットワークの事例として中国の例が入っています。 小林先生は、中国語のプロで、中国国内の要人とのネットワークを持っている。 <p><小林></p> <ol style="list-style-type: none"> 国際交流基金の日本語教師の要件は、小林技術顧問の提言を受け、中国の文化と言語を理解している者となっています。このため、ほとんど協力隊の中国隊員OB/OGとなる。協力隊シニア隊員も入り、中国全体の日本語教育のレベルアップに取り組んでいるという。 中国の大学のうち250校が日本語専科を持っている。中国側は当初、数百人の日本語隊員をリクエストしてきた。 小林顧問らが、大学の性格を見極めて戦略的に隊員派遣先を決めている。 中国の先生も学生も日本が好きでとか日本語が面白いから勉強していると思ったら間違い。国家政策として日本を学ぶ必要があることと、英語のクラスに入れなかったから日本語をやっているという人も多い。 中国で日本語を学ぶということ事態が、結構リスクなこと。他の中国人からは疑惑の目で見られる。 隊員は学校で靖国問題や南京問題をどう思うかなど、学生から厳しい質問を受け、試される。中国派遣隊員は、日本語教師の経験があるということも大切だが、相手の文化を受け入れるという気持ちがある人を送っている。 今では、協力隊の隊員は共産党青年団からも認められるようになっている(奥地前進、貧困層の救済など)。 日本語教師の連携の難しさは、各学校が教師を抱え込む傾向にあることと、組織によって受け入れ母体が異なること。協力隊は国家及び省の科学技術部(委員会)、日中技能交流協会は国家専科局が受け入れ母体となっている。学校は国家と省の教育部に属する。 日中技能者交流協会は日教組の榎枝委員長(当時)が中国を訪問した時に約束して作った組織。今でも一番数多く中国にボランティアを送っている。 日本に来る中国人就労者は、日本での差別、失望を持って帰国している。 中国での給与は日本の20分の1程度。 中国人の留学生には他の国のように理系ばかりではなく、文科系も入っている。 日本からも大量の留学生が中国で学んでいる。 91年の時点では、隊員は東北3省の高等教育機関に入れた。 徐々に地方都市や中等教育機関に派遣を始めたが、最初は6年制の外国語学校、その後一般の高校に対する派遣に変わった。これは、大学で語学を専攻する生徒だけでなく、卒業後多くの職業に就く人が出てくることを期待したもの。 最近、地方の中心の大学に隊員を入れた例として、長春の東北師範学校のウイグル班

	<p>にシニア隊員を入れたことを皮切りに、新疆のモンゴルの大学にも隊員を入れるようになった。少数民族の支援はセンシティブだが続けていきたい。</p> <p>17. 大平学校は親日派、知日派を育てた良い例で、成果が大きい。</p> <p>18. 隊員の中には新疆のシニア隊員であった谷田部はるこさんが、現地で知らない人は居ないほど有名になった。</p> <p>19. 中国には日本語学会が2つある。両者とも官製。</p>	以上
--	---	----

面談録 東京6

2006年11月8日
記録者： 宇田川和夫

日 時	11月6日(火) 午後 13:40-15:00	
参 加 者	青年海外協力隊 技術顧問(小学校教育) アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント	関 健二 宇田川 和夫
配 布 資 料	特になし	
場 所	協力隊事務局	
概 要	<ol style="list-style-type: none"> 1. 中国での小学校教育の隊員は少なく、分野は図工と音楽の技能教科に限られている。 2. 中国は算数や理科など主要科目は手放さない。 3. 子供たちは図工と音楽の時間は羽を伸ばし、楽しく過ごすという傾向が強い。 4. 現地の先生たちは、協力隊員と一緒に授業を行うわけではなく、隊員が教えている間、一部生徒の補講など行っている。受験のための教育が目立つ。 5. 子供たちはDVDなど見せられ、歌や踊りを学ぶ。全ての学校が同じDVDを見るので、子供たちの表情やしぐさも皆同じになってしまいます。 6. 中国は模写することが勉強。日本は技能教育に優れていて、オリジナリティーを出そうとする。 7. 今後、地方の小学校の情操教育のニーズを掘り起こしていくことが必要。 8. 日本語隊員と音楽隊員の学校を超えての連携が難しい。縦割り、学校割の社会。 9. 隊員は語学力の不足や受け入れた学校の不熱心さから、最初の1年間は苦勞するようだ。 10. 中国のやり方を学ぶために、事前の研修をもっと充実するべき。 11. 学期直前になって隊員が担当する教科や学年が変わってしまい、対応に苦慮することもある。 <p style="text-align: right;">以上</p>	

面談録 東京7

2006年11月8日
 記録者： 宇田川和夫

日 時	11月6日(火) 午後13:40-15:00	
参 加 者	青年海外協力隊 技術顧問(リハビリ) アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント	富岡 詔子 宇田川 和夫
配 布 資 料	専門家業務完了報告書 富岡詔子 2006.08.24 第3回日中リハビリテーションシンポジウムより得られた基礎資料に関する富岡メモ	
場 所	協力隊事務局	
概 要	<ol style="list-style-type: none"> 1. 日本は中国に対するリハビリ分野での支援を20年続けている。 2. 中国ではリハビリと一括しているが、国際的には理学療法、作業療法、言語療法、養護、義肢、鍼灸、介護を扱う。精神障害も含まれている。 3. 中国では、日本では考えられないような、初期治療の悪さに起因する障害が多い(骨折や、やけどの後の治療が悪く、手足が動かなくなる)。 4. 北京でも JICA により施設もカリキュラムもできて充実したが、実習が弱いように思う。 5. 中国ではリハビリという認識が少ない。 6. 北京など大都市と地方では、リハビリの現状に大きな差があると思われる。 6. カウンターパートは実技が弱いのに、隊員から学ぶという姿勢が見られない。 7. 中国全土でリハビリ関係の資格を持っているのは5000人程度。計画では2010年までに50000人に増やす。 8. ちなみに日本では作業療法士だけで30000人、理学療法士が50000人居る。 9. 江西壮族自治区で活躍する金澤隊員と会うといい。 10. 中国に OT と PT の違いを示す意味で、両方の隊員をペアで派遣することも考えると良い 11. 隊員の派遣先で中国の学生がインターンとして学び、時に専門家が巡回指導に廻るというシステムも考えられる。 12. 協力隊員は教えるというより、Manpowerとして働き、成果を出すことも大切。 13. ただし、日本での OTPT 隊員の応募は、募集数の半分にしかならず、確保困難職種となっている。 14. リハビリ分野に限らず、どの分野にも共通する世界的な問題だが、CPを育てても、海外に出稼ぎに行ってしまう、国内のリハビリ向上になかなか繋がらない。 15. プロジェクト/プログラム実施中のCPの人件費を負担してCPの仕事に魅力を持たせ、定着を図ることも大切。 	
	以上	

面談録 東京8

2006年11月27日
記録者：青木 憲代

日時	11月27日(火) 午前10:10-11:35	
参加者	日本シルバーボランティアズ理事 日本シルバーボランティアズ理事 日本シルバーボランティアズ参与中国派遣部 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント	羽賀 慧 横塚 武 神服 巖 青木 憲代
収集資料	日本シルバーボランティアズ紹介パンフレット	
場所	日中技能者交流センター本部事務局	
概要	<p><神服参与> 日本シルバーボランティアズは、元アジア開発銀行総裁、渡邊 武氏の提唱により、経団連、関経連、経済同友会、日本商工会議所の諸団体、民間企業の支援により、1977年に発足し、これまで、27年間67カ国に3800名を超える人々を派遣してきた。中国に対しては、3600人を派遣してきた。これまで旅費をJICAが出していたが、独立法人化に伴い、現在では、航空運賃は中国側が出している。財源は、外務省管轄の財団法人として個人や法人や助成金から資金で賄っている。会員制度であり、現在500名が会員となっている。</p> <p>1 目的 中高齢者が長年にわたって蓄積した技術、技能、知識、経験を生かし、発展途上地域を支援すると共に、その他の文化を理解し、友好親善を図るのが目的。</p> <p>2.派遣対象者 高齢者であれば、年齢制限なし。自ら健康と自認するもの。当該技術について長い経験の蓄積があるもの。通訳の提供者は、受け入れ機関や省の組織の中から通訳が選ばれたりする。</p> <p>3.受け入れ機関・派遣先機関 受け入れ機関は、科技交流中心。</p> <p>4.派遣前研修 日本語教師のみ420時間の日本語教授法の研修をうける。各ボランティアには日本語の通訳がつく。</p> <p>5.派遣の条件 派遣期間は業種によって異なるが一般的には10日-90日の短期赴任。日本語教師のみが1年となっている。費用は運賃と滞在費を中国側が負担する。派遣者に対する報酬はボランティアなので特になし。日本シルバーボランティアズ側からは海外旅行保険が支払われる。</p> <p>6. 派遣地域 チベットを除く、各省の貧困地域の農村や公司。内陸の新疆には派遣していない。青海にはボランティア貯金の植林事業が行われた。</p> <p>7. 派遣状況と効果 中国に対しては、農林水産業が70%の割合で最も多く、工業、産業分野の派遣は、20%ぐらいである。日本語教師は、年に14人派遣してきているが、今年是要請がでていない。農場などでの実習と教室での講義を行う。講義は基本的に実習のための講義である。換金作物が多いため、技術が移転されると地域の発展に寄与し、農民の生計向上につながる。</p> <p>8. 帰国後の活動 ボランティアの中にはリピーターとなって中国から指名がかかることがある。何度派遣されてもよく、このシニアボランティアを20年繰り返し行っているものもある。85才となっても、年数がたった巧の技なので、移転効果がある。</p> <p>9. 今後の展望 今後も同じように継続していく予定である。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

面談録 北京1

2006年11月14日
記録者：青木 憲代

日時	11月12日(日) 午後16:30-19:00	
参加者	青年海外協力隊内モンゴル自治区オルドス市第三中学日本語教師 青年海外協力隊広西壮族自治区広西師範大学日本語教師 青年海外協力隊湖南農業大学日本語教師 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント	宮原 雅代 木佐貫 麻美 磯田 彰 宇田川 和夫 青木 憲代
場所	JICA 中国事務局	
概要	<p><宮原隊員> 一代目の隊員。活動内容は、発音指導、教授法、作文指導で、近年英語を選択する生徒が増えて、日本語を選択する生徒は少なくなっている。英語を選択する生徒と日本語を選択する生徒の割合は、9対1である。受験が通りやすいなどの日本語のメリットも少なくなっており、また、内モンゴルでは、日系企業もほとんどなく、時々、オルドスのカシミヤを買い付けに来る日本人がいるくらいであるので、学習の動機が薄い。大連では、日系企業の進出に伴い、中等教育でも日本語が選択される。ハルピンは市の保護があり、中等教育における日本語教育が強化されている。現職参加なので、日本の中学校と文通をし、映画やビデオや行事などの紹介のDVDを使い、生の日本語や日本の文化に接する機会を増やしている。問題集がないので、問題集を作ってほしいと学校から頼まれて作成した。日本語教材は、人民教育出版社の日本語教育用「日語」を使っている。高校の先生の給与は新卒で1400元である。オルドスは10年ほど隊員が派遣されていなくて、久しぶりの派遣。宮原隊員の派遣により、日本に対する印象や理解が深まったと現地の人から言われるという。</p> <p><木佐貫隊員> 6年前に日本語科ができた。一代目の隊員。韓国語と英語の学科がある外国語学院の中の日本語科で教えている。スピーチコンテストの際には、小学校、音楽、作業療法士などみんなで審査員を行う。広西の桂林では、英語より日本語の方が就職しやすい。就職先がなければ、広州に出て就職をする。中国の南部では、日本語を話せる人が少ないため、英語科よりも、就職しやすい。広西師範大学では副教授で月の給与が2400元ぐらいである。個人契約で外国から来る日本語教師には、3000-3500元ぐらい支払われる。木佐貫隊員は将来中国との関係で仕事を続けたいと思っている。</p> <p><磯田隊員> 湖南農業大学の外国語学科日本語科で教えている。中国人日本語教師は13名いる。大学3年の12月までに国際交流基金の日本語能力検定試験(学習時間900時間の内容)に合格すれば、目的が達成されるため、4年生は日本語を学ぶ意欲を失いやすい。就職については、情報が限られており、あきらめが早い。省内出身の学生が70%を占めるが、就職先は、広州を考えている学生が多い。磯田さん自身は、湖南に来る前に個人契約により南京で日本語を教えていた。湖南農業大学で、会話、作文、日本概況を教えている。湖南省内の大学の本科、専科、中等教育の14校の日本語科が協力して行う「湖南まつり」が大きな行事である。日本語を学ぶ生徒が参加する日本紹介の行事。剣道、華道の先生による実演もある。スピーチコンテスト、作文コンテストもある。対日感情を考慮してポスターなどの大きな宣伝はしない。大使館、国際交流基金の支援を受けて実施。磯田さん自身は、帰国後日本で就職するか、中国で仕事を見つけることを考えている。中国では、日本語教師の機関紙「日和」があり、教師間のネットワークを図っている。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

面談録 北京2

2006年11月14日
記録者：青木 憲代

日時	11月13日(火) 午後16:40-17:40	
参加者	韓国国際協力団中国事務所所長 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント	南 淳恵 青木 憲代
収集資料	KOICA “Cooperation for a Better World” 韓国国際協力団中国事務所「国人共同推進、国際先進援助」	
場所	KOICA 事務所	
概要	<p><南所長> 派遣の目的は、韓国と中国との友好・相互理解の促進と貧困地域における福利の向上である。</p> <p>1. 派遣実績 1994年から中国で韓国協力隊員(Korea Overseas Volunteers: KOV)が派遣され始め、2005年までの累計は146人に及ぶ。職種は、韓国語がもともと多く、IT、幼児教育、看護師、野菜栽培、テコンドー、服飾などの指導にあっている。</p> <p>2. 派遣対象者 20才から61才のボランティアが対象である。</p> <p>3. 受け入れ機関・派遣先機関 教育機関では中小都市の中等教育、大学などが多い。地方におけるチーム派遣では、県レベルの派遣もある。</p> <p>4. 派遣の条件 中国での生活手当では、330USドル。旅費、生活費、医療保険は韓国国際協力団が負担。任期は原則2年。延長は、1ヶ月から1年。</p> <p>5. 派遣前の研修 研修は、10週間行われ、300時間の中国語の学習が含まれる。その他、中国の文化や伝統や歴史の理解のための講習などがある。</p> <p>6. 派遣後の現地研修 2週間の派遣後の現地研修があり、この中に適応期間として中国語を学び、派遣先でのOJTが含まれ、これからの計画を考える時期にあたる。</p> <p>7. 派遣状況 ほとんどの隊員の評判はよい。多くの隊員は中国が好きになる。科技部や科技厅では評価はしないが、受け入れ先が評価をしている。また、基本的に学校教育と方針に従い、同じ職種同士での研修会を開いて、勉強会を持っている。</p> <p>8. 帰国後の就職 中国関係の仕事に就くものも多い。自分で探すことが多い。本部では、元協力隊員の支援室があると聞いている。</p> <p>9. 社会的還元 帰国隊員が同窓会を作っており、中国友好関連の活動を行っている。</p> <p>10. ベストプラクティス 山東省の韓国語教師の隊員が中国のテレビ局の特集の対象となり、30分間の隊員の中韓友好の活動の報道がされた。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

面談録 北京3

2006年11月24日
記録者: 青木 憲代

日 時	11月23日(水) 午前10:00-11:45
参 加 者	VSO(Voluntary Service Overseas、英国海外志願服務社) 李 国志 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 青木 憲代
収 集 資 料	英国海外志願服務社(VSO)、VSO HIV and AIDS Pack、VSO in China VSO China Newsletter Issues 1, 2006/11/24 VSO China Country Strategy Paper 英国海外志願服務社「教育領域の計画 2005 平方-2007」
場 所	国際大厦 8F
概 要	<p><VSO 概況> VSO は政府系の社団法人であり、非営利組織である。資金の70%は Dfid から、その他の資金は、世界銀行、EU、CIDA などからである。現在は、英国人のみならず、他の国籍のものも派遣されるようになっている。全世界に地域事務所を持つ。</p> <p><目的> 中国における VSO の活動目的は、格差是正、貧しい地域の生活向上である。</p> <p><派遣地域> 現在、新疆、宁夏、江西、青海、陝西、雲南、甘肅、貴州、広西壮族自治区である。2年前から、対象としている分野は、基礎教育と HIV/AIDS であり、受け入れ機関は地方の教育局であり、地方の教育学院が研修などを行う。ボランティアの派遣にはいくつかの種類がある。</p> <p><ボランティアの種類></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 長期ボランティア (国際ボランティア) 英国やそれ以外の国から選ばれて、今年は56人のボランティアが派遣された。主に英語教師である。要請がでたら、英国や他の海外事務所にその要望書を送るが、基本的に北京事務所が最終的に決定する。 2. 短期国際ボランティアは6ヶ月以内のボランティアで今年は10人が来た。 3. 青年ボランティアは、基本的に1年であり、英国や各国から HIV 研修やコミュニティにおける教育などに携わる。要請がでたら、英国や他の海外事務所にその要望書をおくるが、基本的に北京事務所が最終的に決定する。 4. 中国人ボランティア 2年前から開始されたプログラムであるが、約100人が今年は参加した。年齢に制限はない(18-75歳)。学生が経験を求めて参加することが多い。一ヶ月、一週間、週末など期間はさまざま。学校の休暇を使うことが多い。基本的に各省の師範学院で研修を受け、コミュニティに入って、HIV 予防指導や基礎教育の指導を行う。選考にあたっては、経験やスキルを重視する。北京の事務所でリクルートする。甘肅などの HIV/AIDS 予防プログラムでは、現地に国内志願者機構があり、そこで研修を受ける。北京でリクルートされ、パートナーとされる現地受け入れ先が志願者を選考する。 <p><これまでの成果> 年次ボランティア会議を行い、効果などについて話しあっている。中央と地方とでリクルート、受け入れるパートナー、派遣先である小学校やコミュニティとシステムができあがっており、持続的な影響がある。特にボランティアに参加した中国人たちは、ボランティアはよいことだという認識を持つようになっている。</p> <p><帰国者の社会的還元> 帰国者は将来的にその社会における重要な人材となる。貿易や交流で中国に関わり、また中国に戻り、ボランティアを続けるものもいる。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>

面談録 北京4

2006年11月24日

記録者：青木 憲代

日 時	11月23日(木) 午前16:00-17:45	
参 加 者	世青中学校長 世青中学中文教師 世青中学中文教師 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント	王 虹 何 濟平 銀 雪 青木 憲代
収 集 資 料	国際文化フォーラム通信 No.71 日本語教育関連事業紹介	
場 所	世青中学校長室	
概 要	<p><20年間協力隊に日本語を教えて> 600人を教えて、みんな、1ヶ月の北京での中国語教育を受けて、卒業式には感動して涙をながす隊員も多かった。赴任先から手紙を書き、帰国後も連絡を取り合っている隊員も多い。</p> <p><世青中学> 現在、世青中学私立中学であるが、以前は科技庁第50中学校の公立学校であった。何先生は、第50中学校の公立学校で協力隊を教え始め、この学校が私立化しても、継続してこの中学で協力隊に中国語を教えている。</p> <p><中国語の教材> 初代隊員は4人いて、その時は教材もできていなかったもので、外部で購入した教材で教えた。そのころは、暖気(スチーム)が入っておらず、寒い教室で授業を行った。そののち、協力隊用の教材を作成し、現在では、時代が変わり、また協力隊の置かれる状況も変わったため、教材をこれまで4-5回改訂している。なるべく実用的なものにするため、買い物、道を渡る時の注意、領収書の取り方、偽札に対する注意、必要な書類の書き方、ビザの手続き、郵便局でのサービスの受け方や活用の仕方、バスの乗り方などを教材に含めるようにした。これらの会話は、ロールプレイで練習するようにした。二人につき、一人の先生がついた。中国の家庭訪問として何先生のお宅に隊員がお邪魔し、餃子をつくるという体験も訓練の中に入っていた。何先生の自宅には練習のためバスで来るように指導した。</p> <p><主だって活躍をした人> 600人も20年間で教えているが、記録に残っている人をあげれば、杭州に日本語教師として派遣された女性隊員は、テレビ局の中国人と結婚し、杭州に言語学院を設立した。杭州市の荣誉市民賞を受けた。広西壮族自治区の柳州は洪水地域であり、幼稚園教諭が子どもたちを救うためにさまざまなことをし、帰国後もまたもどり、資金を提供して幼稚園の建て直しをした隊員もいる。内モンゴルの隊員で陸上競技の隊員が指導した教え子が国際北京マラソンで優勝した。看護師は、特に優しくて現地のひとから人気がある職業である。87年ごろに婦人子ども服で遼寧省の錦州に派遣された隊員は、優れたデザインをし、帰国後、服装関係の日中貿易に携わった。大貫隊員は、大変優しい人で、野球の第一人者として活躍した。中国の女性と結婚した。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

面談録 北京5

2006年11月24日
記録者：青木 憲代

日 時	11月23日(水) 午前13:30-14:45	
参 加 者	日本国際交流基金北京事務所専門家 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント	小西 広明 青木 憲代
収 集 資 料	国際文化フォーラム通信 No.71 日本語教育関連事業紹介	
場 所	国際大厦 8F 南楼、国際交流基金北京事務所	
概 要	<p><国際交流基金の基本的事業> 日本語教育専門家の派遣、日本語教師研修、日本語教材の制作支援、日本語能力試験の実施など。また、中国における日本語教育に関する調査を行っている。</p> <p><目的> 1.地域を拡大する 2.教育段階ごとに支援する</p> <p><日本語教師の種類> 1.ジュニア専門家2名 2.専門家2名(北京事務所に1人、大連中日人材開発センターに1人) 3.香港に専門家1名</p> <p><中国の日本語事情・需要> 中等教育機関の日本語教育は、東北三省が80%を占める。第一専攻が日本語の大学は北京でも21校ある。副専攻であれば、350校ある。日本語を教える機関数は増えている。日本語能力試験は、一昨年は、11万人であったが、昨年は14万人、今年は21万人受けている。このうちの半数は、中国の日本語学習者である。</p> <p><校種別研修会> 基金では、中等教育日本語教師研修会を一週間北京で行い、隊員も講義をしている。作文指導や教授法についての研修である。東北遼寧省の岩田隊員、中村隊員が講義をしてくださった。大学の先生方のための研修も一週間北京で行っている。協力隊は、インターネットやDVDを活用した日本語学習の提案についての講義をしたりする。これらの研修には100人ほど中国全土から日本語教師が参加する。</p> <p><教材助成> 教材助成には2種類あり、本部助成と北京事務所助成とがある。隊員が北京の助成を受けたことがある。</p> <p><教材支援> 協力隊の方によく使っていただいているのは、北京の図書館にある教材で、これは申請すると郵送で任地に送ってくれる。図書内容は、ウェブ上で図書内容リストがあり、これに基づき申請することができる。</p> <p><今後の日本語教育の拡大の可能性のある地域> 雲南、貴州、甘肅、青海など西部、南部が開拓の余地があるのではと考える。</p> <p><ネットワークや情報発信> 中国における日本語教師のメーリングリストをつくっており、600人が入っている。300人が日本人で300人が中国人である。研修や助成事業の情報や図書館の到着案内がメールで配信される。また、隊員の間でも地域ごとにネットワークがあり、勉強会をひらいたりしていることを聞いている。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

面談録 北京6

2006年11月14日
 記録者： 宇田川和夫

日 時	11月13日(月) 17:00-17:30	
参 加 者	JICA 中国事務所 次長 協力隊担当 JICA 中国事務所 医療分野、四川省涼山担当 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント	藤谷 浩次 今間 智子 宇田川 和夫
配 布 資 料	青年海外協力隊保健医療分野資料 中日看護学術交流会報告書 2005年8月 中日看護学会論文集録 2006年9月(部分コピー) 喜徳の光(中日協力涼山信頼農園パンフレット)	
場 所	JICA 中国事務所	
概 要	<p><藤谷次長></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 次長の望んでいる報告書の狙いは、散逸した記録や個人の記憶をまとめ、きちんとした記録に残すことと、JOCVの意義をきちんと示すこと。背景として、中国の一人当たりGDPが1700ドルを超え、無償資金協力も行えなくなる。円借款がなくなり、技術協力や協力隊も手付かずでいられるとは限らないという危機感がある。 <p><今間調整員></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 現在派遣中の職種は看護師、理学療法士、作業療法士。今後派遣予定なのは公衆衛生分野、ソーシャルワーカー、エイズ対策、保健師。 2. 看護師の活動は、病院及び看護学校において、接遇にかんする助言及び日本の看護方法を紹介すること。グループ活動として、看護学会交流会や学習会の実施、日中看護学会への参加など。 3. 衛生部所属の病院は1, 2, 3級があり、それぞれが甲乙に分類される。3甲が最高の中核病院。設備も充実している。徐々に2級病院に派遣先を換える予定で、現在は3級と半々。 4. 看護学校に送っていた隊員も、病院内の業務の隊員に換えていく。学校は言葉がネックとなる。 5. 中国では、病院に居る医者と看護師の数が少なく、点滴や注射を行うので手一杯。看護は家族に任せるといやり方だが、患者たちは隊員のやり方を支持している。 6. 現在の方向性としては、看護の方法を中国人看護師に教えるのではなく、患者の家族に教えるようにシフトしている。 7. 協力隊の看護師の技術は、何代も継続して積み上げる技術ではない。技術移転は初代で終わってしまうだろう。 8. 湖北と広西では隊員が連携して中国側を巻き込んだ活動になった。先進的な研究をしている中国人に来てもらう。今後の派遣先として計画されているのは広西自治区の柳州市、河池市、十堰市 9. リハビリは3甲の病院にしかない。主に病院内の治療及びリハビリスタッフへの助言。 10. リハビリの必要性は交通事故や脳卒中などの危険がないとだめ。 11. 交通事故と脳卒中が増え、リハビリの需要が高まってきている。 12. 理学が先、作業は後のほうがよい。今は作業も入っている。 13. 四川省 涼山民族中学(イ族)で、日系企業就職に有利なように職業クラスの中で日本語を教えている。第1期生の李さんが先生となっており、友貞シニア隊員が日本語の指導を行っている。李先生とフェリシモという日本の通販会社が始めた信頼農園というNGOは生計向上のため有機米作りを行っているが、友貞隊員も支援している。 米は、国内での正式な販売許可が下りていないので、日本人向けのフリーペーパーを通して販売している。 14. JICA 林業プロジェクト関係者と周辺の隊員とのゆるい連携として、涼山会というNGOを設立し、週1回、イ族の学校でのボランティア活動を行っている。 <p style="text-align: right;">以上</p>	

面談録 北京7

2006年11月14日
記録者： 宇田川和夫

日 時	11月13日(月) 午前10:30-11:00	
参 加 者	在中国大使館一等書記官 JICA 中国事務所協力隊調整員 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント	武隈 義一 渡邊 憲夫 宇田川 和夫 青木憲代
配 布 資 料	なし	
場 所	在中国大使館	
概 要	<ol style="list-style-type: none"> 1. 毎年 ODA 民間モニターが行われ、中国でも隊員の現場訪問を入れている。昨年は山形の米沢から参加があった。 2. 大使館として他の援助スキームとの連携を推進しているわけではない。 3. 関与しているわけではないが、四川省植林プロジェクトにおける協力隊との連携を成果としてあげることができると思う。友貞さんの活躍も注目。 4. 湖南祭りなど、日本語祭りには大使館の広報文化部が協力している。大使館から参加する場合もある。 5. 日本語祭りは地域に溶け込むひとつの方法で、日系の会社も支援する場合があるようだ。会社によっては CSR の一環としてボランティア活動を行っている。例えばイトーヨーカドーは北京に店舗を出すに当り、学校建設や機材供与を行っている。 6. NGO は無数にあり、大使館に連絡をする義務も無いので、実情把握ができていない。 7. JOCV の特色は、現地密着型であるということ。病室や教室を改良した住居に住んでいる。 8. 自分としては、昨年のデモがあったとき、隊員の任地ではどのような状況であったのか興味がある。 9. 中日リハビリセンターの専門家が地方の隊員派遣先と連携して中国の医療関係者を訓練するという案もある。 10. 看護隊員は看護の考え方が日本と中国では全く違うため、孤軍奮闘している。 <p style="text-align: right;">以上</p>	

面談録 北京8

2006年11月14日
 記録者： 宇田川和夫

日 時	11月13日(月) 13:00-13:30
参 加 者	元 JICA 中国事務所協力隊調整員 (現日本科学技術振興財団 北京代表部) 李 清 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 宇田川 和夫 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 青木憲代
配 布 資 料	
場 所	日本科学技術振興財団 北京代表部 (JICA 事務所と同じフロア)
概 要	<ol style="list-style-type: none"> 1. 1988年から1997年まで国内スタッフとして勤めた 2. 1989年の天安門事件は、地方でも影響が有った 3. 丁度その時、内モンゴルのマラソン隊員の杉本隊員のところで問題が起こったと連絡が有り、所長と共に現地に出張した。有能な選手と期待された胡選手が休暇から遅れて帰ってきたのに怒った杉本隊員が殴ってしまった。他の教官からも批判が起こり、大問題になりそうだったが、結局胡選手が予定とおりに合宿に戻れないという連絡を入れたのに、それを受けた教官が杉本隊員に通知しなかったことが判明。杉本隊員が殴ったのも、将来のある選手を厳しく育てたいという気持ちから出たものとわかり、誤解が解けた。胡選手はその後中国一のマラソン選手となり、杉本隊員に感謝している。 4. 隊員の要請はたくさん出てくるが、科技部が地方からの要請を絞り込んでいた。地方では日本の優れた技術者が来てくれるとの過剰な期待を持っていた。その後、中国人と一緒に働ける人、中間技術を持った人だという理解が進んだ。 5. 大都市では協力隊の技術レベルでは役に立たないが、地方では農業分野でも協力隊の技術は役立つと思う。 6. 野球の大貫隊員は技術・人格共に優れた人で、当時の科技委でも高い評価を受けた。中国人と間違われ、National Team に誘われるという逸話もある。残念ながら最近、早世した。中国人の奥さん。 7. 遼寧省でブドウを育てた中込隊員も心に残っている。 8. 李さんの今の上司である加藤芳宏さんも日本語隊員 OB. 9. 湖北省??の看護隊員は、配属先の病院が放射性廃棄物を違法投棄していることを告発し、最後には病院側も折れた。 10. 李さんと話した後、事務所に居た鎌田美穂隊員と話す機会があり、H13年隊員の藤村さんが地元紙で病院の看護の欠点を指摘し、患者たちから大いに感謝されたというエピソードも聞けた。今でも現地で話がでるといふ。 11. 蒲田さんは湖北師範学院の4代目の日本語隊員で、3代目までが日本語科を作るための下地作りに貢献し、4代目でやっと実現した。これも大きな功績。 <p style="text-align: right;">以上</p>

面談録 北京9

2006年11月15日
記録者： 宇田川和夫

日 時	11月13日(月) 16:20-16:40	
参 加 者	湖北省科技厅 対外科技合作処主任 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント	孫 剛 宇田川 和夫
配 布 資 料		
場 所	JCA 中国事務所	
概 要	<ul style="list-style-type: none"> ・青年招聘プログラムの派遣前研修を受けているところ。明日から日本に2週間派遣される。 ・日本の他に韓国も担当している。 ・日本語が達者で、インタビューは全て日本語で行った。 ・協力隊に望まれるのは、技術面では同僚の技術力のアップ。もう一つが友好で、一緒になって働くことが大切。 ・刑門市に派遣された看護師隊員の活躍が印象的。(注 荆州市に派遣された三田千鶴、佐藤 梓、庭野恵隊員のことと思われる。 ・3年前に黄冈市に派遣された初代幼稚園教師の岸本さんも印象がある。 ・荆州に派遣されたサッカーの柘植隊員はサッカー学校の人気を高めた。 ・十堰市のホテルで観光業を指導した斉木桃子隊員も明るくて良かった。 ・湖北師範学校では、4代の隊員の努力の結果日本語科が昨年できた。貢献度大。 ・平野調整員との話で、湖北大学に日本語隊員を入れ、活動を活性化し、湖南省の日本語祭りと同じような活動を開始するという案が出ている。 ・湖北省科技では、2年に1度、省内の全隊員を招待して会議と観光を行っている。 <p style="text-align: right;">以上</p>	

面談録 北京10

2006年12月2日
記録者： 宇田川和夫

日 時	12月1日(火) 午前 10:20-11:20
参 加 者	中日友好病院 外事処 副処長 祭 福軍 中日友好病院 リハビリ科 医師(CP) 謝 欲暁 JICA 中国事務所 スタッフ (通訳) 王 莉 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 宇田川 和夫
配 布 資 料	
場 所	中日友好病院 外事処
概 要	<p><謝医師></p> <ul style="list-style-type: none"> ・3人の異なる職種(PT、OT、ST)の隊員と働いた。 ・最初は1987年に日本のリハビリ協会の会長であった津山真一氏が病院を訪問し、半年間に渡って40人のリハビリ師が中日友好病院でリハビリの基礎を教えた。新しい医療分野の紹介だった。 ・同年、鈴木隊員がPTとして赴任した。1991年にはOTの木下隊員が赴任した。 ・日本ではPT、ST人材が多いようだが、派遣された二人は経験が豊かとは言えなかった。 ・だが、2人とも中国側CPと良い人間関係が築けた。特に木下隊員は明るく、友人ができた。 ・最後に来たSTの大西さんが一番病院に貢献した。 ・STは日本でも少ない職種だが、経験豊富な大西さんが来てくれたのは幸運だった。 ・赴任当初は中国語ができないので心配したが、勉強して一生懸命STの仕事について中国語で講義を行った。中国語の他に英語や日本語も混ぜて講義が行われた。 ・責任感が強く、何かアイデアを提案すると、まじめに受けとめて、応えてくれた。 ・半年後にはリハビリの講義だけでなく日本語の授業も開始した。 ・大西隊員は職歴が長く、知識も豊富だった。たぶん、大学で教育と言語の学位をとっていたと思う。 ・CPのSTは1人だったが、大西隊員はSTの治療に同行し、その後に様々な助言をした。 ・帰国の時は、皆で大きなTシャツに「縁」という字とともに寄せ書きをした。15人くらいの方が書いたと思う。 ・大西隊員は、その後専門家として中日友好病院に赴任した。 ・大西隊員は、燕下の治療について、中国で始めて治療のマニュアルを作成したパイオニア。今でも使われている。発生障害も担当した。 ・専門家の時に、太田先生というコミュニティー中心のリハビリの権威を中国に呼んでくれたのも良かった。 ・中日友好病院のリハビリ科は全国でもレベルの高いことで有名。 ・リハビリ担当は自分の分野だけでなく、他の分野の知識も持っていないといけない。 ・地方都市でのリハビリのニーズは高いが、現場での理解は低い。リハビリ科の主任でさえ、3つの分野のことを理解していない。 ・地方に出る前に隊員は謝先生の話聞いていくが、彼女たちが苦勞していることは十分に理解できる。 ・中国では、今でもPT、OT、STを分けることが適していないという議論もある。 ・病院によって異なるが、彼女たちが快く働くには、自分(謝先生)のような医師がいないと難しい。一般的に、中国では先ずPTのほうが受け入れやすいだろう。 <p style="text-align: right;">以上</p>

面談録 遼寧省1

2006年11月15日
記録者：青木 憲代

日 時	11月14日(水) 午後12:30-14:45	
参 加 者	遼寧省人民政府科学技術庁国際合作処副所長 遼寧省対外科学技術交流中心副所長 遼寧省対外科学技術交流中心通訳 北京大来創一杰咨询有限公司通訳 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント	譚 鳳楹 羅 乃明 張 麗麗 韓 璐 青木 憲代
場 所	市内飯店会議室	
概 要	<p><譚氏> 遼寧省では青年海外協力隊を88人受け入れてきた。今後とも友好交流関係を続け、協力隊を派遣してほしい。広い分野における優秀な人材を派遣してほしい。</p> <p>1. 派遣についての満足度 とても満足している。これからも継続的に歓迎したい。何か課題があれば、こちらもすぐに対応したい。技術力と勤務態度に大変満足している。</p> <p>2. 協力隊の効果とその要因 電子機器隊員は受け入れ先の工場の生産性の向上に寄与した。果樹栽培の隊員は、新しい品種を導入して生産の品質を高めた。日本語教師は中国人の日本語能力の向上に貢献し、日本語が話せる人材を育成してきた。成果については、ほぼ目標を達成していると考えている。その理由は、受け入れ体制が整っていたこと。カウンターパートが意欲的だったこと。ボランティアの技術が高かったこと。ニーズが合致していたことなどがあげられる。受け入れ機関とのボランティアとの意思疎通やコミュニケーションがうまく取れ、ボランティアも現地の文化や習慣に溶け込むことができた。スタッフとの人間関係もうまくいき、JICAの支援もよかったことが理由として挙げられる。</p> <p>3. 派遣によるプラスとなった点 スタッフの技術・能力が向上した。受け入れ機関のサービスが向上した。日本人の仕事への姿勢や取り組み方のスタッフへの影響があったなど。日本人の生活様式や経済や文化について理解し、また、両国の歴史理解も相違があることを相互の立場で理解することができた。</p> <p>4. 受け入れたい職種 教師、年長のボランティア、技術者</p> <p>5. シニア海外ボランティアに対する期待 シニア海外ボランティアに期待する職種は、遼寧省の発展の状況から言って、設備保守、科学工業、IT、農業、加工業など技術の高い人を希望している。</p> <p>6. 他のボランティアとの比較 他のボランティアとの比較では、技術移転と技術提供の点で日本のボランティアは優れている。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

面談録 遼寧省 2

2006年11月15日
記録者：青木 憲代

日 時	11月15日(火) 午前10:00-11:15	
参 加 者	瀋陽市朝鮮族第一中学校学校長 青年海外協力隊瀋陽市朝鮮族第一中学校日本語教師 瀋陽市朝鮮族第一中学校日本語教師 瀋陽市朝鮮族第一中学校日本語教師 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 北京大来創一杰咨询有限公司通訳	白 聖男 中村 直子 超 海淑 鄭 燕 青木 憲代 韓 璐
場 所	瀋陽市朝鮮族第一中学校	
概 要	<p><白校長> 大久保隊員が前任者であり、後任の中村隊員がきて、日本語教師のレベルアップを図ることができ、生徒の日本語の発音もよくなった。中村隊員は大変真面目な隊員で、授業や課外活動に対して中国の教師以上に勤勉に活動を行ってくれた。生徒が瀋陽市の日本語コンテストで良い成績を修めることができたのも中村隊員のおかげである。</p> <p><中村隊員> 1.日本語クラスの概要 中国人教師は6人、日本人教師は中村隊員のみである。2代目の隊員である。あと数ヶ月で帰国するが、後任の隊員がくる。1年生から3年生までの会話と作文の授業を週7-8時間持っている。その他、日本語クラブ活動を週に2-3回を担当している。日本語クラブでは、日本の文化生活などについて紹介するもので、希望者が参加している。人気があり、定員をオーバーしているので、日にちを分けて何回か同じ活動を行っている。</p> <p>2.日本語の学習の動機について 英語ブームであり、日本語の人気は低下している。朝鮮族にとって日本語は学びやすいので、大学受験の際に有利であるが、現在は、英語の希望者が3に対して、日本語の希望者は1である。10年前は、英語の希望者がいなかった。ほとんどが日本語を希望した。</p> <p>3.派遣された感想 以前、湖南省において個人契約で日本語を教えていたが、瀋陽に来て、また違う経験ができとても満足している。職場環境もよく、中国人教師との関係もよく、特に問題はない。研修会や日本語弁論大会の準備を行っており、国際交流基金のジュニア専門家と瀋陽の日本語教師とで日本語教師レベルアップのための研修会を開き、瀋陽の日本人会主催の日本語弁論大会の準備などをして、大変であるが、それぞれの活動に関わり充実した日々を送っている。</p> <p>4.帰国後の計画 日本語教師を続けたい。中国との関わりが長いので、中国の日本語教師をする可能性が高い。</p> <p>5.中国の日本語教育への期待 小学校、中学校、高校の生徒が早いうちにネイティブに接することができれば良いと考えている。日本語を学び、使える場所が提供されるとよい。大連では、3000社の日本企業があるため、日本語のレベルは相当高くないと就職できない。</p> <p>6.日中関係についての理解 東北三省は、南方の省よりも親日的である。日本鬼子とマスコミが一方向的に報道するのを鵜呑みにする地方と異なり、満州の時代からの日本人との接触があり、日本に対する関心や理解度も高い。しかし、歴史教育は、事実を教えるようにして、毎年9月には国の恥を今後かかないように、抗日戦争記念行事が行われる。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

面談録 遼寧省3

2006年11月16日
記録者：青木 憲代

日 時	11月16日(木) 正午12:00-13:00	
参 加 者	遼陽市対外科学技術交流中心 遼寧大学外国語学院日語・語文学教授 遼寧大学外国語学院 遼寧大学外国語学院国際交流処 療陽天河消防自動設備製造有限公司 遼陽市光栄院院長 北京大来創一杰諮詢有限公司通訳 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント	王 魯傑 張 萬夫 李 敏 孫 君 孫 経徳 王 勇 韓 璐 青木 憲代
場 所	市内賓館会議室	
概 要	<p><遼寧大学張教授> 遼寧大学外国語学院日本語学科では青年海外協力隊を5人受け入れてきた。協力隊の協力により教員が向上し、能力や日中交流ができた。機材も入れていただき、その時の協力を感謝している。</p> <p><紅光機械工場、清水隊員の元同僚> 精密機械の職種の昭和62年3次隊清水多門隊員の同僚として当時の国営企業の新商品である測定器の開発にあたった。この機械の開発は成功し、科学技術振興賞をとった。当時共に仕事をし、生活をしてきた同僚は、鮮明に清水隊員のことを覚えている。勤勉で、無駄なことをせず、開発の段階では、開発するモデルを日本から取り寄せてくれた。アパートから3キロある工場まで毎日自転車で通い(冬は零下15度)、無遅刻、無欠勤で生活や仕事について不足をもらったことは一度もなかった。従業員とのコミュニケーションもよく、他人にとっても優しい人であった。旅行に誘っても行かずに仕事をしていた。時々休日にも仕事にあたっていた。</p> <p><遼寧大学外国語学院日語科> 1989-1999年の十年間、内田優子隊員、西川恭子隊員、山下亜樹隊員、藤井ちひろ隊員、榊原悦子隊員の5代が日本語教師として派遣された。会話、作文、文学、日本概況を担当してくれた。隊員のいる間には、教員は隊員から日本語を学ぶことができ、また協力隊と遼寧省の国際協力基金の日本語専門家、省内協力隊、瀋陽総領事館などの協力により、「春まつり」を1995年に開催した。イベントの内容は、講演、文化紹介ショー、もちつきなどをした。この「春まつり」はスポンサーの関係で1995年のみ行われた。当時は、遼寧大学主催のスピーチコンテストを大連市や瀋陽市の日本語科と協力して行っていた。また、日本語科に必要な機材も入れてくれて感謝している。卒業生の30%は日本へ留学している。中学校の日本語の先生になったり、企業で通訳をしていたり、就職先で日本語を使ったりしている。この日本語学科の生徒が日本へ行った場合は、目的などが明確であり、日本に対する悪い思いを持って帰るものはいない。</p> <p><遼陽市対外科学技術交流中心王氏> 平成1年1次隊古川美保隊員は、婦人子ども服を職種として、遼陽服装第一工場(当時国営企業)において、積極的にオムツに近い尿漏れを防ぐ新製品を開発した。また、平成2年1次隊林治彦隊員は、縫製の職種として、療陽服装第二工場の国営企業で協力をし、福井県の大野市との交流を深め、商工会などとも交流を深め、大野市に工場の研修生を送った。これらの功績は、現在、日本の遼陽富華服装有限公司の設立に寄与し、日本との経済交流を深め、療陽市の雇用を促進した。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

面談録 大連市

2006年11月18日

記録者：青木 憲代

日 時	11月17日(金) 午前13:00-14:45	
参 加 者	大連市人民政府科学技術局国際合作興招商処 項目官員 大連市第三十中学校書記 青年海外短期派遣隊員大連市第三十中学校日本語教師 大連市第三十中学校日本語教師 大連市第三十中学校日本語教師 大連市第三十中学校日本語教師 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 北京大来創一杰諮詢有限公司通訳	姜 述鋒 王 風敏 飯田 美穂子 張 玲 郭 愛軍 孫 麗芬 青木 憲代 韓 璐
場 所	市朝鮮族第一中学校	
概 要	<p><王書記> 現在、飯田短期隊員が日本語教師の授業を持っている。その後、後任が来ることになっている。2003年から2005年まで、田島芳美隊員が初代隊員としてこの大連市第三十中学校に来てくれて、日本語教師は田島隊員から日本語を学び、日本の文化や生活について学ぶことができた。スピーチコンテストでは、田島隊員のおかげで、大連市第三十中学校が2年連続して優勝して、この中学校の人気を高めてくれた。生徒は、田島隊員のおかげで聞く能力や話す能力が向上した。</p> <p><張女士> 田島隊員とは一緒に寝泊りをしたり、お買い物にいたりして、日々共に仕事と生活をし、いろいろな経験をした。田島隊員が旅行に行くと、行った先のモンゴルなどの写真や暮らしも紹介してくれて生徒たちは大変興味をもって田島先生の課外授業に参加した。</p> <p><姜官員> 現在は科学技術庁に努めているが、以前は大連外国語学院で日本語を教えていた。大連外国語学院10年前は、80人ぐらいしか日本語を学ぶ学生がいなかったが、日系企業の進出に伴い、10年間で10倍増えて、800人の日本語を学んでいる。英語よりも大連では、日本語の人気が高い。現在は、大連では日系企業の進出が4000社以上にも及んでいる。</p> <p><飯田短期隊員> 新しい日本語教科書ができ、2006年から使うようになり、会話を重視した日本語教育が始まった。課外授業としては、教育学院(教育委員会のようなもの)が支援して大連市の日本語教師の研修会を開催している。また、国際交流基金の専門家とも研究会を年2回持っている。活動内容は、田島隊員と基本的に同じである。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

面談録 河南省1

2006年11月19日

記録者：青木 憲代

日 時	11月19日(日) 午後12:30-14:45	
参 加 者	河南省人民政府科学技術庁対外交流中心主任兼 河南省中国事務技術中心主任 河南省対外科学技術交流中心副主任 河南省対外科学技術交流中心項目部部长 北京大来創一杰咨询有限公司通訳 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント	荆 明新 馮 國湘 衡 杯生 韓 璐 青木 憲代
場 所	市内飯店会議室	
概 要	<p><荆主任> 河南省ではこの20年間で青年海外協力隊28人を受け入れてきた。今後とも、協力隊を継続して派遣してほしい。河南省は中国の真ん中にあり、昔から中原を制するものは、中国を制すると言われてきている。現在でも河南省は、中央政府からの要請により、交通、穀物生産、エネルギー、高度な技術の要衝としての役割を担ってきている。河南省は、9700万人と中国一人口が多く、地域GDPは、広東、浙江、江蘇、福建に次ぐ中国第5位の経済を誇っている。農業生産も中国の穀物生産の3分の1を河南省が行っている。工業の発展も目覚しく、重要な中西部開発プロジェクトを牽引する省としての役割を担っている。日本は世界GDPの第2位であるが、中国は第5位に入っている。来年には、世界GDPの第4位になると予測されている。歴史的経緯からすれば、河南省は黄河文明の地であり、宋代以前の政治中心都市であった。河南には4つの古代の都があり、洛陽は9つの時代の都であり、開封は、6つの時代の都であり、鄭州、安陽もかつて都であった。</p> <p>80年代に日本との付き合いも盛んになってきており、河南省と三重県は友好関係にある。鄭州と埼玉県浦和市は友好都市関係でもある。研修生も日本の各地に送っている。今年3月に河南省は、日中技術協力センターを設立し、科学技術庁対外交流中心と科学技術庁の職員で運営し、国際協力の受け入れを強化するようにした。各方面でJICAの協力を受け入れられるようにした。その点で、以前受け入れ体制は弱かったが、今後は、改善すべき点は、改善できると考える。</p> <p><馮副主任> 青年海外協力隊の人々からの評判はよく、友好に寄与している。リハビリの作業療法士は、体の不自由な人や高齢者から評判がよい。また、幼児教育では、精神的理論や教え方について、中国側は学ぶ点が多い。青年海外協力隊の評価がよくて、要望を多く出している。野球の隊員が配属している新郷の体育学院では、二代目の隊員が派遣されており、新郷の野球チームは、中国の上位にレベルが上がった。その他、新郷の体育学院では、柔道などの隊員も要請を出したいとしている。また、河南省でも遅れた地方の都市での需要がある。青年海外協力隊員の良さは、生き生きしており、情熱に溢れている点にある。JICAに対して引き続き、河南省に協力をお願いしたい。KOICAの隊員は、河南省にはいない。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

面談録 河南省2

2006年11月20日

記録者: 青木 憲代

日 時	11月20日(日) 午後12:00-15:00	
参 加 者	新郷市対外科学技術交流中心主任 新郷市科学技術局主任 河南省新郷体育学校校長 河南省新郷体育学校副校長 河南省新郷体育学校野球 CP 青年海外協力隊野球隊員 北京大来創一杰咨询有限公司通訳 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント	宋 以久 評 強明 張 建新 宇 暁 李 勤冬 久保田亮 韓 璐 青木 憲代
場 所	市内飯店会議室、体育学校	
概 要	<p><新郷市概要> 都市と農村合わせて510万人の人口を持つ。4つの区と6つの縣から成る。新飛という冷蔵庫を中心とする家電製品の会社がある。雇用者は3万人。シンガポール出資株主の割合が90%である。現在では、配管を作る企業がもっとも大きな企業であり、雇用者も多い。北京まで高速道路で670キロの位置にあり、中国の中心に位置する。</p> <p><体育学校概要> 体育学校は小学校、中学校、高校とあり、午前中は普通の学校の教育をしている。全校生徒は、300名であるが、授業料は年間2400元であり、条件により支払わなくてもよい生徒もいる。射撃、陸上、バスケットボール、サッカー、バレーボール、テコンドー、柔道、格闘技、ボクシング、野球、テニスがある。生徒は、卒業後、体育大学に入ったり、軍隊に入ったり、企業に就職したりする。</p> <p><久保田隊員> 前任者の白根健一郎隊員の後、冬のマイナス10度の中赴任した。雪が降っていて、この中で野球ができるのかと思った。前任の隊員以前は、野球という授業はなかった。省の代表として現在は、小学生、中学生が選ばれている。資金不足もあり、道具が足りない状況であり、遠征費用も自費で年に一回の遠征しか選手は出られない。遠征先は上海などであり、一人あたり千元かかる。現在、男の子には野球を、女の子にはソフトボールを教えている。指導の中で大切にしていることは、道具を大切にすること、時間を守ることである。4年間で中学生と小学生代表チームが全国で2位になった。中学生と小学生の代表が東京に試合へ行った。学校側が求めることは、省の代表選手になることである。体育学校なので、午前は普通の授業を受け、午後は体育の授業を受ける。野球のチームを作るには、生徒を集めるのが大切。足の速い生徒を勧誘したりする。今後に必要なことは体育局の支援であり、遠征にでたり、他の野球チームと交流会をしたりできるようにすれば、生徒やCPの動機もさらに高まる。上海、広東、北京には、日本企業がスポンサーとなってプロ野球の球団ができています。リーグ戦があるが、テレビに放送されることはない。モデルとして誰か野球選手でいれば、野球の人気も高まる。</p> <p><校長 > 冬は生活条件厳しい中、隊員は、生徒が休みの時期にも、練習のコーチをし、責任感が強く、熱心で勤勉であり、礼儀正しい。本場の野球を学び、中国人コーチ育成をし、生徒からも愛されている。青年の交流に役立っている。日本人に対しても理解が深まった。以前はメディアの先入観があった。</p> <p><久保田隊員のカウンターパート> 白根隊員の時代から野球を教えてもらっている。以前は、陸上選手だった。日本には行ったことがないが、DVDなどで野球の試合をみている。野球は他のスポーツと異なり、条件の厳しいスポーツだと思う。冬の寒い時でも屋外で練習をする。毎日午後6時間は生徒を指導する。野球のコーチを送っていただいて、感謝している。何か要求や期待は日本に対してはないが、中国側体育局の理解と支援を求めている。</p> <p><中国の青年海外協力隊の歴史></p>	

	<p>天津体育学院の大貫隊員は、日体大のコーチをしていた人で、現在でもその業績は、中国の野球関係者から名前を聞く。また、四川省攀枝花市でも3代野球隊員が派遣されている。久保田隊員自身は、四川省攀枝花市で野球指導を行っていた赤井剛史隊員のところへ野球の見学と指導に行った。攀枝花市の野球隊員3代の指導もあり、四川省は強豪チームとなっている。冬場でも半袖で練習ができる恵まれた環境であり、河南とも異なる状況であった。2012年のオリンピック種目から除外されたことは、野球関係者の動機に影響することであるが、2008年オリンピックを控えて、プロ野球など含めて野球への関心が高まっており、中国で野球が根付くためとても大事な時期にある。久保田隊員は、今週末に任期を終え、北京に戻る予定である。後任がこのあと来ることになっている。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>
--	--

面談録 河南省3

2006年11月21日
記録者：青木 憲代

日	時	11月21日(火) 午前15:00-14:30	
参加者	<p>開封市科学技術局副局長 開封市科学技術局国際合作所科長 開封市科学技術局国際合作所副科長 開封市第一人民医院(国家三甲病院)院長 開封市第一人民医院副委員長 開封市第一人民医院科教科 青年海外協力隊作業療法士 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 北京大来創一杰咨询有限公司通訳</p>	<p>孫 勇 周 凱 徐 治湘 陳 利軍 崔 永生 翟 虹霞 藤澤 聖子 青木 憲代 韓 璐</p>	
場	所	開封市第一人民医院(国家三甲病院)会議室	
概	要	<p><医院院長> 協力隊が2代入り、理学療法士の宮沢隊員、作業療法士の藤澤隊員のおかげで新しい理念とリハビリの技術を向上することができた。リハビリ医療は、中国では10年間くらいの歴史が浅く、そのため、日本から隊員が来てくださることにより、役立っている。スタッフに授業をしていただいた。仕事の態度も積極的で、サービスの理念がしっかりしている。現在、後任として理学療法士を望んでいる。開封第一病院は、開封では、もっとも設備の整った病院である。</p> <p><C/Pの李さん> 李さんは日本に2年間日本の病院で日本のリハビリテーションを学んだ経験を持つ。青年海外協力隊は、勤務態度もよく、患者から人気がある。言葉のハンディを乗り越えて、勤務した。自分の暇を見つけては作業療法の道具を作ってきた。また、作業療法の本を通訳した。リハビリ用の器具を機材として援助してくれ、現在、リハビリによく使われている。作業療法の講座を設けて、リハビリの紹介をしてきた。また、生活もともにし、買い物など一緒にしてきた。北京の博愛リハビリテーションセンター(日本の援助で設立)と友好病院には、見学を兼ねていったことがある。北京のリハビリテーションの専門家には、開封にきていただき、講演をしていただいた。</p> <p><藤澤さん> 科技庁からも世話をしていただいた。同僚と深い友情に恵まれてきた。患者さんにとって大きな負担は治療費である。一回の治療費は、理学療法24元、作業療法17元である。この町の設備としては、一番大きい。脳卒中が85%であり、その他骨折などにより体の硬化による機能が低下しているのを回復するために作業を行う。外来患者も入院患者もリハビリにあたれることになっている。新しいものを買う予算はないので、手作りできざまな道具を作るが、中国の人にとっては、新しいものにお金をかけて買う方が喜ばれる。開封市には、児童病院、回族病院などにもリハビリテーション科ができたと聞く。</p> <p>-リハビリテーション棟見学-</p> <p>リハビリテーション棟は、昨年できたばかりで、二階は中国鍼灸の治療が受けられるようになっている。一階がリハビリテーションのためのスペースで、ADL(自立生活訓練)室、言語療法室、作業療法室、理学療法室などがある。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

面談録 河南省4

2006年11月22日
記録者：青木 憲代

日 時	11月22日(火) 午前16:00-17:30	
参 加 者	開封市科学技術局副局長 開封市科学技術局国際合作所科長 開封市群英幼稚園副園長 開封市群英幼稚園書記 開封市群英幼稚園副園長 開封市群英幼稚園教諭 開封市群英幼稚園教諭 青年海外協力隊幼稚園教諭 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 北京大来創一杰咨询有限公司通訳	孫 勇 周 凱 李 振華 趙 広 阮 世藩 李 姁 藩 歌 松井 愛子 青木 憲代 韓 璐
場 所	開封市群英幼稚園会議室	
概 要	<p>〈書記〉 群英幼稚園は、以前は共産党員の子もだけが入れる幼稚園だった。開封市内でも有名で一番よいとされる幼稚園である。園児は700名。その中で、カウンターパートとともに、工作の授業を受け持っている。最初、隊員は、年少児を受け持ち、その後、年中、年長とクラスを受け持つようになった。優しく真面目で勤勉である。子どもたちからも愛されている。日本人の先生がいるということで、群英幼稚園の人气が高まった。日本には、日本の教育理念があり、中国は中国の教育理念がある。中日交流という点からは相互学習をしたと考えている。日本の文化、習慣、行事などについての交流会を行ってくれた。また、祭日ごとの行事を教えるなど季節に合わせた授業を行ってくれた。</p> <p>〈カウンターパート〉 日本へ一年研修に行くことになっていたが、怪我をしたため、一ヶ月しかいられなかった。基本的には日本の幼稚園と中国の幼稚園は同じである。幼児の人数が日本の方が少ない。松井隊員は、授業を持つ際に、授業の計画を詳細に立て、子供たちの名前をC/Pの支援で覚え、中国語を確認した。</p> <p>〈松井隊員〉 二代目の隊員。小さい時から勉強中心の幼児教育が主であり、情操教育は欠けている。力を入れたのは、環境工作、手遊び歌などである。廃材を利用して牛乳パックで工作をした。日本に帰ってから就職先をさがすが、すでに32歳であるので就職は難しいと思う。可能であれば、中国との関係で幼児教育にかかわりたい。</p> <p>〈コメント〉 客観的に判断すると、隊員の語学能力から判断して、カウンターパートの支援と面倒がないと、子どもに対する幼児教育は容易ではない。すでに二代目ということもあり、日本人がいることが当たり前となっており、開封市の他の幼稚園と比較すると一番よい幼稚園であり、さらに日本人がいるということで、保護者の関心を寄せているが、長期にわたる隊員のアトラクション化は、協力そのものの効果が落ちていくと思われる。 以上</p>	

面談録 天津市1

2006年11月24日

記録者：青木 憲代

日 時	11月24日(金) 午前 11:00-12:30	
参 加 者	天津企業管理培訓中心主任 天津企業管理培訓中心国際合作部部长 天津企業管理培訓中心日本語教師主任 天津企業管理培訓中心国際合作部 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 北京大来創一杰諮詢有限公司通訳	張 世平 顧 紅 王 淑華 姚 莉娜 青木 憲代 韓 璐
場 所	天津企業管理培訓中心会議室	
概 要	<p><張センター主任 > 無償資金協力として10億円で作られた(施設で3分の2、人材の投入で3分の1)。長いJICAとの付き合いの中で、77名の専門家が協力にあたってきた。企業管理の7冊の教材をつくり、現在も企業管理のテキストとして使用されている。これまで、6万人の中国の全国各地からの研修生が研修を受けてきた。これまでは専門学校であったが、3年生の短期大学となり、今年は1000人の学生が短期大学で授業を受けている。</p> <p><王日本語科主任> ビジネス日本語科があり、天津で人気がある。飯田香苗隊員、白石真美隊員、位坂教隆隊員、酒井正人隊員、駒澤千鶴隊員と5代の日本語教師が派遣されてきた。1988年から2000年に及ぶ12年間である。初代の飯田隊員は、会話のテキストを作成し、教授法を中国の先生方に教えてくれた。人柄がよく、付き合いやすい、課外活動をした。当時の卒業生では、中国進出企業の総代表となったりして活躍している。白石隊員は、真面目で、研修センターの専門がまだ確立していない時期でもあり、社会人に対して日本語を教えていた。位坂先生は、NECの従業員の研修講師もした。卓球ワールドカップが天津であり、通訳養成コースを設け、スポーツ関係の日本語教科書を作成した。作文が上手で日本語教師の研修も行った。酒井隊員は、会話の授業を担当した。当時教材は古いものだったので、日本の家族が15分ごとにテレビ録画をし、天津に送ってくれ、これを会話のヒアリングの授業に使った。これは大変役に立った。長沼の日本語教材を4年間使っていた。駒沢さんが最後の隊員で4年間協力活動にあたっていただいた。仕事に対して真面目で、1時間の授業のために3時間の準備をする先生だった。教授法や会話の授業は効果がある教え方をする先生であった。丁寧に中国人に教えてくれた。専門学校の会話の授業、課外、仕事以外のときに補習を学生にしてくれた。このころ学んだ学生は、現在スタンレーの副部長をしている。この駒澤先生は日本語能力を測定するようなテストをした。全体的な水準を高めるように努力してくれた。非常に優秀な教師であった。現在協力隊が派遣されなくなって中国人教師と契約の日本語教師とでやってきている。長い協力隊の派遣で育った日本語教師は、年をとり、1人は昨年退職した。若い日本語教師の訓練が必要であり、青年海外協力隊の日本語教師の要請書を出している。</p> <p><張主任> 日本と経済関係が天津は深く、日本企業は現在天津に2000社あり、日中の経済交流が盛んである。学生も中西部の貧しい地方の学生が多い。個人の契約の方と協力隊の日本語教師の差は明らかであり、協力隊を必要としている。青年海外協力隊が無理であれば、シニアボランティアの日本語教師をお願いしたい。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

面談録 天津市2

2006年11月24日
記録者：青木 憲代

日 時	11月24日(火) 午後13:30-15:15	
参 加 者	天津体育学院科研国際交流処 天津体育学院事務所主任 天津体育学院競技訓練部棒球主教練 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 北京大来創一杰咨询有限公司通訳	漆 平 楊 乃東 劉 松波 青木 憲代 韓 璐
場 所	天津体育学院事務所	
概 要	<p><楊主任> 87年から4年間、大貫隊員が派遣され、間をおいて、92年1月大田隊員が2年間赴任し、その後、95年に大貫隊員の日体大時代の教え子である菅隊員が3年間協力にあたった。大貫先生は、リーダーとして評判もよく、規則を守り、態度がよく、隊員として活動した4年間のすべてを野球にさいていただいた。野球のレベルは守備や攻めなどの戦術的なレベルが高く、また、人間としては、贅沢をしないで、タバコを吸わない先生であった。子どもたちを支援し、自分の手当てで食事をご馳走したり、野球の道具を買ったり、怪我の手当てのための薬一式を買ったりした。体育学院の職員とも関係がよく、また、学生も大貫先生の部屋へ遊びによくいった。大貫先生は、組織の規則や中国社会の法律を守り、何かあれば、仮に自分の考えがあつたとしても、必ず中国の上司に相談してきた。腰が悪く、日中友好病院に入院したこともあつた。また、天津の隊員、天津の日本人、時に北京の日本人も来て、一緒に野球をし、他のテニスなどのスポーツをしていた。家族での付き合いを通して、毎年、日本から年賀状をいただいた。子どもが二人できて、現在は、中国人の奥さんは、日本の両親と一緒にすんでいるという</p> <p><劉コーチ> 野球については、よく日本で両親にビデオを取ってもらい、学生たちに見せ、分析し、その中からテクニックを学んでいくという方法を採用した。持病の腰椎による腰痛は、冬と夏にひどく、特にベッドからも起き上がれないような時もあったが、その中でチームのために練習ばかりされた。鉄の精神の持ち主だった。練習は、時間厳守、整列、スピード、声のかけ方、マナーなどについて指導した。生活面でも自分を律する精神を教えてくれた。野球の道具の手入れ法、使用方法、維持管理、修理の仕方、練習後のリラックス法なども丁寧に教えてくれた。運動量は大変多く、コーチとしては、鬼のような厳格な人だったが、生活面ではとても優しい人であった。その同時、生徒は14人いた。6人が国家チームとして選ばれていた。この時のチームのレベルは高いものであつた。先生は、いつもやる気があり、人間として、「男子漢(立派な男前の人)」でもあり、生徒にとっては、スポーツをする人間としての憧れでもあつた。王監督も天津に来てくれた。王監督が練習にもでてくれて、指導してくれた。王監督がチームの技術を見て、努力し頑張れば日本のプロと戦えると大貫先生に励まされたという。</p> <p>後任の大田先生は、派遣が大貫先生と間があいたため、大切な引き継ぎがなかった。大貫先生ほどレベルが高くなかった。3代目の菅先生は、大貫先生の教え子であり、野球の仕方も大貫先生と一緒に、この時も6人が国家チームとなった。</p> <p>大貫先生の教え子は、プロ野球でも活躍しており、上海プロ野球チームで2人のコーチとなっている。菅先生の教え子も天津のプロ野球チームに6人入っている。広東のプロ野球にも1人入っている。教え子は、四川の攀枝花の野球チームやソフトボールチームのコーチとなっているものもいる。体育局のようなところで働いている教え子もいる。みんなの心に大貫先生が生きており、みんな各分野で頑張っている。現在私が教えている学生も将来プロ野球などで活躍できるようになるとよいと考えている。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

面談録 新疆ウイグル 1

2006年12月7日(木)

記録者: 万紅

日時	12月7日(木) 10:35~11:45
参加者	新疆ウイグル自治区科学技術庁国際合作処副処長(=課長補佐) 張 忠 新疆ウイグル自治区科学技術庁国際合作処担当 陽 延琴 北京大来創傑諮詢有限公司 万 紅
場所	新疆ウイグル自治区科学技術庁国際合作処執務室
概要	<p><陽女史></p> <p>新疆は1990年から8人の青年海外協力隊員を受け入れてきた。このうち6人は日本語教育、1人は園芸分野、1人は看護分野。青年海外協力隊員とシニアボランティアの二つの派遣形態について、その存在は把握しているが、残念ながら新疆にはシニアボランティアの派遣実績はない。シニアボランティアに対するニーズはあるが、同制度はまだ広く知られておらず、制限もあるため、新疆への派遣は実現していない。</p> <p>1、隊員の活動についての満足度</p> <p>非常に満足している。これからも継続的かつ積極的に受け入れたい。彼らの勤務姿勢はもとより、仕事以外の社会活動にも積極的に取り組む姿勢は各方面から高い評価を得ている。中でも、新疆蒙古師範学校(現在、新疆職業大学に統合)に派遣された矢田部隊員は中国語に加えてウイグル語も堪能で、ウルムチテレビ局のウイグル語チャンネルから民族音楽について取材を受けたこともあるほどだ。その他の隊員も比較的早く現地の生活に溶け込むことができた。当初は、学校に門限があることや、郵便物がなかなか手元に届かないことなどについて、一部の隊員が不満を持っていたが、問題にまでにはならなかった。これらいくつかの小さな不満は、派遣前の語学研修期間がやや短いため、派遣当初に十分なコミュニケーションができなかったことに起因するものと思われる。</p> <p>2、隊員の活動によるメリットとその要因</p> <p>隊員の派遣によって、協力隊派遣事業が広く認知された。隊員が派遣されるまで、新疆の学校などでは同事業についてほとんど知られていなかった。隊員による日本語コーナーの開設や、研修コースにおける授業、日本語教師向けの勉強会の開催などを通じて、受け入れ先以外の組織にも広く知られるようになった。日本文化の伝播だけでなく、中国と日本の文化についての比較を紹介したり、一部の隊員(岡本隊員)は米国滞在の経験を生かし、米国の進んだ教授法を中国に伝えたりするなど、学生の日本語に対する興味を高めた。</p> <p>隊員の活動は、C/Pの観点の転換や、技能の向上につながった。たとえば、隊員が阿克蘇(アクス)に派遣されるまで、受け入れ先の看護婦たちは服装の清潔度にこだわらなかったが、隊員赴任後には、看護婦の帽子のかぶり方まで厳しく要求された。当初は多少の抵抗もあったが、そのうちに、看護婦の間で身だしなみに注意しなければならないという意識が定着していった。</p> <p>隊員は、国際交流基金ルートでの書籍贈与、日本研修の枠の獲得に努め、受け入れ先の教育資材の充実、人材育成に貢献した。</p> <p>日本人の教員がいるということで、受け入れ先の社会的影響力、知名度が高まり、日本語クラスの学生募集の面でも魅力が高まった。</p> <p>受け入れ先の日本に対する印象も隊員を受け入れることで、よい方向に変わっていった。隊員の中国に対する理解が深まった。</p> <p>上述効果の発見の理由は受け入れ先の体制が整っていること、受け入れ先が隊員の活動を全力的に支援したこと、JICAがよくバックアップしていること、隊員が真摯に仕事に取り組んでいたこと、C/Pが意欲的だったことが挙げられる。</p> <p>特に、JICAによるバックアップ体制を評価したい。隊員を派遣する前に、協力隊調整員は受け入れ先を視察するなどして、生活環境を含めた正しい情報を隊員に伝えたという。</p> <p>4、改善を希望する点</p> <p>ボランティア派遣をめぐる諸手続きの所要時間がやや長い。早くても申請から隊員の赴任まで約2年間かかる。中国の組織は通常、長期計画を立てないため、同制度を回避する傾向が見られる。このほか、選択可能な分野が限られるという点も受け入れ機関の申</p>

	<p>請意欲に大きく影響している。</p> <p>温泉療養院は以前からリハビリ分野の隊員派遣を要請していたが、恐らく北京のリハビリテーション研究センターと重複したため、承認されなかった。同院はなおも申請を続け、ようやく派遣のめどが立ったようである。</p> <p>一方、新疆滞在の JICA 専門家が阿克蘇（アスク）へ視察に赴いた際、同地域に看護婦の派遣が必要だと JICA に提案したところ、スムーズに採用されたという。中国側の要望より、日本人専門家の意見のほうがより JICA に重視されているという感触を持っている。</p> <p><張忠処長></p> <p>先月末に JICA 研修を終えて、帰国したばかりである。日本滞在中は大阪の近くの協力隊員訓練所を見学、来年中国赴任予定の隊員約 20 人と会談する機会があった。JICA の隊員派遣の流れや仕組みについて、理解することができ、有意義な研修だったと思う。研修前は、JICA が隊員の派遣地を指定すると思いついていたが、研修を受けて初めて、JICA が派遣候補地を提示して、隊員を募集し、隊員は行きたいところを選び、派遣が決まるという流れであることがわかった。</p> <p>1、隊員に対する期待</p> <p>技術の移転を大いに期待している。たとえば観賞樹木や果樹の栽培技術。これは中国西部 12 の省（自治区）で必要とされている技術である。現在日本語教師や看護婦の派遣が主流となっている理由は人材が選抜しやすいためであると考えられる。今後は専門分野の技術指導人材の派遣を希望する。自動車修理や電子分野では、シニアボランティアの派遣が必要であると思うが、必要としている組織は同制度をよく知らないため、派遣にいたっていない。</p> <p>2、今後の要望</p> <p>今後も隊員派遣を継続してほしい。ただ、手続きの所要時間をもっと短縮してほしい。派遣分野も現在の日本語教師中心から、自動車修理や電子、機械分野に広げてほしい。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>
--	--

面談録 新疆ウイグル 2

2006 年 12 月 7 日（木）

記録者：万紅

日 時	12 月 7 日（木） 12:45～13:30	
参 加 者	新疆大学外国語学院学長 新疆大学外国語学院外事秘書 新疆ウイグル自治区科学技術庁国際合作処担当 北京大来創傑諮詢有限公司	付 鴻軍 阿利亜 陽 延琴 万 紅
場 所	新疆大学外国語学院会議室	
概 要	<p><付院長></p> <p>昨年の 2 月から、新疆師範大学の岡本隊員による日本語学科日本語クラスでの授業が始まった。当学院の中国人日本語教師は 3 人。日本語学科は 3 年制。3 年ごとに 1 クラスを開設。学生は 22 人。日本人教員による授業については、師範大学を優先しており、当学院での授業時間数は学期ごとに異なるが、通常週に 2 時間から 6 時間となっている。同隊員は授業以外に日本語コーナーを開設し、日本の文化、飲食習慣などを紹介している。現役の大向隊員は所属先の授業が多いため、こちらの授業を担当する余裕はないが、2 週間に 1 回、当学院の日本語会話の指導を行っている。隊員の活動は高く評価されており、当学院は協力隊の派遣を再度申請し、来年 4 月末に新たな隊員が派遣される予定。</p> <p>1、隊員の活動によるメリットとその要因</p> <p>隊員のおかげで、学生の会話能力、聞き取り能力が向上、文化週間を通じて、学生の日本に対する理解が深まった。当学院は毎年 4 月末から 5 月初めかけて、「外国文化週間」というイベントを行っている。岡本隊員は今年のイベントで、日本の茶道や着物の着付けを紹介、日本語学科以外の学生や教員が多数参加し、好評を得た。</p> <p>イベントで出し物を披露した学生は隊員の指導を受けたおかげで、その表現能力が高く</p>	

	<p>評価された。その際の様子はビデオに収録しているので、必要であれば提供も可能である。</p> <p>ただ、残念なことに、文化週間においてロシアやアメリカの最新の映画などが上映されたが、当学院には日本の映画がなく、上映できなかった。</p> <p>当校主催の文化週間や新年イベントに、新疆の大学で日本語を勉強している学生が参加していることから、当校の知名度が上がっている。</p> <p>チームティーチングを通じて、中国人教員の教授能力が向上した。</p> <p>上述の効果を収めた理由として、当学院が隊員の活動を支援したこと、隊員が積極的に仕事に取り組んでいること、ニーズに合致したことなどが挙げられる。</p> <p>2、隊員に対する期待</p> <p>日本語クラスの学生の語学力を高めるほか、日本のビジネスマナーやビジネスルール、日本の生活習慣、文化などを紹介してほしい。新疆には日本人の観光客が多い。日本語クラスのカリキュラムにも観光関連の授業がある。日本人観光客によりよいサービスを提供するため、日本の生活習慣などを学生に紹介してほしい。</p> <p>教材は北京外国語大学や上海外国語大学出版の教材を使っている。教材開発に対するニーズは特にない。</p> <p>隊員の働きかけにより、国際交流基金から図書や音声教材などを提供してほしい。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>
--	---

面談録 新疆ウイグル 3

2006年12月7日(木)

記録者：万紅

日 時	12月7日(木) 15:30~17:00	
参 加 者	新疆農業大学外事処国際交流事業担当 新疆ウイグル自治区科学技術庁国際合作処担当 北京大来創傑諮詢有限公司	馬 咏梅 陽 延琴 万 紅
場 所	新疆農業大学外事処執務室	
概 要	<p><馬女史></p> <p>当校は日本への留学経験を持つ少数民族の教員が多いこと、円借款事業が実施されていることなどから、日本語学習の雰囲気非常に強い。</p> <p>また、日本の名城大学、帯広畜産大学、山口大学、中日本自動車短期大学、静岡大学、鳥取大学、酪農大学、岩手大学工学と姉妹校協定を締結しており、交流が盛んである。夏の朝などには、キャンパスで学生が日本語を朗読する声があちこちから聞こえる。</p> <p>05年から06年の1年間、垣内隊員を受け入れた。同隊員の正式派遣を受け入れる前に、隊員派遣を強く要望していたため、JICAの配慮により、02年から05年、新疆蒙古師範学校に派遣されていた黒井隊員に日本語の勉強を希望している学生に日本語を教えることができた。彼女が当校の日本語学習に対する高い関心を理解し、JICAに働きかけてくれたため、当校への隊員の正式派遣が決まったと思う。</p> <p>当校の外国語学院には、日本語学科は設けられていないが、英語学科の学生が第二外国語として日本語を勉強している。修士課程や博士課程の在生も第二外国語として日本語を学んでいる。円借款事業の関係で、日本研修が予定されている当校の教員も必要最小限の日本語を勉強する必要があるため、これら教員向けに日本語研修コースを開設している。</p> <p>隊員以外にも、個人契約で外国人教員を招聘しているが、組織の派遣によるボランティアを受け入れたことはない。</p> <p>1、JICAの2種類のボランティアについて</p> <p>青年海外協力隊員、シニアボランティアというJICAの2種類のボランティアについて、前者しか知らない。後者についてはよく知らない。</p> <p>2、隊員の活動についての満足度</p> <p>所期の期待を超える活躍に大変満足している。隊員に対する印象は非常に良い。隊員の担当コースは以下の三つに分かれる。外事処の主催による日本研修対象教師向けのコー</p>	

ス。当校の高等職業教育学院の日本留学予備クラス（中日本自動車短期大学との協力により開設されたクラス、中国で2年間、日本で1年間勉強）。外国語学院の英語学科の第二外国語（日本語）学習クラス。いずれのコースの受講生も隊員の活動を高く評価している。日本人教員は受講生の人数にかかわらず、真摯に授業の準備を行い、学生からの質問についても、熱心に対応してくれた。

教え方も優れており、授業中の雰囲気は非常に活発だった。

授業に使うツールも優れている。国際交流基金から贈与されていると聞いている。このようなツールの採用は当校の教員に大きな啓発を与えた。

隊員は授業以外のイベントに積極的に参加し、同僚教師との人間関係も良好だった。

隊員に基本的な生活用品や設備がそろったアパートを提供した。私は外国人教員の招聘を担当していることから、他の外国人教員とも接している。他の外国人教員と比較すると、隊員は過度な要求を出したことは一度もなかった。

3、隊員の活動によるメリットとその要因

ネイティブによる日本語教育が実現し、当校の中国人日本語教師による日本語教育が補完された。学生と教員の日本語学習に関する興味が高まった。約200人が隊員の授業を受けた。

隊員派遣により、円借款事業にもプラスとなった。同事業の訪日研修の対象となった教員は日本を訪問する前に日本語研修コースに参加したおかげで、日本到着後、スムーズに日本の生活に溶け込むことができたという。

訪問学者として日本酪農大学に滞在中の当校の教員（ウイグル族）は訪日前に黒井隊員に教わり、1年半日本語を勉強した。彼女は日本に行ってから、指導教官とのコミュニケーションに言葉の問題はまったくなかったという。本人の努力にもよるが、黒井隊員の優れた教授法も大きく奏効したと思う。

訪日研修や日本留学を申し込んだ者にとっては、日本語ができることが採用に有利な条件となっている。この意味からも、隊員の活動は受講生に利益をもたらしたといえる。

中国人教員の能力向上につながった。英語の外国人教師は4人もいるため、教授方法に関する検討会をたびたび開催している。日本人教員は1人のみであることから、このような検討会を開いたことはない。ただ、日常的な交流から、日本人教員の優れた教授法などは中国人教員に自然に浸透し、彼らの能力向上につながった。

隊員の受け入れは日中友好に貢献した。

上述の効果を収めた理由として、以下が挙げられる。

受け入れに当たって、専任者を配置し、専門のアパートを用意した。受け入れ体制が整っている。C/Pが意欲的だった。隊員と受け入れ先の間うまくコミュニケーションが取れた。例えば、ゴールデンウィークのような大型休暇に際し、当校の休暇計画を隊員に事前通知し、隊員も旅行の予定などを学校側に報告するなどした。JICAが隊員を良くバックアップしていた。隊員は北京で定期健康診断を受けたり、会議に参加したりした。隊員間の人間関係もよい。こうしたことから、JICAという組織の強いバックアップ体制が感じられた。隊員と中国人教員との人間関係が良好だった。隊員の引継ぎも円滑に行われた。たとえば、黒井隊員は帰国する前に、使っていた教材などを新疆師範大学の大向隊員に引き渡した。隊員は中国や中国人をよく理解していた。派遣前に中国についての研修を受けたおかげだと思う。

4、隊員派遣前後、日本や日本人に対する印象の変化について

当校は毎年日本の大学の訪問団を受け入れてきているため、日本や日本人に対して既に一定の理解を有しており、隊員派遣による大きな変化はない。

隊員派遣前にも、JICAルート以外で日本人専門家を受け入れたことがあるため、日本人の生活習慣や、勤務姿勢について、ある程度理解している。

5、隊員に対する期待について

語学教育において、中国人日本語教師の教授方法のレベルアップに寄与してほしい。実際のコミュニケーションや交流を通じて、日中の友好を深めてほしい。帰国後、新疆の様子を日本に発信するとともに、新疆農業大学のことも紹介してほしい。このような形で、日中間の理解が増進されることを期待している。

6、今後の希望について

	<p>隊員を継続的に派遣してほしい。隊員の継続派遣が認められなかったため、日本語教育に一定の影響があった。現在、日本人教員はいない。日本語教師以外にも、可能であれば、他の分野の隊員を受け入れたい。今後隊員の派遣が可能ならば、授業以外に、共同研究を展開したい。</p> <p>7、改善してほしい点について</p> <p>隊員の赴任時期は新学期の開始時期に合わせるべきだと思う。中国の新学期は3月と9月である。隊員の赴任時期は2月末か、8月末にすべきだ。垣内隊員は新学期開始後の9月末に赴任した。このため、授業の手配やカリキュラムの作成に支障を来した。教材の準備も必要であることから、新学期開始の2ヵ月前までに教授の内容、使用教材などを把握する必要がある。</p> <p>派遣期間は2年間で妥当である。1年間では短い。</p> <p>申請から正式派遣までの所要時間を短縮してほしい。</p> <p>私は04年に現職につき、その時から、JICAから隊員が派遣されると聞き、JICAの協力調整員による事前調査を2、3回受け入れたが、05年ようやく隊員が派遣された。この期間は長すぎると感じている。</p> <p>日本人教員以外、他の国の教師を招聘しているが、個人契約のため、手続きにかかる時間は短かった。JICAの隊員派遣は組織行為のため、時間がかかることは理解できるが、それにしても長いと思う。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>
--	---

面談録 新疆ウイグル4

2006年12月7日(木)

記録者：万紅

日 時	12月7日(木) 17:30~19:00	
参 加 者	新疆職業大学教務処 新疆蒙古族文化教育促進基金会 新疆職業大学学生工作(=活動)部副部長 新疆ウイグル自治区科学技術庁国際合作処担当 北京大来創傑諮詢有限公司	鉄木爾巴図 阿力瑪 金 珠 陽 延琴 万 紅
場 所	新疆職業大学(新疆蒙古師範学校)会議室	
概 要	<p>新疆蒙古師範学校はモンゴル族の中学校卒業生を対象とした、小・中学校教師の養成機関で、4年制学校である。日本語教育は3年制だったが、隊員帰国後、新疆職業大学との統合準備などにより、日本語科の学生募集は一時停止している。01年から05年まで、2人の隊員を日本語教師として受け入れてきた。当時の日本語教育は社会人向けの短期研修コースと在学生向けの日本語クラスの2つに大きく分かれていた。受講生は約120人に上った。1代目の隊員(矢田部隊員)は蒙古族文化教育促進基金会の招聘で派遣された。隊員の実際の活動場所は蒙古師範学校だった。蒙古族文化教育促進基金会は蒙古師範学校所属の社会団体である。</p> <p>1、隊員の活動についての満足度</p> <p>1代目の矢田部隊員の優れた社会活動能力が当校の社会的知名度の向上につながった。当初の期待を超えて、大きな効果を収め、非常に満足している。同隊員は強い責任感、真摯な勤務姿勢、高い社会活動能力を有し、学生や中国人教員に高く評価された。授業以外に、日本語コーナーを開設したり、ウルムチの日本語教師を集めて日本語勉強会を行ったりして、好評を得た。隊員の「三同主義」を評価したい。</p> <p>2、協力隊の効果とその要因</p> <p>矢田部隊員の優れた教授法などが他の教員に大きな啓発を与えた。彼女は独特な教授法を持っており、学生の学習意欲を大いに引き上げた。矢田部隊員は新疆维吾尔自治区が外国人専門家に授与する最高賞・天山賞を受賞した。同隊員は日本語の授業以外に、幅広い社会活動を展開。中国語のほか、ウイグル語に堪能で、新疆ウイグル語チャンネルの取材を受けたこともある。このような活動によって、当校の社会的知名度も高まった。彼女の趣味は、歌、少数民族の楽器など多岐に及ぶ。矢田部隊員はまた、他の組織の援助情報を積極的に収集し、当校に提供してくれた。このおかげで当校は国際交流基金か</p>	

ら図書への贈与を受けることができた。C/P の活動についても、率直な意見を述べ、C/P の業務改善に貢献した。

2 代目の黒井隊員との引継ぎも円滑に行われ、矢田部隊員の積極的な活動も引き継がれた。2 人の隊員の性格は異なるが、いずれも仕事に真摯に取り組んでいた。黒井隊員も 04 年 10 月に天山賞を受賞した。

天山賞の受賞者は年間 10 人前後に過ぎず、当校から 2 人の天山賞受賞者が出たということで、社会的知名度が大いに高まった。今でも、日本語クラスがあるかなどの問い合わせをたびたび受ける。

当校の学生はほとんどがモンゴル族で、辺鄙な地域の出身である。隊員の活動を通じて、彼らの知識が豊かになっただけでなく、視野も広がった。

学生はスピーチコンテストにも 2 回参加。このような活動は、学生の日本に対する理解の増進に大いに役立った。

隊員の受け入れは日中友好に大きく貢献した。隊員が帰国するとき、学生や中国人教員たちと名残惜しく別れた場面が非常に印象的だった

上述の効果を収めた理由として、受け入れ体制が整っていたこと、中国人教員が意欲的だったこと、学校側が全力をあげて支援したこと、ニーズに合致したこと、隊員が中国の文化、生活に溶け込んだこと、JICA によるバックアップ体制が優れていたことなどが挙げられる。

3、隊員の活動によるメリット

隊員が赴任するまで、当校には日本人教員はもとより、専任の日本語の教員もいなかった。独学で日本語を覚えた他の学科の教員が兼任で日本語を教えていた。隊員赴任後、専任の日本語教師 (C/P) 1 人を配置し、当校の日本語教育は軌道に乗ることができた。中国人日本語教師は、隊員から優れた教授方法、管理方法、勤務姿勢などを学んだ。

隊員による授業は学生の就職にも寄与した。旅行会社は会話能力、ヒヤリング能力に対する要求が高い。隊員の指導のおかげで、当校の学生の会話やヒヤリング能力が評価され、卒業生の半分以上が旅行会社への就職に成功した。一部の学生は卒業後すぐに、ガイド資格試験に合格したという。

4、1 代目の隊員の招聘のきっかけについて

隊員受け入れの 1 年前に、日本語コースを開設したが、日本人教員はいなかった。当基金会の会長が北京での会議に参加した際、一部情報をたまたま入手することができた。インターネットで JICA 協力隊の派遣事業を調べ、日本在中国大使館に問い合わせの手紙を出した。日本在中国大使館から JICA の連絡先を紹介され、派遣成功に至った。

5、JICA の 2 種類のボランティアについて

青年海外協力隊員、シニアボランティアという JICA の 2 種類のボランティアについて、前者しか知らない。後者についてはよく知らない。後者についての情報を提供してほしい。

6、今後の希望について

当校は 06 年 1 月職業大学に統合された。統合後、継続教育学院の日本語研修コースや外国語学院の第二外国語学習で日本語教師を必要としており、隊員の派遣を希望している。新疆では、日本語教育に対するニーズは依然として高い。日本語教師の派遣を継続してほしい。このほか、新疆の経済発展を見据えた管理分野、技能など専門分野の派遣を検討してほしい。

7、隊員派遣前後の日本に対する印象の変化について

大きな変化があった。以前もテレビやマスコミからの情報で日本のことを多少理解していたものの、隊員派遣を申請してから、日本人と接する機会が多くなり、隊員との日常的な接触から、日本や日本人に対する理解が深まった。日本人の礼儀正しさ、仕事に対する態度、業務展開の方式、日本人の生活様式や行動方式について、改めて理解することができた。

8、他の外国人教員との比較

他の組織からボランティア派遣を受けたことはないが、個人契約でアメリカ人の教員 3 人、カナダ人の教員 1 人などを招聘したことがある。他の外国人教員と比べて、隊員の勤務態度、責任感をはるかに優れている。

	<p>9、矢田部隊員に関するエピソード</p> <p>当校の先生はほとんどがモンゴル族で、祭りやイベントを頻繁に行う。矢田部隊員はいつも熱心に参加し、教員たちと仲良く付き合っていた。</p> <p>また、学校の活動には必ず参加していた。たとえば、元学長がなくなられた際、葬儀の時に彼女に声をかけなかったが、彼女はそれを知り、「ぜひ参加させてください」といい、学校の一員としての強い意識を示してくれた。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>
--	---

面談録 新疆ウイグル 5

2006年12月8日(金)

記録者：万紅

日 時	12月8日(金) 10:30~13:30	
参 加 者	新疆師範大学国際合作・交流処長 (=課長) 張 兵 新疆師範大学外国語学院副学長 木合塔爾・艾則孜 新疆師範大学外国語学院日本語学科日本語教師 馮 豫傑 新疆師範大学外国語学院日本語学科日本語教師 茹先・伊明 新疆師範大学外国語学院日本語学科日本語教師 李 朝千 青年海外協力隊日本語教師 大向 宏 新疆ウイグル自治区科学技術庁国際合作処担当 陽 延琴 北京大来創傑諮詢有限公司 万 紅	
場 所	新疆師範大学外国語学院日本語教研室、日本語教室	
概 要	<p><張兵処長></p> <p>JICAの青年海外協力隊派遣事業に対して深く感謝したい。隊員の活動について、4つの面から評価したい。</p> <p>第一に、当校の日本語学科の充実に大きく貢献した。日本語教育に対する高いニーズを受けて、当校は01年から日本語学科を開設した。日本語教育は在学学生向けと日本への国費留学生向けに大別される。日本語学科は3年制で、1学年1クラス、1クラス30人前後となっている。日本人教員(隊員)がいるおかげで、当校は新疆全体において、日本語学科の教育レベルが最も高い学校に数えられるようになった。来年から、日本語学科を3年制から4年制の本科に変更するよう申請する予定。</p> <p>第二に、日本語学科の中国人日本語教師のレベルアップに大きく貢献した。1代目の長谷川理恵隊員は中国語が堪能で、英語もしゃべれるため、赴任早々活躍した。2代目の岡本和恵隊員はアメリカ滞在の経験もあり、独特な教授法を持っており、当校初のチームティーチングを導入。中国人教員に優れた教授法を伝えた。日本語学科以外の教師も、岡本隊員による授業の様子を見学するなどして、大きな啓発を得た。隊員が派遣されていることから、当校の中国人日本語教師はJOCV日本語教師C/P招聘計画に参加する機会が与えられ、日本への理解を深めることができた。隊員は教材の選定にも寄与した。</p> <p>第三に、日本語学科の学生の語学能力の向上、日本に対する理解の増進、視野の拡大につながった。隊員は学生に語学のほか、中国人教員ではなかなか伝えることのできない、生の日本を発信してきた。また、学生は隊員の指導の下、JICA主催のスピーチコンテストに参加した。うち2人は優勝し、ODA事業現場を見学することができた。学生はこのような活動に参加することで、他校、他地域の学生と接する機会を得て、日本に対する理解を深め、日中協力事業に対する理解が増した。</p> <p>第四に、日本語関連の教材、書籍、音声教材の充実につながった。隊員の努力で、国際交流基金から教材や日本書籍の贈与を受けた。</p> <p><張処長のコメント></p> <p>03年まで外国語学院の学長を務めていた。JICAによる支援や隊員の努力の下、当校の日本語学科の歴史は浅いにもかかわらず、教育レベルは向上し続けてきていると実感している。</p> <p>学生は卒業後、半数がウルムチの旅行会社やホテルに就職、一部は新疆以外の地方で職に就く。また、当校は首都師範大学と提携し、一部の卒業生を首都師範大学に送り、本科教育を受けさせている。</p>	

在学生の日本語教育のほか、当校は社会人向けの研修コースも開設しており、隊員も研修コースの授業を担当している。これにより、当校の社会的知名度や影響力が向上した。JICAの派遣制度は非常に優れている。隊員は派遣前に中国語研修を受けるため、赴任後、すぐに学生や中国人教員とコミュニケーションができ、周りの人々に受け入れられた。選抜された隊員の資質が非常に高い。技術能力はもちろんのこと、勤務姿勢も非常に優れている。当校はJICA以外に、VSO（英国海外志願服務社）、ELIC（米国英語協会）、ESEC（米中教育サービス機構）からボランティアの派遣を受けているが、JICA隊員は熱意あふれる勤務姿勢と高い責任感を持ち、他国のボランティアよりはるかに優れている。

今後も協力隊を継続して派遣してほしい。

<大向隊員>

1、活動の概要

新学期は9月に始まったが、1カ月の軍事訓練があったため、赴任後、実際の授業が始まったのは今年10月から。大学1年生の会話、聞き取りの授業を担当。会話は週に4時間、聞き取りは2時間。学生に週に1回、日本の映画を見せている。彼らは日本語を勉強し始めたばかりで、まだ話せないこともあり、日本語に対する興味を持たせることが非常に大切だと思う。彼らが最も興味を持っているのは、昔の日本の文化ではなく、最近の映画やアニメであるため、最初はそこから始めようと思っている。

1課ごとに小テストを行っている。最近、成績が芳しくない。学生のやる気を引き出すために日本の絵葉書を成績が最も良い学生に贈るなど、工夫している。

2、日本語の学習の動機について

きっかけは日本のアニメ、俳優などに対する興味からだと思う。全員が日本語に興味を持っているわけではないが、そういった学生にもできるだけ興味を持たせるようにしたい。

3、学生の進路について

ほとんどが旅行会社、ホテルなど日本語を使う仕事に就いている。3年間日本語を勉強して、日本語が使える仕事に就くことが理想であるが、新疆には受け皿が少なく、懸念材料となっている。ただ、学生は北京や上海など、日本語人材に対するニーズが高い都市に行くことまでは考えていないようである。

4、派遣された感想

派遣される前は旅行会社に勤めていた。中国の北京、上海だけを短期間で回ったことがある。赴任後、反日感情などは特に感じない。

JICAの仕事について、現地の人はほとんど知らないというのが現状だと思う。一部の中国人のひとしか付き合っていないが、一緒に食事しているとき、中国の友人に、「中国は日本に賠償金を請求しなかったじゃないですか」と言われたことがある。日本は円借款など、賠償金とは異なる形で資金援助を行っている。このことはあまり知られていない。

5、帰国後の計画

日本語教師になるか、旅行会社に戻るか、まだ分からない。いずれにしても中国に関係する仕事につきたい。

6、中国の日本語教育への期待

赴任してからまだ半年も経っていないが、少なくとも各学校に日本人の教員が必要だと思う。少なくとも各都市に日本人の教員がいて、大学を回るべきだと思う。

新疆は日本からこんなにも離れているのに、日本語を勉強したいという人が驚くほど多い。留学を希望する人も少なくない。そういう意味でも協力隊員に限らず日本人の教員が必要だと思う。

7、中国人教員の教え方などについて感じたこと

前回の岡本さんが教授法をしっかり教えた。正直言って、中国人教員には多少の日本語の間違ひはある。ただ、教授法については、レベルが高いと思う。特に3年生の第二外国語を教える女性の先生の教え方は優れており、まったく問題がない。こちらの教員は順番で大学院に行くことになっている。代替りの新しい先生のレベルについて、多少不安を感じている。

8、生活について、不自由に感じることはほとんどない。もちろんいやなこともあるし、いいこともある。日本とあまり変わらない。店員の愛想が悪いなど、些細なことはあるが、日本も同じ。慣れなくて日本に帰りたいとか、そういうことはない。

<大向隊員コメント>

派遣期間について、最初は2年間とされているので、任期満了時に、今の学生はちょうど3年生になる。私の後も日本人の教員に来てほしい。ただ、3代目なので、その後、果たして派遣が継続されるかどうかわからない。派遣継続が不可能な場合は、早めに学校に伝えたほうが良いと思う。学校側で日本人の教員を探せないのであれば、JICAが隊員を派遣できなくても、紹介するなどしてあげたほうが良いと思う。

<C/P>

1、役割分担について

中国人教員は文法を教える。日本人教員は会話と聞き取りの授業を担当する。

2、隊員の能力、教え方について

岡本先生は非常にまじめだった。大向先生もまじめで、会話、聞き取りを担当している。日本人の教員は直接教授法を採用しているため、授業中の雰囲気は活発で、会話の授業に非常に役立ったと思う。隊員が来るまでは授業にカードや絵を使ったことはなかった。よい教え方を教わったと思う。学生の日本に対する理解が深まった。

3、日本人教員への期待について

低学年の学生に会話、3年生などの高学年の学生に、日本の歴史、ビジネス日本語、日本の文化をそれぞれ教えてもらいたい。ネイティブとしての役割をはたしてほしい。

4、隊員の取り組み姿勢について

岡本隊員は仕事を生活の全部とし、取り組んでいた。授業以外に、学内の研修コースや、科技庁開設の研修コース、ウルムチ市の日本語コーナー、新疆大学の文化祭に積極的に参加していた。彼女が24時間仕事に集中していた様子が印象的だった。

隊員の引継ぎは順調で、授業に影響はなかった。岡本隊員は帰国する直前まで、学校で引継ぎや資料の整理をしていた。自分の荷物を最後の晩に徹夜片付けたという。

<副学長>

1、隊員の派遣前後の変化

日本人教員がいるおかげで、学生の卒業後の進路がますますよくなっている。学生の会話レベルが向上した。

2、隊員の活動についての満足度

非常に満足している。日本語学習について、語学面と文化面の両面から濃厚な雰囲気を醸成してくれた。ポスターや絵、図書、音声資料などを提供してくれた。隊員は中国で日本語を教えること自体をひとつの事業として取り組んでおり、高い情熱を持っている。他の外国人教員と比べ、はるかに真摯に業務に取り組んでいたことを評価したい。岡本隊員は病気の時も、休まずに授業していた。非常に感動的だった。

青年海外協力隊員派遣事業の最大の受益者は学生。中国人教員の教え方はいくら優れていても、日本語で授業することは不可能である。隊員は語学以外に、日本の文化や生活習慣も教えてくれている。

岡本先生は全校向けに日本のマナーに関する講義を行った。このときは、講堂がほぼ埋まるほどで、大盛況だった。

同学院は米国、イギリスからのボランティアも受け入れている。日本人教員は他国のボランティアと比べて、はるかに優れている。真摯に業務に取り組んでおり、責任感が非常に強い。

3、隊員の活動によるメリット

チームティーチングの導入はC/Pの教授レベルの向上に役立った。日本語教師向けに週に1回勉強会を開催し、文法問題の解釈方法について議論している。一方、日本人教員は日本の国語、歴史、政治、経済などを中国人教員に紹介、C/Pの教授レベルの向上、日本に対する理解の増進につながった。C/Pは隊員と一緒に仕事することによって、日本人についての理解がより深まったという。隊員は中国滞在を通じて、中国に対する理解が深まり、中国通になったといえる。隊員の活動は日中友好と相互理解の増進に大き

	<p>く貢献した。</p> <p>4、効果発見の要因 協力隊員の派遣について、ほぼ目標を達成していると考え。その理由として、受け入れ機関の体制が整っていること、C/P が意欲的であること、隊員自身の資質が高いこと、隊員の技術が高いこと、ニーズが合致していること、隊員と C/P との人間関係が良好で、コミュニケーションがうまく取れていること、JICA による支援も良好なことなどが挙げられる。JICA の管理体制は非常に優れたものだと認識している。隊員を派遣する前に受け入れ先と確実に連絡を取り、派遣後も追跡調査を行い、隊員に対するバックアップ体制が整っていると感じている。</p> <p>5、派遣の時期について 派遣時期が中国の新学期の開始時期とずれたことがある。現役の大向隊員は 6 月末の赴任で、タイミングよく派遣されているが、過去の隊員は新学期開始後に派遣されたことがあり、授業に多少の影響が出た。できれば、派遣は中国の新学期の開始時期に合わせてほしい。</p> <p>6、隊員の受け持ちの受講生は研修コースを入れて、約 250 人に上る。</p> <p>7、今後の展望について 継続派遣を望む。日本人の教員が継続派遣されないと、高学年の学生向けの日本概況、日本文学の授業に大きな影響が生じる恐れがある。中国人の教員は教えられないわけではないが、日本の概況や文学について、日本人教員が直接教えるに越したことはない。日本語学科を専科制から本科制に変更するよう申請する予定。これを達成するために、助教授や教授資格を持っている隊員を派遣してほしい。つい最近当学院のロシア学科が専科制から本科制に昇格した。昇格できた大きな原因はカザフスタンから派遣された教員が教授資格を持っていたためだった。本科制に昇格できれば、学生募集範囲を全土に拡大することができ、当校の知名度も大いに高まると思う。 当学院は英語学科と比べて、日本語学科に対する投入が少ない。同事業を通じて、教材などの援助を希望する。</p>
--	---

面談録 黒竜江省 1

2006 年 12 月 12 日 (火)

記録者：万紅

日 時	12 月 12 日 (火) 15:10～16:50	
参 加 者	ハルビン理工大学外国語学院日本語学部主任 ハルビン理工大学外事処対外中国語研修センター 黒竜江省科学技術庁国際合作処担当 北京大来創傑諮詢有限公司	徐 英東 金 基永 馬 海燕 万 紅
場 所	ハルビン理工大学外国語学院日本語学部主任執務室	
概 要	<徐主任> 1.日本語学科の概要 当校の前身はハルビン科学技術大学。95 年、校名をハルビン理工大学に変更した。 日本語学科は 85 年に開設。当時は 3 年制で、1 学年に 2 クラス、人数は合計で 40 人未満だった。90 年、3 年制の専科から 4 年制の本科に昇格した。クラス数と学生数の推移は以下の通り： 91 年～93 年、1 学年 2 クラス、学生数計 40 人 94 年～95 年、1 学年 1 クラス、学生数 40 人 96 年～98 年、1 学年 2 クラス、学生数計 40 人 99 年、3 クラス、学生数 79 人 00 年～01 年、1 学年 4 クラス、学生数 100 人 02 年～03 年、1 学年 5 クラス、学生数 100 人 04 年、9 クラス、学生数 208 人 05 年、10 クラス、学生数 258 人 06 年、6 クラス、学生数 160 人。 中国人教員は 25 人。うち教授 3 人、助教授 7 人、講師 7 人。	

日本人教員が担当している授業は2年生の会話、3年生の会話の一部、3年生の精読の一部、映画鑑賞、日本の歴史、日本の文化、日本の経済など。

2. 隊員の活動の満足度について

所期の期待を超えて、大いに満足している。JICA に対し、大変感謝している。隊員は週末も学生主催のイベントに積極的に参加したり、中国人教員と共同で講座を開いたりして、日本語学科の能力向上に大いに貢献してくれた。

交流会を開催し、文化面での交流を図り、日中関係に関する意見交換を行うなど、相互理解の増進に寄与した。

4代の隊員の共通点として、自分の行動を律するという点が見られた。学校側が割り当てた授業を確実にこなしてくれたほか、授業の準備や学生主催のイベントへの支援に積極的に取り組んでくれた。

日本の大学を当校に紹介しようと意欲的に取り組んでいた。深山隊員は日本の大学を紹介し、交流活動を企画したが、残念ながら SARS の関係で中断せざるを得なかった。隊員による波及効果大きい。隊員の授業を受けた学生は約 1 千人も上ることから、草の根レベルの日中友好に貢献したと言える。

4代の隊員のうち、もっとも行動的だったのは山下隊員である。彼女は授業のほか、ハルビン市の大学で日本語を勉強する学生や日本語教師を集めて、サロンを開くことで、隊員の影響範囲を広げた。授業にも真摯に取り組み、学生に高く評価された。学生の強い要望により、山下隊員の延長（1年間）が認められたという。学校側は山下隊員の活動を評価し、賞与を支給しようとしたが、協力隊の規定もあり、同隊員は賞与を受けなかった。学校はそれに代えて、「優秀日本人教員」の賞状を授与した。

佐藤隊員は学生たちによく溶け込み、交流を展開していた。

深山隊員は協力隊の活動についてプレゼンテーションもしてくれた。このおかげで、日本に対する理解が浅い学生も日本に対する理解を深めることができた。

隊員は学生を宿舎にたびたび招き、日本の飲食文化を理解してもらおうと、料理を作るなどした。中国人教員もよく隊員の宿舎を訪れた。このような交流を通じて、日本に対する理解が深まった。深山隊員は会話教材の作成に協力してくれた。残念ながら、完成せずに帰国してしまった。

3. 隊員の活動によるメリットとその要因について

1代目の隊員が赴任するまで、ハルビンで外国人教員を招聘することは非常に難しかった。隊員の受け入れによって、ネイティブによる教育ができるようになった。

隊員が赴任するまで、日本語の書籍は非常に少なかった。1代目の山下隊員の働きかけにより、日本の小説、漫画、図書約 2,000 冊、雑誌 400～500 冊の贈与を受け、図書室が整備された。整備された図書室はその後の図書贈与の受け皿となり、すでに 5,000 冊以上の図書を保有している。

機材も供与された。山下隊員の努力により、プロジェクター、コピー機など教育用施設の提供を受けた。

隊員の推薦により、中国人教員が JICA ルートの訪日研修（1年間）に派遣された。

また、青年招聘の一環として JOCV の C/P に訪日研修に参加するチャンスが与えられた。中国人教員は隊員の授業を見学することで、会話の授業法について、大きな啓発を得た。冒頭で紹介したように、学科の規模や学生の人数が拡大傾向にあるのは、隊員の派遣によるところが大きい。

隊員の受け入れにより、日本人の業務に対する姿勢、文化習慣をよく理解することができ、日本や日本人に対する印象も変わってきた。

学生は隊員の指導を受けたおかげで、会話力、ヒヤリング力がアップし、希望の職に就くことができたという。

上述のような成果を収めた理由として、受け入れ先の体制が整っていたこと、隊員の教授レベルが高いこと、ニーズに合致していること、隊員と受け入れ先とのコミュニケーションがよく取れたこと、隊員が学校の体制についてたびたび意見を寄せてくれたこと、隊員が常時教員室に待機していたおかげでうまく交流が図れたこと、学生との間に良好な人間関係を築くことができたこと、JICA による支援があったことなどが挙げられる。

4. JICA の 2 種類のボランティアについて

	<p>青年海外協力隊員、シニアボランティアという JICA の 2 種類のボランティアについて、前者しか知らない。後者についてはよく知らない。</p> <p>可能であれば、文化、文学、文法、経済について、高い学識を有する教員を派遣してほしい。北京のような大都会ではないため、このような教員を招聘することが非常に難しいためである。</p> <p>5.申請に必要な時間の適切さについて やや長いと感じる。一部の隊員の派遣時期が学校の新学期の開始時期とずれたことがあるため、授業に一部支障を来した。</p> <p>6.隊員に対する期待 日本を紹介する窓口になってほしい。言葉の勉強は文化の勉強でもある。ネイティブによる教育が大切である。中国の大学生の一部は日本に対する誤解がある。日本語科の学生でさえ、日本が戦争を好む国だと思込んでいる人がいる。日本にとっては文化の輸出が最も重要だと思う。それを実現するために、草の根レベルの人と人との交流が大きな役割を果たしている。隊員はまさにこのような役目を担っていると考える。たとえば、山下隊員は人としての魅力によって、日本の代表のような存在となり、大勢の学生に愛されていた。彼女を通じて、学生の日本に対する認識は変わったといえる。</p> <p>文化の使者、交流の架け橋のような役割を果たしてほしい。</p> <p>6.今後のニーズについて 個人契約で日本人教員を受け入れているが、隊員のような制度で保証されている派遣を必要としている。当校が費用を半分負担してもよい。</p> <p>可能であれば、社会各界に広い人脈を持ち、学問的造詣が深く、客観的かつ幅広く日本を紹介してくれる人材を派遣してほしい。</p> <p><徐主任のコメント> 残念なことは、深山隊員が SARS のとき、一時帰国したことである。このことについて、学生からの理解を得ることができなかった。当時 4 人の日本人教員がいたが、2 人は帰国しなかった。充分説明してくれれば、学生も理解ができたと思うが、残念ながら、説明が足りなかったため、一部の学生が違和感を抱いた。</p> <p>他の組織からボランティアを受け入れたことはない。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>
--	---

面談録 黒竜江省 2

2006 年 12 月 13 日 (水)

記録者：万紅

日 時	12 月 13 日 (水) 9:40~11:00	
参 加 者	ハルビン工程大学外国語学部日本語教研室室長 ハルビン工程大学外事処副処長 ハルビン工程大学外事処 ハルビン工程大学外事処 黒竜江省科学技術庁国際合作処担当 北京大来創傑諮詢有限公司	王 映哲 劉 文 丁 学忠 白 振国 馬 海燕 万 紅
場 所	ハルビン工程大学外事処執務室	
概 要	<p><丁学忠氏> 管理レベルの立場から隊員の活動を評価したい。3 代の隊員はいずれも熱心で、当校の日本語教育に大きく貢献してくれた。</p> <p>学校の方針として、第一外国語としての日本語教育に力を入れるとともに、第二外国語としての日本語教育も今後強化していきたい。若手日本語教師の能力強化も今後の活動の重点としたい。この意味から、教授レベルが高く、活動能力が高い日本人教員の招聘が非常に重要となる。</p> <p><王映哲女史> 1.外国語学部の概要 当校は日本語学科を設けていない。日本語教研室は専門学部の学生の第一外国語と第二外国語としての日本語教育を担当している。中国人教員は 4 人。日本人教員は会話、ヒ</p>	

ヤリング、作文を担当。第一外国語に英語を選ぶ学生が増える傾向にあり、日本語を選ぶ学生は従来の数十人から十数人に減った。一方、第二外国語に日本語を選ぶ学生が増え、第二外国語としての日本語授業の受講生は1クラス100人前後に上る。当校は4年制であるが、第一外国語としての日本語教育は大学2年生まで。3年生以降は日本語の授業はなくなる。修士課程には、日本語の授業がある。現在第一外国語として日本語を勉強している学生は1年生と2年生あわせて20人前後。

2. 隊員の活動についての満足度

当初は教員や学生の日本語能力向上における隊員の役割を期待していたが、実際には、教授法の革新、共同研究の展開、学术交流にも大いに貢献してくれ、期待以上の効果を収めているため、大変満足している。派遣された隊員は総じて資質が高く、教授能力も高いため、隊員の活動について、非常に満足している。最も満足している点は、語学能力の高さ、教授レベル。

1代目の山下隊員は非常に明るくて、学生と頻繁に交流を図った。

2代目の鈴木隊員は仕事ぶりが謹厳で、学問的な造詣も深い。中国人教員の質問にいつも即答してくれた。学生は彼女の授業を通じて、日本人の業務への取り組み方も学ぶことができたという。

現役の林隊員は2人の長所をいずれも持っており、大いに活躍してくれている。

1代目の隊員は第二外国語としての教材の作成に協力してくれた。

2代目と3代目の隊員は院生向けの日本語教材の作成に協力してくれている。

3代目の隊員はさらに広い範囲で協力を展開しており、当校の新世紀教育改革の一環として第二外国語教授法の研究と一緒に取り組んでいる。この研究が完成するまで、隊員の協力が不可欠であるため、隊員の派遣を延長してもらいたい。万が一、延長不可能な場合、早めに結果を知らせてほしい。

隊員と受け入れ先とのコミュニケーションがよく取れている。隊員は休暇期間中の旅行計画を事前に書面で教研室と外事処に提出、学校側もクリスマス、新年や隊員の誕生日に隊員を招待したり、プレゼントを贈ったりしている。

隊員の性格は明るく、C/Pや学生とうまくコミュニケーションが取れている。

日本人教員が学生とよくコミュニケーションができなければ、言葉を教えるという最も基本的な目標の達成も期待できないだろう。

毎週金曜日の午前10～12時に、中国人教員向けの勉強会を開催、中国人教員が事前にテーマを提起したり、日本人教員が特定テーマを決めたりして、交流を図っている。

3. 隊員の活動によるメリットとその要因について

学生にとっては、ネイティブによる教育が実現でき、能力が著しく向上した。

教師にとっては、隊員の派遣により、日本人に直接教わることができた。辞書には載っていない新語について、日本人教員に教えてもらうことができ、中国人教員の能力向上につながった。

日本人教員が直接日本語で授業することによって、学生の会話やヒヤリング能力がアップした。

学生向けのアンケート調査の結果、日本人教員はテキストにこだわらず、さまざまな手段を駆使し、学生の日本語に対する興味を引き起こすことに努めたという。このような授業は、中国人教員でもできないわけではないが、カリキュラムに定められている内容をこなすのに精一杯で、学生の興味まで考える余裕はなかった。

現在の微妙な日中関係のせいで、一部の学生は日本に対して抵抗感を持っているが、日本語を学ぶ学生は日本人教員と接し、交流したおかげで、このような感情を持っていない。この意味から、学生の日本文化の吸収・理解に役立ったと言える。

歴史は変えられないものの、学生に日本の文化、行動方を理解してもらうことは、学生の観点の転換につながった。

隊員の指導により、学生の作文能力が著しく向上した。JICA主催のスピーチコンテストや、日本の民間主催の桜カップコンテスト、省内のスピーチコンテストなど、学生はいずれも素晴らしい成績を収めた。省内の8大学が参加するスピーチコンテストで、当校は1年目に奨励賞、2年目に三等賞を受賞した。日本語学科がない当校にとって、この

	<p>ような成績を収めることができたのは隊員のおかげだと思う。</p> <p>隊員のおかげで、学生はよい職を得ることができた。日本語教研室は日本語履歴書のフォーマットを用意し、学生に提供。隊員は学生の日本語履歴書の添削を請け負った。隊員と密に交流していることから、日本人の礼儀正しさ、業務への取り組み方など、学生や中国人教員の日本や日本人に対する理解が深まった。</p> <p>以上の効果を収めた理由として、当校の体制が整っていたこと、C/P が意欲的であること、隊員が真摯に業務に取り組んだこと、隊員の働きかけによる国際交流基金からの書籍の無償贈与を受けたこと、隊員の引継ぎが順調だったこと、隊員の定期健康診断の実施や定期会議の開催など JICA によるバックアップなどが挙げられる。</p> <p>4.隊員の活動のインパクト</p> <p>1 代目の隊員は日本語の書籍やビデオを提供し、日本語関連資料の貸し出し制度を構築した。また、中国人教員との間で、交換日記という形式によって、授業の内容や引継ぎの内容を交換し合い、よりいっそう効果の高い授業を行うことができた。この習慣は今でも継続されている。</p> <p>隊員が残してくれた日本の生活や風景を紹介する絵カードは今でも利用されている。</p> <p>5.他のボランティアとの比較について</p> <p>協力隊を受け入れる前に、シルバーボランティア協会が派遣した 2 人のボランティアを受け入れたことがある。</p> <p>シルバーボランティアは学問的造詣が深く、経験は豊かだったが、学生の意欲を引き出すための活発な教授法に欠ける。</p> <p>2 人のボランティアはいずれも 60 歳以上の男性で、生活面での心配がある。若い隊員については、この面の心配がいらぬ。</p> <p>シルバーボランティアは授業以外、ほとんど教員室に顔を見せなかった。これに対して、隊員は頻繁に教員室を訪れることから、若い中国人教員や学生との交流がよくできている。</p> <p>高齢のシルバーボランティアは健康上の心配があり、授業の負担が過度にかからないよう割当を考えなければならない。若い隊員については、この面の配慮は不要。</p> <p>6.隊員に対する期待</p> <p>教授方法の指導、教授方法の革新に関する共同研究に期待している。</p> <p>3 代目の隊員は当方の研究に参加し、論文の共同作成にも取り組んでいる。研究の継続性から、3 代目の隊員の任期を半年延ばしてほしい。</p> <p>7.派遣期間の適切さについて</p> <p>派遣期間は 3 年が妥当。2 年はやや短い。</p> <p>8.隊員の収穫について</p> <p>隊員にも大きな収穫があった。1 代目の隊員は HSK（中国語能力検定試験）10 級に合格し、帰国後も中国と関係のある仕事に携わっているという。2 代目の隊員も HSK8 級に合格した。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>
--	--

面談録 黒竜江省 3

2006 年 12 月 13 日（水）

記録者：万紅

日 時	12 月 13 日（水） 11:40～12:20	
参 加 者	黒竜江省中日友誼病院主任医師 黒竜江省中日友誼病院骨外科主任医師 黒竜江省中日友誼病院外事弁公室主任（C/P） 黒竜江省科学技術庁国際合作処担当 北京大来創傑諮詢有限公司	金 哲秀 張 忠哲 于 元龍 馬 海燕 万 紅
場 所	黒竜江省中日友誼病院会議室	
概 要	<于氏> 1.病院の概要： 日本全国自治体病院協議会の協力により、88 年に中日友好友誼病院を開設。日本側より	

	<p>2億1,000万円分の機材供与や専門家派遣を受け入れた。中国側は、黒竜江省の残留孤児や中国人の養親の医療のために便宜を提供している。</p> <p>90年から家田隊員、須田隊員、辻隊員の計3人を受け入れてきた。</p> <p>日本との協力展開に当たって、医師の訪日研修があり、日本語の学習ニーズが存在する。</p> <p><金氏></p> <p>会話能力の向上、日中友好の増進に寄与した。当時、日本人教員が青年海外協力隊員であるということは知っていたが、JICAの派遣だということは知らなかった。</p> <p><于主任></p> <p>日本語教育は在職者向けの夜間コースと、学習のために一時職場を離れた者向けの研修コースに分けて行われた。</p> <p>1. 隊員の活動によるメリット</p> <p>隊員の推薦により、2人のC/PがJICAルートの訪日研修に参加した。</p> <p>病院職員の日本語能力の向上につながった。</p> <p>コピー機や日本語ワープロなどの機材供与を受けた。</p> <p>医師の日本留学、訪日研修の実現に役立った。隊員が教えた受講生は全員訪日研修の試験に合格し、訪日研修が実現した。</p> <p>医師は日本語の習得により、黒竜江省に滞在する日本人の医療に寄与した。</p> <p>現在も、中日友誼病院という名前に頼って、黒竜江省に滞在している多くの日本人が同病院を訪れ、治療を受けている。</p> <p>隊員が赴任する前も、日本との交流はあり、ある程度日本を理解していたが、隊員との日常的な付き合いを通じて、日本や日本人に対する理解がさらに深まった。</p> <p>2. 隊員の活動のインパクト</p> <p>隊員が帰国した後、当時のC/Pが隊員から業務を引き継ぎ、一時期日本語教師として日本語の授業を担当した。しかし、残念ながら、本業があるため、長くは続かなかった。</p> <p>3. 今後の期待について</p> <p>隊員の派遣を再び受けることができるのであれば、第一希望は日本語教師、第二希望は看護師。</p> <p><于氏のコメント></p> <p>現在も、隊員とのプライベートな付き合いは続いている。隊員が帰国後、両親を連れて病院を訪れた。</p> <p>隊員以外のボランティアを受けたことはない。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>
--	---

面談録 湖北省1

2006年11月15日
記録者： 宇田川和夫

	時	11月14日(火) 17:00～18:30	
日 参 加 者		湖北省カン寧市科技局副局長	王 衛平
		湖北省カン寧市科技局工程師	陳 生江
		通城県政府副県長	田 利
		通城県科技局局長	王 胡 強
		通城県科技局副局長	李 慮炎
		通城県人民医院院長	金 凌?
		通城県人民医院副院長	李 金根
		青年海外協力隊 看護師	管 朋美
		湖北省科技厅 外事処 元副所長	余 養銓
		アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント	宇田川 和夫
		日中通訳	程 芸

場 所	通城県人民医院 外来棟会議室
概 要	<p><李 副院長></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 医院は2 甲レベルで、320 病床、スタッフ全員で 500 人 2. 菅隊員は3 ヶ月前から内科2 科で勤務。 3. 生活には慣れてきたようだが、患者の方言が理解できず、悩んでいる。 4. 病院が一番気にしているのは、菅隊員の安全。病院敷地内は安全だが、外に行くときには十分に気をつけるように指導している。 5. 通城県は交通の便が悪いため、未だ発展途上だが、港南、港北、広西の中間点に位置することから、急速に発展中。 6. 隊員を要請したのは、日本の素晴らしい技術を学ぶため。 7. カン寧市科技局の人と話して要請することにした。 8. 医院には外来が20 万人、入院患者が1 万3000 人あり、医者も看護婦も不足しているので、日本のようなきめ細かな看護はできない。 <p><王 カン寧科技局副局長></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 前に、2 人の隊員を入れて、日本人はまじめで決まりとおりに働き、性格も良いことがわかった。作業の手順など決まりも作ってくれた。 2. 村山さんは帰国後も連絡が続いているし、森山さんのお父さんは現地に来てくれた。 3. カン寧市中心病院では放射線技士が欲しいと思っている。 4. サッカーの隊員をリクエストしたが、実現しなかった。 <p><CP></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 初めて会った日本人・外国人。仕事の仕方が違うが、看護の仕方について管隊員が書いた中国語をCP が校正するなど手伝っている。 <p><管隊員></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 通城の方言が難しく大変苦しんでいる。 2. 赴任当初、連日のように食事に誘われ飲むことが多かったが、最近は少なくなった。 3. 街中は自由に動けるし、治安の問題はない。 4. 自分がこの街で始めての外国人ということを感じる。 5. 最近、黄石市の日本語隊員に誘われてスピーチコンテストの審査員をしに行ってきた。同期隊員とも会えたとし、良い息抜きになった。 6. 9 月の日中看護学会には出席したかったが、着任早々であったため実現しなかった。 7. 住環境は、2LDK のスタッフの宿舎をあてがってもらっている。家具やテレビ、炊飯器など電気製品も新品を揃えてくれている。 <p>以上</p>

面談録 湖北省2

2006年11月18日
 記録者： 宇田川和夫

日 時	11月14日(火) 13:00～17:00 15、17日分も加筆
参 加 者	湖北省科技厅 外事処 元副所長 余 養銓 荆州市科技局 戴 治平 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 宇田川 和夫 日中通訳 程 芸
配 布 資 料	
場 所	武漢空港から通城までの車中 および荊州
概 要	<ol style="list-style-type: none"> 余さんは、孫剛さんから依頼されて今回のアテンド役となった。元湖北省科技厅外事処副所長、交流センター副所長。1972年から2000年まで勤務。現在はフリーのコンサルタントとして、就業者への日本語指導など行っている。外事処勤務時に日本留学(9ヶ月)など経験し、かなり日本語ができる。 印象に残っている隊員は、黄石市の日本語隊員や看護師隊員。荊州のサッカー隊員。黄冈市の幼稚園教諭のところには行った事がある。本日の予定は、通城県に直行し、湖北省通城県人民病院訪問 途中、カン寧市で王科技局副局長と陳工程師と合流して通城へ向かう。 湖北省には外国人の学校の先生が多く入っている(アメリカ、イギリスなど)。工場にはロシア人技術者も来ている。こうした受け入れは専門家局などが窓口で、科技厅では把握していない。 湖北は北京、上海について大学の数が多いところ。武漢大学、華中科学技術大学が有名。 華中技術大学の校長が科技厅長、武漢市長を経て現在教育部部長。 通城から黄石までは、ローカル道路で赤壁まで1.5時間、京珠高速上り1時間で着く。 黄石は鋳工業、セメント、建設材料、服飾で有名。日本の服飾企業も入っている。 荊州には6年間に3人の看護師が派遣された。 ICU セクションを作る作業など行った。 仕事の態度、時間厳守、重病の患者の看護など、協力隊員は良く患者の面倒を見た。 このため、3人とも衛生局の労働模範として表彰された。 中国の看護は注射、薬の調合、採血が主だが、日本は患者中心の看護なので、実際に教えるのは難しい。 この他にもサッカーの隊員が派遣されている。 <p><程> ・中国では、家族が入院患者の身の回りの世話をする。家族ができない時は、仲介業者を通して介護人を雇う。介護人には30元/日程度支払う。</p> <p><戴> ・幼稚園の先生と中学の日本語の先生を要請したが、2年経っても何の連絡もない。西川調整員(当時)が現地での受け入れ態勢の確認に来ている。現地では受け入れ準備もして待っている。どのような状況にあるのか知らせて欲しい。</p> <p><宇田川所感> ・これまで、1年程度で隊員が派遣されていたらしい。採択されたのかどうか、募集や応募状況など現地に対するきめ細かな情報提供が必要だと感じられた。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>

面談録 湖北省3

2006年11月17日
記録者： 宇田川和夫

日 時	11月16日(木) 11:00～13:00	
参 加 者	黄崗師範学院 国際交流処 処長 黄崗師範学院 外国語学院 院長 黄崗師範学院 外国語学院 日本語系主任 黄崗師範学院 外国語学院 書記 黄崗師範学院 外国語学院 副院長 黄崗師範学院 外国語学院 教師 黄崗科技局 副局長 黄崗科技局 科長 現協力隊担当 黄崗科技局 科長 元協力隊担当 湖北省科技厅 外事処 元副所長 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 日中通訳	赤 進仕 李 輝望 張 金榮 劉 傑 岑 海兵 魏 娟 張 建民 胡 艶清 院 仲斌 余 養銓 宇田川 和夫 程 芸
配 布 資 料		
場 所	黄崗師範学校 会議室	
概 要	<p><李 院長></p> <ol style="list-style-type: none"> 学院は学生数1万3000人、教員数1000人 外国語学院は英語、日本語、仏語、独語、ロシア語の5科があり、在籍学生数2274人、教員数153人 日本語学科在籍学生数373人、教員数13人 日本語教育の強化を目指し、協力隊を要請し、1993年に長江隊員が赴任した。 以来、現在の小谷隊員まで合計5人の隊員が派遣された。 長江隊員のときは英語の第2外国語の位置づけだったが、学科設立を目指し、教員の養成を開始した。歴代の隊員により、教員は育っている。現在も1人が日本に留学中。 1998年に日本語科学生(3年間の短期コース)の募集が始まり、これまで6回の卒業生を出している。 2002年から4年生大学コースが開始され、現在29人が最初の4年生になっている。 将来は大学院コースも開きたい 隊員が居たからこそここまでとどり着くことができた。 隊員の良さは勤勉さ、責任感の強さと仲間との付き合いの良さ。学校内だけでなく、一般の住民と学院の交流も深めてくれた。 長江隊員の頃に始まった外国語学院の先生で始めた各国文化の紹介を取り入れた劇は、一般の住民にも開放したもの。現在でもクリスマスの年中行事となっている。 学生の就職は日系や合弁企業を中心に、ほぼ100%が就職している。場所は深セン、広州、上海など。 学生と教員に様々な勉強の機会を与えてくれたこと、日本に行く機会を作ってくれたこと。 会話コースや、技術・科学書の翻訳も指導した。 JICA主催の作文コンクール、スピーチコンテストで優秀な成績を収めている。 インターネットを使って日本の京都大学の学生有志とのコミュニケーションを行った。機材は協力隊からの支援だった。 <p><学校からのリクエスト></p> <ol style="list-style-type: none"> 隊員を継続して派遣してほしい。4年生の論文を指導することができるような先生。分野は言語学、文学、経済などの知識もある50代の先生が理想。修士を持っている若い先生でもよいかもしれない。 先生を日本に派遣してほしい 	

	<p>20.教材についての協力と日本語資料室を作る協力をお願いしたい</p> <p>21.京都大学との交流を進化させたいので補助してほしい</p> <p>22.中国のことを日本で話して欲しい</p> <p><科技局元担当 院さん></p> <p>23.協力隊受け入れまでの過程について、当初科技部、科技厅からの話を聞き、学校などの責任者を集めて宣伝のための会議を開いた。師範学院とは連絡を取り続け、要請を出すことになった。提出後、隊員が来るまで2年間待った。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>
--	--

面談録 湖北省4

2006年11月18日
記録者： 宇田川和夫

日 時	11月16日(木) 13:30～14:45	
参 加 者	<p>黄崗市代代江幼稚園 園長代行</p> <p>黄崗市代代江幼稚園 保母 CP</p> <p>黄崗市代代江幼稚園</p> <p>黄崗科技局 科長 現協力隊担当</p> <p>黄崗科技局 科長 元協力隊担当</p> <p>湖北省科技厅 外事処 元副所長</p> <p>アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント</p> <p>日中通訳</p>	<p>黄 花煜</p> <p>郭 薇</p> <p>夏 玲</p> <p>胡 艶清</p> <p>院 仲斌</p> <p>余 養銓</p> <p>宇田川 和夫</p> <p>程 芸</p>
配 布 資 料		
場 所	黄崗市代代江幼稚園 会議室	
概 要	<p>1.幼稚園は1999年開園。当時の園児数は79人だったが、2006年には800人となる。</p> <p>2.数々の賞を取った優良な民間幼稚園で、政府のイベントには必ず子供が参加する。</p> <p>3.2000年から隊員の派遣を受けたが、目的は日本の先進的な幼児教育を取り入れたいから。</p> <p>4.隊員の受け持ちクラスは子供たちに大人気だった。指遊びや日本の歌も教えてくれた。</p> <p>5.2002年と3年の2回、隊員の努力で日本から幼児教育の小町先生を呼び、楽しい授業の進め方(快樂教育)のワークショップが開かれた。近隣の幼稚園の先生や他の協力隊員も参加し、大好評だった。</p> <p>6.隊員から学んだことは、仕事の準備をきちんとする、言葉使いと表情を大きさにすること、子供を友達のように扱うこと、子供と同じ目線で話すことなど。</p> <p>7.これまで試験を通るための教育をしてきたが、日本は新しい概念で子育てを行っていることがわかった。</p> <p>8.幾つかの歌を中国語に翻訳し、現在も使われている。</p> <p>9.岸本隊員は最初の試みとして、実験クラスを1クラス担当(子供40人、3人の保母が担当)、高津隊員は6クラスを受け持った。</p> <p>10.岸本隊員は現在でも園長と連絡を取り合っている。</p> <p><エピソード></p> <p>11.中国では子供の食事中に話をさせないが、日本から来た隊員は積極的に話しかけるという違いがあるので困った。結局、子供たちには食べ物を飲み込んだ後なら話してもよいと指導することになった。</p> <p>12.1999年にモデルクラスとして岸本隊員と2人のCPが受け持った。教案は、CPと隊員が議論しながら作った。子供を毎朝幼稚園の入り口で出迎え、教室に導くという習慣もつけた。授業では子供たちに日本語も教えたが、親や親族から大変喜ばれた。2年目からモデルクラスの人気が高くなり、受け持ちする子供の数が他のクラスより多くなった。</p> <p>13.調査団の突然の訪問なのに、昼寝からさめた子供たちと一緒に日本語で、バスの歌を歌ってくれた。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

面談録 湖北省5

2006年11月17日
記録者： 宇田川和夫

日 時	11月15日(水) 11:40～13:30	
参 加 者	湖北師範学院 对外合作交流処 所長 湖北師範学院 外国語学科主任 湖北師範学院 財務主任 湖北師範学院 日本語主任 黄石市科技局局長 黄石市科技局副局長 湖北省科技厅 外事処 元副所長 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 日中通訳	羊 国欣 張 光葉 平 培新 藩 並洋 王 志超 李 晚平 余 養銓 宇田川 和夫 程 芸
配 布 資 料		
場 所	湖北師範学院 外国語学科 会議室	
概 要	<p>1. 2000年からこれまでに協力隊を4人(うち、早期帰国1人、短期派遣1人)受け入れた。</p> <p>2. 外国語学科には日本語科がなかった(藩先生1人だけで英語の第二外国語だった)ので、協力隊員の仕事は先生の雇用の相談と養成から始まった。</p> <p>3. 先生は大学の日本語学科を出た者や他の大学ですでに日本語を教えている先生を雇用了。現在8人の日本語の先生が所属。</p> <p>4. 日本語学科は2003年に創設し、2004年から学生の募集を開始した。</p> <p>5. 現在の学生数は2004年(55人)、2005年(60人)、2006年(60人)各学年2クラスずつ。</p> <p>6. 隊員は会話などの授業と若い先生の養成を行ってきた他、日本文化の紹介(すしの作り方、着物の着付けなど)を行った。</p> <p>7. 作文コンテストやスピーチコンテストを企画開催し、周辺の協力隊員や日本の企業の人たちも巻き込んだ活動を行った。</p> <p>8. 4人ともまじめで学校の規則もきちんと守った。授業計画作りの緻密さなど、隊員は他の先生に模範を示した。</p> <p>9. C/Pの先生に日本での研修機会を与えた(1人は1年、4人を1ヶ月ずつ)</p> <p>10. 学生の就職先については、まだ卒業生を出していないが、事前のアンケート調査で、沿岸域や武漢の日系企業合弁会社での就職は十分に有ると予想している。</p> <p>11. 日本の文化、文学、言語学など3-4年生を教える先生が不足している(現在、学院の国語学科には中国と日本の文化の比較研究をしている中国人の先生にてつだってもらっている)</p> <p>13. 初代隊員は健康が優れず早期帰国したが、後日プライベートで訪中し、中国人男性と結婚している。</p> <p>14. リクエストとしては、若い先生を日本に行かせたいことと、高学年を教えるベテランの先生が2人くらい欲しい <鎌田隊員></p> <p>15. 現在の鎌田隊員は自分が最後の派遣ということで任期延長している。</p> <p>16. 湖北師範学院の初代隊員要請は、黄石市科技局の担当者と学院の先生が知り合いだったことから話が進んだ。</p>	
	以上	

面談録 湖北省 6

2006年11月17日
記録者： 宇田川和夫

日 時	11月15日(水) 15:00~16:00	
参 加 者	黄石市中心病院 副院長 黄石理工学医学院 看護教育主任(元黄石衛生学校 C/P) 黄石市科技局局長 黄石市科技局副局長 湖北省科技厅 外事処 元副所長 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 日中通訳	胡 並貨 皮 擘敏 王 志超 李 晚平 余 養銓 宇田川 和夫 程 芸
場 所	黄石市中心病院 会議室	
概 要	<p><胡 副院長></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 中心病院では隊員を1人受け入れた。配属は呼吸器内科。1年8ヶ月間勤務した。 2. 中心病院は800床の3甲病院。地域の中核となる病院。 3. 隊員の仕事ぶりがまじめで効率も良く、患者との交流を大切にされたため、患者からの評判は良かった。 4. カルテが読め、医者の指示も理解し、薬の配合もできるようになった。 5. 中国と日本では看護師の役割が違う。中国では注射や採血など行うが、日本では看護師が注射をしないのではないか。 6. 葉は、方言が難しく、患者との会話は難しかったようだが、CPとは仲が良く、会話できていた。 7. 旅行が多く、事前に許可を得ていたとはいえ、出勤率は56%だった。遅刻も多かった。 8. 隊員が配属された時新しい病院が完成し、ユニフォームが変わったが、隊員には古いユニフォームしかなく、隊員は勤務を拒否した。 9. 中国で看護するためには、言葉は重要。 <p><皮 看護教育主任></p> <ol style="list-style-type: none"> 10. 衛生学校でも、中心病院と同じ時に隊員を受け入れた。2年間の予定だったが、体調を壊し、早期帰国した(甲状腺の病気で、手が震えるなどの症状があった) 11. 1年目に教案を作成し、2年目から授業してもらった予定だった。 12. コミュニケーションは、中国語、英語、日本語を混ぜて行った。明るい性格で、CPとは仲良く過ごしていた。 13. 学生は日本の先進的な看護の方法を知りたいという期待が有った。 14. 受け入れ側としても隊員を理解しようとし、日本語会話コースを作った。隊員は一生懸命教えたのだが、難しかったので長続きしなかった(4回実施)。 15. 隊員は中国のやり方を理解するために、中国の先生の講義準備を手伝った。 16. 毎週交流会を開き、日本のやり方を先生たちに紹介していた。 <p><皮 主任からのアドバイス></p> <ol style="list-style-type: none"> 17. 看護学校には臨床の看護婦ではなく、看護学の先生経験者でないと務まらない。 <p><鎌田隊員></p> <ol style="list-style-type: none"> 18. 中心病院の隊員は、いまでも患者から感謝されるほど良い仕事をしたし、婦長の評価は高かったと聞いている。出勤が遅れたのは他の協力隊看護隊員との共同作業で夜遅くまで勤めたためだろう。旅行も隊員に与えられた20日間の休暇の範囲にあったと思う。 19. 看護学校の隊員は良かったというが、次の隊員を要請しなかったという事実もある。 <p><宇田川感想></p> <p>隊員側の意気込みと受け入れ先の期待がすれ違っていたように見受けられる。自分の持っている力を存分に発揮できなかったのは残念だったと思うが、隊員側も中国側に対して甘えもあったのではないか。</p> <p>黄石市科技局は、親身になって仲介役を務めていたようだ。</p>	
	以上	

面談録 湖北省 7

2006年11月18日
 記録者： 宇田川和夫

日 時	11月17日(金) 15:15～17:00	
参 加 者	荊州市中心病院副院長 荊州市中心病院 科学教育科 荊州市中心病院 看護部 副主任(2 隊員の CP) 湖北省科技厅 外事処 元副所長 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 日中通訳	周 先略 睨 利蓉 付 沫 余 養銓 宇田川 和夫 程 芸
場 所	荊州市中心病院会議室、夕食会	
概 要	<p><周 副院長></p> <ol style="list-style-type: none"> 1.中心病院は1950年建設の3甲病院。1050床、スタッフ1100人、外来50万人、入院患者数28000人/年。7割が医者と技術者。うち博士・修士が100人。内視鏡の技術は高いと評判。7科の診療科、10項目の研究開発、年間200件くらいの研究論文発表。ドイツの病院と人員の交換派遣を行っている。 2.1998年に高木隊員、2004年に佐藤隊員を受け入れた。目的は友好と技術交換。 3.高木隊員はICUに半年間、外来急患に1.5年勤務した。日勤・夜勤を中国の看護師と同じように担当した。 4.CPは当時28才で、高木隊員から日本のやり方を学んだ。高木隊員も徐々に中国語が達者になっていった。 5.隊員は努力している様子が見られ、病院関係者に良い影響を与えた。 <p><付 副主任></p> <ol style="list-style-type: none"> 6.高木隊員の強い勧めもあり、2000年6月から2001年3月まで、10ヶ月間の日本での研修に参加した。当初、自分の小さな子供を置いていくことに抵抗があったが、行って本当に良かったと思っている。日本の患者中心の看護を学ぶことができた。 7.中国に戻って、しばらくして、2004年に佐藤隊員が派遣された。彼女は最初は中国語がうまくなかったもので、自分が日本語をまじえて説明し、日常生活を含んで面倒を見、問題があれば解決していった。 8.佐藤隊員の担当はICU、外来急患、心臓内科で、病院のスタッフも患者も佐藤さんの働きぶりに感心していた。 9.佐藤隊員と共に日本の看護の講義を行うことにした。 10.病院内で、1年目には呼吸理学療法の講義、2年目の帰国前には患者中心の看護の講義を行った。中国語で発表するために彼女は一生懸命に勉強した。付さんはデモンストレーションを引き受けた。佐藤隊員は、発表の準備のストレスで髪の毛が抜けてしまい、病院で治療を受けながら頑張った。 11.荊州第1人民病院の三田隊員と共同で、2005年に中日友好看護会議の開催に漕ぎつけた。 12.2006年9月には蘇州で第10回日中看護学会が開かれ、中国協力隊看護隊員が論文を発表した。佐藤隊員は帰国済みであったが、日本から学会に参加した。 13.こうした講義を通して、看護技術については日中で違いがないが、看護の理念については日本の良いところを示すことができた。患者と看護師の信頼関係について、中国でも少しずつ患者が大切という意識が出てきて、日本式の看護が受け入れられるようになってきた。 14.自分は今後、看護の管理を学びたいと思っている。 15.佐藤隊員とは現在もメールのやりとりがある。高木隊員とは郵便で連絡している。 16.隊員の力で、ストレッチャー2台と、車椅子2台が供与された。 17.今後も協力隊員に来てもらいたい。他の看護師にも日本での研修の機会が与えられるとよい。 <p><宇田川所感></p> <p>付さんが日本に行ったことで、佐藤隊員の活動がより活発になったばかりでなく、中国の看護隊員全員に良い機会を与えたのではないかと。相互派遣が友好に機能する良い事例だと思う。付さんは、今後も日中の看護の交流に貢献していくと思われる。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>	

面談録 湖北省8

2006年11月18日
記録者： 宇田川和夫

日 時	11月17日(金) 13:30～15:00	
参 加 者	荆州市人民第1病院(長江大学付属第1病院)副院長 荆州市人民第1病院(長江大学付属第1病院)科学教育科課長 荆州市人民第1病院(長江大学付属第1病院)科学教育科副課長 荆州市人民第1病院(長江大学付属第1病院)普通外科看護師長 CP 荆州市人民第1病院(長江大学付属第1病院)看護師 CP 湖北省科技厅 外事処 元副所長 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 日中通訳	劉 偉 王 玉景 蔡 宇 鄧 世紅 陳 静 余 養銓 宇田川 和夫 程 芸
配 布 資 料		
場 所	荆州市人民第1病院会議室、昼食会	
概 要	<p><劉 副院長></p> <ol style="list-style-type: none"> 人民第1病院は1949年設立、現在900床。 初代の三田千鶴隊員は2004年4月28日に着任。 荆州市と友好関係に有る福島県会津市竹田病院で1年間の研修を受けた田先生(現在は副院長)の下に配属された。 対外交流を大切にしているので、協力隊のことを科技厅や科技局から聞いて要請した。 協力隊員には看護に関する日本の新しい考え方と理念を入れてもらいたかった。 住居や家具など準備し、隊員が到着次第快適に生活できるようにして待っていた。 到着後、中国の仕事の流れを教えた。 基本的に中国の看護婦と同じ仕事をしたが、夜勤は入れなかった。 最初は言葉に困難があった。中国語の研修3ヶ月だけで派遣するのは期間が短すぎるのではないかと。しかし、終わる頃には方言も話すようになった。 次に受け入れる時は、もっと経験が豊富な看護師を望んでいる。 隊員の受け入れに当って、長江大学の日本語教授(日本人)に頼んで日本語クラスを開いて勉強した。 隊員は他の看護隊員と共に日中の看護師の交流学会を開いた。 <p><鄧看護師長></p> <ol style="list-style-type: none"> 当時、CPとして国の文化習慣など日常生活も含め交流を深めた。 3回の学術研究会議は中国語で行ったので、お互いに協力しながら資料作成した。 会議では日本の看護の仕事の範囲、仕事をする環境をロールプレーや体験実習を通して紹介した。 仕事への取り組みかた、患者への接し方を学んだ。 会議の発表資料作成は、時には徹夜で行った。 昨年(2005年)の会議では、周辺の6人の協力隊看護隊員(新疆、広西、四川、湖北)が、そのCPと共に参加した。現地の看護師など100人が集まった。 今年の会議では患者の保護の仕方、患者への手術前の情報伝達などがテーマに上がった。 病院では毎年、町にでて無料の検診や健康相談を受けるといふ催しがある。三田隊員も参加し、日本人と知って集まる住民とのコミュニケーションにも貢献した。 隊員はブログで中国での結婚式の体験などを日本に紹介していたし、日本から友人が訪ねてくるなど、友好関係にも貢献した。現在でもメールなどで連絡が続いている。 赴任してすぐに有った国際看護の日の祝典に和服を着て参加し、日本の歌も披露した。 三田隊員は明るくまじめで良かったが、次の隊員は看護婦長クラスの経験豊富な人が欲しい。 <p style="text-align: right;">以上</p>	

面談録 湖南省1

2006年11月21日
記録者：宇田川和夫

日 時	11月20日(月) 午前9:00-13:30	
参 加 者	湖南省科技厅外事处处长 中南大学 副校長 中南大学 国際交流処所長 中南大学 国際交流処副主任 中南大学 外語学院日本語学科教授 湖南大学 国際交流処 湖南師範大学 国際交流処 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 通訳	魯 華 李 桂源 梁 淑金 張 薫 陳 月吾 宋 雪梅 宇田川 和夫 程 芸
配 布 資 料	科技厅 協力隊受け入れ概要、隊員名簿 各大学の日本語隊員活動報告	
場 所	車中、中南大学会議室など	
概 要	<p><魯 処長></p> <ol style="list-style-type: none"> 魯処長は1984年に科技厅に入り、協力隊の受け入れを担当した。 湖南省での最初の隊員は1988年に入った美術隊員。当初は農業や自動車整備、服飾など様々な職種を受け入れた。 中国国内の発展に伴い、農業隊員の需要もなくなり、最近では日本語、幼稚園教育分野の隊員が多い。 湖南祭りは中南大学を日本語の隊員を中心として始まった。科技厅も支援しており、成功事例といえる。日中友好と湖南省の経済発展に貢献している。 隊員の配属先を地域的に計画しているわけではない。要請が上がれば検討している。 毎年4-5件の要請が地方の科技局から上がってくる。 県によっては方言しか話さず、国際交流の意識もない場合があり、隊員が孤立感を感じる場合がある。 生活環境の問題も有り、県に派遣する隊員は男性の方が良いだろう。 これまでの経験で、隊員の性格は前向きで明るく、よその国の文化を受け入れることが大切。内向的な人は部屋に閉じこもり、周囲ともうまくやっっていけない。 <p>井本隊員の作文の授業を参観。宮沢賢治の詩をつかうなどして言葉の使い方を学んでいた。3年生の授業だが、初見で漢字かな混じりの文章を読めるようになっている。25人中5人が男子学生。</p> <p>< 井本隊員 ></p> <ol style="list-style-type: none"> 陳教授は数年後に定年退職するので、若手の先生に少しずつ業務を任せるようにしている。 陳教授が中南大日本語教育と協力隊受け入れの先導者。陳教授の後の体制づくりが急がれる。 協力隊員は日本語教師である以上に湖南祭りの実行など、課外活動の任務が大きい。湖南祭りの運営を中国側に全部任せるのは難しいと思う。 協力隊派遣がなくなり、10年間かけて築いた関係が疎遠になってしまうのは残念。 隊員は充実した活動を行っている。満足度高い。 <p><中南大学副学長></p> <ol style="list-style-type: none"> 中南大学は2000年9月に3つの大学(工業大学、医学大学、鉄道学院)が合弁してできた大学で、学生数5万人、教職員数2万2000人。中国でもトップクラスの規模と予算を持つ。 <p><中南大学 国際交流処 梁処長></p> <ol style="list-style-type: none"> 湖南祭りを高く評価している。複数隊員の派遣も含め、JICAに協力隊派遣継続をリクエストした 	

い。

〈中南大学 陳教授〉

- 17.日本語教師は12人、うち8人が本校で教える。本校には日本語学科の建物がある。
- 18.1996年から協力隊を受け入れ、今年で5代、10年になる。
- 19.陳教授は日本で生活した経験もあり、隊員受け入れには最初からずっと関わって、面倒をみてきた。
- 20.2002年の国交正常化30周年を記念して、中南大学で日本文化紹介のイベントを開催した。スピーチの協力隊員もつくった。
- 21.このイベントをきっかけにして、周辺の大学や高校も巻き込んだ湖南祭りが始まった。
- 22.協力隊員の受け持ち授業時間は通常の16時間ではなく、10時間に押さえてあり、授業以外の多面的な活動ができるようにしている。
- 23.大学が日本人の日本語の先生を独自に雇用しても、日本語を教えるだけになってしまい、今のような幅広い活動は期待できない。
- 24.日本語の先生は30代の先生が多く、全員が大部屋に集まって仕事をしているので、協力隊員の優れた仕事のしかたを学べる。
- 25.中南大の日本語学科は1999年に始まり、毎年約25人の入学者。2002年には大学院の学生も取るようになった。現在、在校生100人、院生6人。
- 26.任期が終わった後の隊員とも手紙やメールで近況を教えあっている。

〈湖南大学 国際交流処 担当者〉

- 27.湖南大学は日本語の研究で歴史がある。陳教授も湖南大学の卒業生。湖南大学でも教えている。
- 28.外国語学科200人の教員のうち、日本語学科の先生は約30名。学部学生数400人、20-30人の院生。
- 29.協力隊は3代目だが、日本語学科の強化を図るため継続して派遣を望んでいる。

〈湖南師範大学 国際交流処 担当者〉

- 30.協力隊員の勤める観光学院には第2外国語で日本語を取る学生が200人、先生が2人いる。
- 31.学生の就職先はシンセンなどの日本企業。新卒で年収6万円もらう学生も出ている。

〈宇田川 所感〉

- ・中南大学の活動を見ると、日本語教師隊員の活動の典型を見るような気がする。受け入れる陳教授のビジョンと隊員の活用方法、活動への理解とサポートが大きい。こうした関係は大切に守り育てたい。5代で派遣打ち切りという方針は重要だと思うが、受け入れ機関の体制、協力隊活動への理解、勤務環境、効果、隊員の満足度を勘案し、臨機応変の対応も必要だろう。
- ・貧困削減というJICA・協力隊の目標を達成する上で、隊員を県や村レベルの僻地に配置することは重要。しかしながら、受け入れ先が方言しか話せない環境で、なおかつ国際協力の理解が少ない場合は、隊員の負担は大きくなる。
- ・科技庁の魯処長は、初期の隊員の担当であったため、当時の様子を聞くことができた。JICAが良い関係を構築してきたことが伺われる。今の担当は大学新卒の劉さんという男性だが、彼も地方の隊員の派遣先(悠県)まで何回も出向き、問題解決に努めている。

以上

面談録 湖南省2

2006年11月21日
 記録者： 宇田川和夫

日 時	11月20日(月) 午後3:00-4:00、20:00-21:00	
参 加 者	株州市婦女子児童活動中心 園長代行 株州市婦女子児童活動中心 協力隊員 株州市自来水公司啓蒙芸術幼稚園 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 通訳	唐 唐 石原 弓子 藤原 由紀 宇田川 和夫 程 芸
配 布 資 料		
場 所	株州市婦女子児童活動中心など	
概 要	<p><唐 園長代行> 唐さんは2代目隊員から正規のCPとなったが、初代の隊員の時から日本語を学びはじめ、今ではかなり流暢に日本語を話すようになっている。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 幼稚園では、2000年以來、石原さんまで3代の協力隊員を受け入れている。 2. 石原さんは各クラス、週1時間づつの遊びの時間を受け持っているほか、副担任としてクラスを1つ持っている。子供たちは石原さんの授業が楽しみに待っている。 3. <u>子供の視線で話すことや、子供と一緒に遊べるところが中国人の先生と違う。中国では先生はあくまで指導する上位者としての存在だ。</u> 4. これまでの3代の隊員から子供への接し方を多く学んだ。 5. 教わった手遊びは自分で改良してクラスで歌っている。 6. 隊員のおかげで、オマチマンが毎年来てくれる。コンサートなど、楽しくなるワークショップ。 7. 日本の歌を中国語に直して歌っている。ウルトラマンも大好き。 8. 親の中には反日感情を持った人もいる。 9. 幼稚園の先生たちの反応は、初代菊地隊員の時は見ているだけ、2代目の久保隊員から少しずつ参加し、3代目の石原隊員で、全員が参加するようになっている。 10. 久保隊員は帰国後に、オマチマンと一緒に幼稚園に来園。最近結婚した初代の菊地隊員にはビデオメッセージなど送るなど、現在でも交流が続いている。 <p><石川隊員> 11. 任期は来年4月まで。これ以上教えることもないので、延長や交替は申請しないが、同じ組織からは運営する小学校の先生を要請している。</p> <ol style="list-style-type: none"> 12. 冬の寒さがこたえる。この地域ではスチーム暖房がないので室内が寒い。 13. 幼稚園では、子供に無理やり食事を摂らせている。幼稚園では、やせると保護者から苦情が出るという心配がある。子供は食事を楽しんでいない。 <p><藤原隊員> 14. 自分は初代だった。交代を要請している。中国ということで合格しても辞退する受験者がいる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 15. 帰国後は前の職場(幼稚園)に復帰する。日本の職場は忙しい。 16. 子供たちの両親の多くがシンセンなどに出稼ぎに行っており、祖父母のもとに預けられ、日中は幼稚園に入れている。 17. 家ででの甘やかされた生活と、幼稚園での集団生活のギャップは子供にとって大きいので、十分に配慮した対応が必要。 <p>以上</p>	

面談録 湖南省3

2006年11月21日
記録者： 宇田川和夫

日 時	11月21日(火) 午前11:00-14:00	
参 加 者	衡陽市第7中学校 校長 衡陽市第7中学校 副校長 衡陽市第7中学校 日本語教師 衡陽市第7中学校 日本語教師 衡陽市第7中学校 日本語教師 衡陽市第7中学校 書記 衡陽市第7中学校 日本語教師 JOCV 衡陽市 科技局 アイ・シー・ネット㈱シニアコンサルタント 通訳	任 放明 謝 元雄 王 幼 周 敏 王 芳 曾 徳琳 小牧 陽二郎 候 小波 宇田川 和夫 程 芸
配 布 資 料		
場 所	衡陽市第7中学校	
概 要	<p><謝副校長></p> <ol style="list-style-type: none"> 協力隊要請のきっかけは、日本語の周先生が2001年に日本に行ったとき、協力隊の話を聞き、直ぐに衡陽市の科技局から申請書を取り寄せ、12月に提出した。JICAからは2回受け入れ態勢の調査があり、2003年に初代隊員を迎える事になった。 初代の角谷隊員は学生と先生も指導し、皆と仲良く生活した。昨年の反日の騒動の時も、周りの人が自主的に彼女に何も起らないように守り続けた。 今でも連絡を取り合っていて、彼女は大学院に入って日本で国語の先生になろうとしている。 2代目の小牧隊員は7月に赴任し、すぐに学校に馴染み、日本語サロンも作って活動を始めた。 日本語サロンは木曜の夜7時半から10時半まで、日本語愛好者が集まる。写真や記事を見ながら、またゲームをしながら日本語による交流を行っている。この外に月曜日の4時から5時までは高校2、3年生を対象とした日本語サロンも開いている。金曜日は先生の勉強会を開いている。 第7中学は、1984年に長江の南の高校(現地では中学と高校が一緒)では始めて日本語を教え始めた。2000年には衡陽市の教育局から日本語学校として認定された。 現在高校1年のクラスは70人前後で2クラスある。 日本語の授業が開始されたのは、当時学校の教員だった楊先生の発案から。楊先生の母親は戦前日本に留学した経験があることから、彼は日本に興味を持っていた。大学入試の外国語に日本語が導入された時、その内容が英語よりも簡単だったため、楊先生の発案により、7中で日本語学習に取り組むことになった。当時、10人くらいの生徒で始まり、90年代には学年1クラス、現在は各学年2クラスまでになった。 現在日本語教えている、王敏さんも周さんも楊先生から日本語を教わった。もう1人の王芳さんも退任した楊先生から日本語の手ほどきを受けている。 これとは別に、戦争中、中国の軍隊に入って働いた日本人がおり(呉建華という中国人名)、戦後は衡陽市の防疫部に所属していた。その人から個人的に日本語を習った人が10人前後いた。現在でも、10人くらいの人が衡陽市で日本語の会に参加している。科技局の候さんもその1人。 衡陽市は日本との友好都市関係もいくつか有る。滋賀県の栗東市と友好都市関係を持ち、交換留学生を毎年受け入れている。 静岡インターナショナルスクールとも友好関係がある。 埼玉県草加南高校との友好関係も手続き中。 このように日本との交流が盛んで、日本に行ったことのある人も多い。 隊員が入って、子供たちが日本語を学ぶ意欲が高まっている。 	

	<p>16. 地元の新聞や湖南省の新聞に隊員の記事が出て、学校の知名度も高まった。</p> <p>17. 2006年7月からは衡陽市のモデル校になった。</p> <p>18. 王芳先生は、まだ大学を出て間がないが、大学では英語専攻で日本語は第2外国語。第7中学に入った時は、ほとんど日本語を理解できなかった。今では通訳ができるくらい上手に話せる。隊員のおかげだ。</p> <p>19. 周先生は大学で歴史を学んだ。日本語は独学だった。隊員が入ってから自分の日本語も大変上達したと思っている。</p> <p>20. 王先生(年配)は隊員が入って、まじめな働き振りに感動した。周囲に良い影響を与えたと思っている。</p> <p><小牧隊員></p> <p>21. 派遣前研修の任国事情で角谷さんが講義を行ったので、その時に任地の事情など聞く機会があり、現地の様子がわかり準備もできた。</p> <p>22. 高校1年生の最初の会話の授業を行った。良く反応し、声も大きい。2、3年生にも教えたが、子供たちは積極的に授業に参加する。</p> <p><その他></p> <p>22. 今年の湖南省日本語コンテスト高校生作文部門で1位と2位、スピーチで1位と3位を取った。</p> <p>23. 優秀な協力隊員を派遣してもらい感謝。継続派遣を望んでいる。隊員の面倒はきちんと見る。</p> <p><宇田川所感></p> <p>日中戦争の激戦地であった衡陽で、日本語を学ぶ人が多いこと、日本との関係が密にあることに驚いた。戦争の傷をこうした形で癒されつつあることに希望が持てる。協力隊のことを知るのに時間がかかったようだが、こうしてコツコツと日本語を教えているところを発掘できれば、協力隊の派遣効果がさらに出ると思う。</p> <p>科技局の候さんは早稲田で心理学を学び日本語が達人。これまで様々な職を経験している。科技局では2年、その前は外交部、自分で事業をしたこともあるという。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>
--	---

面談録 四川省1

2006年11月25日
記録者： 宇田川和夫

日 時	11月23日(木) 午前9:00-午後3:00、午後6:00-8:00	
参 加 者	西昌市科技局 副局長 西昌市科技局課長 涼山州紅十字会 公衆衛生 協力隊シニア隊員 涼山民族中学 日本語 協力隊シニア隊員 JICA 涼山州造林プロジェクトリーダー アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 通訳	朱 美煙 胡 莉 増田 宮子 友貞 新 嶋崎 省 宇田川 和夫 程 芸
配 布 資 料		
場 所	涼山州昭覺県 大石頭村 及び西昌市内	
概 要	現地はイ族の正月の真っ只中にあたり、政府機関も休みのところ、西昌市科技局の2人と隊員が親切に対応してくれた。JICA 造林プロジェクトの島崎リーダーからも話が聞けた。	

＜増田シニア隊員＞

1. 増田シニア隊員は前に湖北省武漢で看護隊員だった。
2. 友貞シニア隊員は前に吉林省延辺自治州で日本語隊員だった。
3. JICA 造林プロジェクトの専門家と協力隊の有志で涼山会という NGO(未登録)を作り、涼山州の貧困地域にあるコウコウ小学校の支援を行っている。
4. この小学校支援活動に、現在西昌にいる増田シニア、友貞シニア、松浦隊員の 3 人が参加している。
5. 活動は木曜日の午後に行っている。当初、受け入れ先は自分たちの組織に関係のない活動を行うことに抵抗を持っていたが、現在は隊員の活動の一環として認めている。
6. 木曜日の午後にワゴン車に乗って大石頭村の小学校をそれぞれの隊員の CP と共に訪問し、3 人が交代で音楽、衛生、体育の 1.5 時間の授業を行う。中国語とイ語の通訳は CP が努める。
7. 隊員が通い始めてから 4 年経つが、親達の教育に対する理解が増し、就学率も増加している。
8. 子供達は少しくらい病気になっても、医者に行かずに直ってしまう。ただ不衛生のため目の病気があった。手を洗うことを奨励し、目の病気が少なくなった。風邪薬も限定的だが提供している。
9. 大石頭村のコウコウ小学校は 3 年生までで、その後は歩いて約 1 時間の中心小学校に行く(実際は通わないで寮生活になる)。
10. 昨年 3 年生を終え中心小学校に行っていた女の子が帰ってきて、又 3 年生を繰り返している。中心小学校には馴染めなかったが、学校が好きなのだという。
11. コウコウ小学校では算数と中国語が教えられているが、1 年から 3 年までの授業が政府派遣の 1 人の教師により纏めて行われていて、自分のレベルに合った授業が受けられなかった。
12. このため、涼山会では各学年に 1 人づつ教師が付けるように、2 人の教師を雇うことにした(月給は 1 人 700 元/月で、平日は学校の宿舎に泊まる)。
13. また、中国各地の隊員に呼びかけて、小学校での特別授業など年 1 回のイベントを行っている。
14. 大石頭村の課題は、リーダーとなる人材が出てきていないということ。

＜大石頭村 共産党書記＞

15. 隊員が来るようになって、子供達が学校を止めなくなった。
16. 子供がけんかして目を怪我したとき、協力隊が治療費を出してくれて、失明に至らなかった。
17. 電気は村の全 80 戸のうち、60 戸に引かれている。2001 年に JICA 林業プロジェクトの苗木圃場ができた時一緒に引かれた。ただ、電気代(月 7 元から 20 元程度)が払えないので、多くの家では使用していない。
18. 風邪や重い病気にかかっても治療代が払えず、自然治癒に任せるだけ。
19. 2007 年に協力隊が居なくなってしまうと聞いているが、ぜひ継続して欲しい。

＜友貞シニア隊員＞

20. 羽田調整員のと看、短期派遣で涼山州に入り、案件の下ごしらえを行った。
21. 民族中学では、都会から戻ったイ族の若者に対して 2 年間の職業訓練を開始し、コンピューターの使用や日本語の勉強を実施している。昨年第 1 期生が卒業し、JICA 北京事務所(ショウさん)や上海の日系企業への就職ができた(100%就業達成)。
22. 隊員の受け入れ機関は、事故が起る可能性もあるため、当初、昭覚県での活動をサポートしてくれなかった。
23. 自分の責任で行うという念書を書いて、なんとか許可してもらった。
24. その後、JICA や科技局のサポートもあり、受け入れ機関も昭覚県での活動を隊員の正式な活動と認めてくれるようになった。
25. 村での活動がうまくいったのは、隊員の資質と努力に加え、協力隊調整員の理解とサポート、技プロの存在が大きかった。
26. 今のモデルを基に、もう一つ四川省内で活動できる村を検討中。
27. 隊員要請は地方の科技局に任せていても出てこない。意識の高い隊員が現地で調整員を助けながら発掘していくのが理想。
28. 派遣前研修で、隊員同士がサポートし合い、自分の専門に囚われずに活動の幅を広げていく意義を強調するとよい。

	<p>29.技プロと隊員の関係は、下働きではなく、無理のない形での協働。あくまで隊員の自主的な活動と位置づけている。</p> <p><増田シニア隊員 前回の武漢での活動について></p> <p>30.派遣前の研修期間から現地 C/P と連絡を取り合い、先方が何を求めているのか、自分に何が提供できるのか、ある程度判っていた。</p> <p>31.それでも、受け入れ先とは考え方のギャップがあり、自分の後任は申請しなかった。これに比べ、西昌での活動は、やりがいがあり、自分は大変満足している。自分の直接の後任ではないが、現地の CDC (保健局) に隊員を入れるべく、準備している。</p> <p>32.先日、武漢に4年ぶりに帰り、以前の職場を訪ねた。当時、救急患者の担当をしていたが、病室のベッドを仕切るカーテンが無かった。患者のプライバシーを守る方法を考えていた時に、病院のゴミ捨て場で間仕切りカーテンが捨ててあるのを見つけた。車輪など壊れた部分を修理して自分が扱う患者の着替えや下の世話をを行う時に引っ張ってきて使用した。他の看護婦さんは見て笑っていたが、患者からは感謝の言葉を聞くことができた。自分の任期満了近くになって、婦長さんが、もう一つ間仕切りを買ってくれたので、少しは意味がわかってくれたと思って嬉しかった。4年後に訪れた病院では、その2つの間仕切りが現在も使われていた。嬉しくて看護婦に声をかけると、看護婦は「何を言っているの、間仕切りを使うのは当たり前のことでしょう」とこたえた。こうして自分が始めたことが常識として定着したのだと理解し、感動した。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>
--	--

面談録 四川省 2

2006年11月25日
記録者： 宇田川和夫

日 時	11月24日(金) 午前9:00ー午後3:00	
参 加 者	攀枝花市スポーツ中学校 校長 彭 格 攀枝花市スポーツ中学校 副校長 羅 興成 攀枝花市スポーツ中学校ソフトボールチーム監督 (富田隊員 CP) 楽 開顔 攀枝花市スポーツ中学校ソフトボールコーチ (煤孫隊員教え子 赤井隊員 CP) 楊 傑 攀枝花市スポーツ中学校野球チーム監督 (煤孫、赤井 CP) 劉 波 攀枝花市スポーツ中学校野球チームコーチ 李 寅 攀枝花市競技場コーチ (3人の隊員受け入れ担当) 趙 勇 攀枝花市科技局 担当 郭 忠明 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 宇田川 和夫 通訳 程 芸	
配 布 資 料	攀枝花市競技場コーチ 趙勇さんによる、隊員受け入れの総括 攀枝花市スポーツ中学校 概要	
場 所	Panzhifa スポーツ学校会議室、野球場、Panzhifa 市体育局など	
概 要	<趙 勇コーチ> 1.野球は攀枝花市の代表的なスポーツで、1975年にチームが作られ、四川省や中国の代表となったこともある。 2.日本人の協力があつて(多分、天津の大貫隊員)協力隊の存在を知り、要請した。 3.目的は市の野球のレベルを向上させること。 4.野球場が無かったので、競技場の中で練習を行った。 5.第2中学校で受け入れたが、当時、中学・高校レベルの選手が第2中学に4人しかおらず、隊員が選手を募集し、野球選手クラスを作った。半年で15人の選手を持つようになった。 6.2代目の煤孫隊員からアパートの1室があてがわれるようになった。また、中学も第2中学校からスポーツ中学校に受け入れ機関が変更となった。	

- 7.これまでに攀枝花市出身者の11人がプロとなっている。その中で協力隊員の指導を直接受けた選手は3人。
- 8.隊員は選手に厳しいが、親しく交流し、選手の親からも感謝された。
- 9.四川省には高校野球チームが7チーム有るが、攀枝花は2004年には優勝、その他の年も成都チームの次の2位。
- 10.隊員はトレーニング方法、野球の精神と技術を教えてくれた。つまり、頑張る精神、勤勉さ、1人だけでも良いと思ったことは行い、損得勘定しないということ。
- 11.赴任当初は言葉ができなかったが、帰る時には地方の言葉も話せるようになり、例えば煤孫隊員が隊員総会で中国語を話すと、他の隊員が理解できなかったという逸話もある。
- 12.中学生は午前中に勉強、午後3時から4時半までトレーニング、夜も勉強。週末は1日中練習で、休みは月に1回しかない。隊員も夜中国語の勉強をした。
- 13.スポーツ学校では午後3時から練習が始まるが、隊員は、朝は自分の身体を鍛え、午後2時からグラウンドに出て整地や練習のための道具の準備を黙々と行った。
- 14.隊員は土日は学校での練習の他、少年野球の指導も行い、北京の大会に出たこともある。
- 15.当時独身だったので隊員とは公私共に生活を共にした。自分の自宅でカレーライスを着くって一緒に食べたり、隊員の友達が訪ねてくれば、自分の家に泊めたりした。赤井隊員が病気になって中心病院で点滴を受けることになったが、その時に看護師隊員もおり、彼女と一緒に赤井隊員の面倒を見た。
- 16.2004年に広島に招かれていった時には、帰国した2人の隊員が日本で、赤井隊員が中国で遠征のための寄付金集めを行った。
- 17.広島市とのアレンジのため、赤井隊員の電話代が1万7000元もかかった。
- 18.煤孫さんは北海道から、富田さんも遠くから(お金がかかるので鈍行で)2日間かけて広島に駆けつけてくれた。
- 19.隊員は今でも時折資材を送ってくれる。
- 20.趙さんの自宅や事務所には、隊員との思い出の写真や品物が一杯おいてある。隊員の写真もCDでいただいた。

<劉 監督>

- 21.2代目、3代目の隊員と共に働いた。
- 22.トレーニングの方法に特徴があり、勉強になった。
- 23.煤孫隊員は学校の先生で、子供に対する教育と野球に対する態度をしつけるのに厳しかった。
- 24.内野の専門だったし、細かな技術を教えてくれた。
- 25.赤井隊員は外野、ピッチャー、バッターの指導が得意だった。日本でも現役の選手だった。
- 26.野球のボールは10日間でボロボロになる。ボロボロのボールも糸で縫いつけて修理して使う。隊員は修理も上手だった。それでも年間300個くらいのボールが必要だ。
- 27.オリンピックの種目から外れるのは残念だが、野球に対する情熱は変わらない。
- 28.3代の隊員で学ぶべきことは学んだ。

<楽 ソフト監督>

- 29.個人の考えだが、富田隊員は人間的にも技術的にも最も優れていた。環境が厳しい中、チーム作りから始めた。富田さんが来たことは新聞にも報道され、日本からも朝日新聞やNHKの取材が来た。厳しく選手を指導した。
- 30.煤孫隊員も厳しい先生だったが、試合に行くときに子供達を元気付け、生活面での面倒も見るような人だった。
- 31.大貫隊員は自分の先生だが、キャンプで攀枝花市に3ヶ月滞在した事がある。

<四川省科技庁梁所長 後日談>

市の体育局が1998年に直接協力隊に要請した模様で、1999年に初代の富田隊員が派遣されたときは科技庁の梁さん(現四川省国際合作処処長)は知らされていなかったため、住環境が配慮されなかった。このため富田隊員は劇場の招待所の狭い部屋で2年間過ごすことになった。

以上

面談録 四川省3

2006年11月26日
記録者： 宇田川和夫

日 時	11月25日(土) 午前10:00—午後3:00	
参 加 者	四川省科技厅国際合作處處長 徳陽市科技局 副局長 徳陽市科技局 国際合作科 科長 徳陽市野菜弁公室 主任 釣隊員 CP 徳陽市旌陽区農業局 局長 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 通訳	梁 晋 趙 緒全 李 増強 鄭 康 吳 志强 宇田川 和夫 程 芸
配 布 資 料		
場 所	車中、レストラン、農村	
概 要	<p><梁処長></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 富田隊員は科技厅を通さずに入り、自分が気がついたのは1年後。市の体育局が独自のルートで隊員を申請してしまったので、隊員宿舍の条件が不備だった。攀枝花市の周監督と天津のチームの監督が友人だったことから実現した模様。 2. 富田隊員の地方遠征に、科技厅として3万元寄付を取り付けた。 3. 赤井隊員の日本遠征時にも共産党書記に頼み、市政府からの支援を取り付けた。 4. 赤井隊員は広島への日本遠征時にスポーツ学校の野球部監督を連れて行くことができず(市の体育局が人選したのに)、彼から恨みを買ひ、その後の半年は辛い思いをした。 5. 成都のチームに配置換えできるように手を打ったが、宿泊費などで JICA との考えに相違があり、実現しなかった。 6. 釣隊員はブロッコリなど新しい野菜の導入、浦井隊員はタバコやお茶の葉の生育に良い肥料(葉面肥)の開発を行い、良く働いてくれた。 7. 2人とも中国人の嫁をもらい、子供も2人ずつ授かっている。日本に出張した時などに会っている。 <p><鄭 主任></p> <ol style="list-style-type: none"> 8. 徳陽市科技局の農民向け養成センターに1992年に入った釣隊員は、当時の中国農家では知られていなかったセロリ、ブロッコリ、レタスなどの野菜の紹介と栽培技術を指導した。 9. これは中国政府の「星火プロジェクト」という農民を豊かにするプロジェクトの一環。 10. 作った野菜は包装して香港に輸出し、農家の収入向上に貢献した。 11. 野菜を作り出した農家は、当時8000元だった年収を3万元まで稼ぐようになった。 12. 野菜作付け面積も1993年の7万畝(ムー)から2006年の110万畝まで拡大した。(15畝が1ha) 13. 徳陽の農民の収入の51%が野菜栽培からのもの。 14. 現在、日本との合弁会社からの委託栽培できのこ、わらび、ぜんまい、なす、きゅうりなどをつくらせており、塩漬けなどの加工も行っている。 <p><当時の釣隊員を覚えているという徳陽の農家訪問></p> <ol style="list-style-type: none"> 15. 主に大根を作っている。自分の農地だけでなく、米作りを止めた農家から土地を借りたり、米の収穫の後の農地を借りて温室栽培して大規模に農業を行い成功している。 16. 釣隊員の思いでは、畑で小さな土の山を作り、そこに種を一つ一つ丁寧に植えていたこと。 17. 自分も丁寧に植えることにより、良い大根をつくることのできるようになった。 <p><釣隊員のエピソード></p> <ol style="list-style-type: none"> 18. 釣隊員は勤勉、無口で仕事好きな人だったが、赴任当初、農家に野菜を紹介しようとしても農民から拒否され、昼時を過ぎても昼ごはんも出してもらえない(受け入れてもらえない)状況だった。 	

	<p>た。</p> <p>19.何とか5軒の農家で6平米程度の小さな土地を利用して日本からの種を植えることができた。種は高いので、一つ一つ丁寧に植え、自転車に乗って農家を廻って野菜の生育を見守った。</p> <p>20.作った野菜は広東経由で香港に市場があったので、出荷し高く売れた。</p> <p>21.売れてみると、農家の方から釣隊員に来てほしいという依頼が来るようになった。</p> <p>22.釣隊員は日本の農協の話も紹介したが、当時の農民に受け入れる素地はなかった。しかし、その考え方は忘れられておらず、4-5年後に農協的な活動が始まった。現在ブロッコリの共同出荷が行われている。</p> <p>23.当初、ブロッコリの品質にバラつきがあり、香港の業者から農民に支払われる対価に差があり、農民が相互に不信感を持った。しかし、農協で農民自らがブロッコリの品質で等級わけするようになり、うまくいっている。</p> <p>24.科技局では、言葉の不自由な隊員のために、日中の通訳を雇用した。釣隊員は、CPの鄭さんや通訳の人と農家を廻り、雨の日も風の日も指導を続けた。</p> <p>25.科技局に陳さんという女性がおり、釣隊員を息子のように世話し、時にははしかった。ある日、餃子の皮の中にコインを入れて運を試すという風習で、釣隊員の餃子にコインが入っていた。桃花縁といって美人に恵まれるという運。</p> <p>26.釣隊員は通訳の女性と結婚し、現在日本に住んでいる。時々里帰りしてくる。</p> <p><宇田川所感></p> <ul style="list-style-type: none"> ・梁処長は、多忙にもかかわらず、22日(水)の最初の成都通過の時と、24日(土)の2回目の成都入りの時に本当に良く対応してくれた。 ・梁処長は各省の科技厅の中で、湖北省の国際合作処長の?さんについて古い。隊員の導入時期からずっと協力隊員受け入れの面倒を見ている。3番目が湖南省の魯処長。3人とも日本語が達者。 ・梁処長は宇田川との会話を常に日本語で行っただけでなく、四川省方言の強い現地の人との通訳を買って出た。徳陽市の科技局の人たちからの信頼も厚いようだ。隊員のことも親身になって面倒見てくれた様子も聞くことができた。このような人材を大切にすることが、これからも重要だと思う。ある意味、科技厅や科技局が調整員事務所的な役割を果たしており、広い中国での協力隊活動を支えている。 ・梁処長は1978年から82年まで重慶の四川外国語学院で日本語を専攻したとのこと。25人の同級生がいて、半数が日本人と結婚するなどして日本にしているという。 <p style="text-align: right;">以上</p>
--	---

面談録 広西壮族自治区1

2006年11月28日
記録者： 宇田川和夫

日 時	11月26日(日) 午後6:00-午後7:30		
参 加 者	広西壮族自治区 科技厅国際合作処処長	Peng Zhi	(彰 枝)
	広西壮族自治区 科技厅国際合作処	Jane Jian	(簡 慧芳)
	アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 通 訳	宇田川 和夫 程 芸	
配 布 資 料			
場 所	南寧市内		
概 要	<p>1. 処長は昨年転勤してきた。簡さんは若い人で、両者とも協力隊事業に関係した日は浅い。しかし、今回、小平陽に同行する科技厅の運転手は、協力隊員の出迎えを通して、配属先や宿舎を知っている。</p> <p>2. 来賓県は現在来賓市になった。</p>		

	<p>3. 来賓県の現場は岩が多く、雨まかせの農業で、水が不足し、安定していなかった。協力隊のグループ派遣で、地下水の井戸を掘り、灌漑施設を作ることで水不足が解決し、農業生産が増大した。</p> <p>4. 看護師などの派遣が2代、3代と継続するのは、日本人が勤勉であることと、現地で日中の看護師に友情が芽生えるため。気候が穏やかなことも影響しているかもしれない。</p> <p>5. シニア海外ボランティアは他省に先駆けて要請した。現在も3人が活動中。</p> <p>6. 最初に入ったシニアの小林さんは、南寧に配属されたが、広西省から産業の発展に貢献したことに対する賞をもらっている。北京の科技部でも成果を発表する機会があった。現在、後任の須磨さん(企業診断)が活動している。</p> <p>7. 協力隊員の要請書は、昨年18件提出した。通常の年は3-4件。</p> <p>8. 派遣まで2-3年と時間がかかるのが問題。</p> <p><科技庁からの提案></p> <p>9. JICAが要請を受けたあとの進捗状況を知らせてほしい。受け入れ機関は宿舍や通訳を準備して待っているの、彼らからの問い合わせに科技庁として応える必要がある。</p> <p>10. 一部の隊員は機材を持ってくるが、持ってこない隊員もいる。受け入れ機関も隊員受け入れで負担が大きいので、機材が有ると良い。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>
--	---

面談録 広西壮族自治区 2

2006年11月28日
記録者： 宇田川和夫

日	時	11月27日(月) 午前10:00-午後3:00	
参加者		来賓市興貴賓区科技局 局長 来賓市興貴賓区科技局 副局長 来賓市興貴賓区科技局 担当 小平陽鎮 紀律検査委員 牛遼村 元村長 牛遼村 現村長 謝村 主任 松柏村(竜眼果樹園) 書記 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 通訳	韋 壯(女性) 蒙 貴芳 華 丹 彭 臣孔 藩 濟清 藩 濟庁 回 漢香 毛 祖喜 宇田川 和夫 程 芸
配布資料			
場所		来賓市 小平陽区の牛遼村、謝村、松柏村	
概要		<p><牛遼村農民> 130戸 人口700人</p> <p>1. 水資源開発(地下水)による灌漑と水道施設建設、水稻の新種導入、水稻投げ苗栽培導入、サトウキビ新種導入が行われた。完成まで3年かかった。</p> <p>2. 村人は隊員のことを良く覚えており、変色しかかった写真をラミネート加工して、大事に保管している。</p> <p>3. 水は枯れたことがなく、年に2回の稲作が確実に行えるようになった。これまでは雨に頼り、年1回できるかできないかだった。</p> <p>4. 稲は隊員が紹介した秋優1025という品種で地元の業者から継続して購入している。1畝当りの収穫量も1収穫期に350kgから450kgに増え、年に900kgの収穫が見込める。美味しく、収量も多い。</p>	

5. 隊員が紹介した投げ苗栽培方式も根付いている。サトウキビの新品種も使っている。
6. 村人の収入は確実に上がり、中には車を買った者もいる。
7. 元村長は、竹内隊員と日本の酒を飲んだり、水路工事の仕事を一緒にしたりした時のことを良く覚えている。その他の隊員ともゲーム(数字の足し算のような遊びで、方言でやる)をしながら酒を飲んだ。飲みすぎて農民の家に泊まる隊員もこともあった。
8. 隊員たちは毎日のように自転車で村に通い(宿舎から約 4 km)、村の農民の家で昼を食べることもあった。
9. 村の祝いの時には必ず招待した。
10. 隊員の良さは、現地の習慣を学び、現地に溶け込もうとする努力と勤勉さ。必要な技術も十分に持っていた。
11. 調査団は、何回も何回もお礼の言葉をかけられ、彼ら農民が心から感謝している気持ちが伝わってきた。

<長唐村> 165 戸 1300 人

12. 灌漑事業を行った。雨任せの農業から地下水を用いた安定した農業に変わった。
13. 農地は 400 畝くらいある。

<謝村農民> 130 戸

14. 飲料水の施設。2km離れた地下水源からポンプで村の岡の上の貯水タンクに水を送り、水道の配管を行った。以前は 9 月以降の渇水期には遠くの水源まで村人総出で水を汲みに行っていた。竹内、秋田、吉成隊員の名前が挙がった。

<松柏村果樹園管理者>人口 1300 人

15. 灌漑用のパイプを敷き、龍眼の苗木を導入したモデル果樹園(村の所有)
16. 隊員の宿舎から約 7kmあり、みな自転車で通ってきた。
17. 村の人たちが昼食を持ってきて、ここで食べたことも多い。
18. 安東、速水、秋田隊員の名前が出てきた。速水隊員は隊員宿舎で料理を作っていた村の人と結婚して、日本で暮らしている。速水さんの家族は一昨年村を訪れた。子供が 4 歳くらいになっている。

<科技局 華 CP>

19. 長谷川隊員は任期終了後、昆明にある日本の肥料会社に就職した。最近まで働いていたが、帰国することになり今年 9 月の末に広西省防城港に科技局の 4 人で送別会に行った。長谷川隊員は華さんに顔が似ており、華さんのことを兄さんと呼んでいた。
20. 隊員は小平陽の 3 階建てのアパートの 3 階に 2 部屋借りて合宿のような生活をしていた。
21. 各部落には月 1 回ちまきなどのご馳走を作る習慣があり、隊員にも振舞っていた。その時に隊員が村に訪ねて来ないときは、隊員の宿舎まで持ってきた。
22. 隊員が引き上げる時、村の人たちは自主的に(科技局に言われたわけではなく)錦旗をいくつも作って送った。錦旗には命の水とか中日友好いつまでもとか書かれていた。

<科技局のリクエスト>

23. 教育や医療関係の協力隊員を派遣してほしい。
24. 農産物加工と日本への輸出を指導できる隊員もほしい。

<宇田川所感>

25. 灌漑や飲料水など、大きな施設建設を伴う活動で、隊員の報告書には隊員派遣の意義に疑問を持つような記述があった。しかしプロジェクト終了後 8 年経っても農民や科技局の人たちは隊員のことを忘れず、感謝している。隊員が村の人たちに溶け込もうとした努力は、村人にしっかりと受け止められ、今も心の中に残っている。農民の生計は、はっきりと向上しており、隊員の残した技術も使われている。農村開発プロジェクトとして、インパクトの大きいものだった。

以上

面談録 広西壮族自治区3

2006年11月29日
記録者：宇田川和夫

日 時	11月28日(火) 午前9:00-10:00	
参 加 者	柳州市人民病院書記 業務副院長 柳州市人民病院神経内科 主任 柳州市人民病院神経二科 科長 柳州市人民病院科教科 科長 柳州市人民病院 神経内科 リハビリ師 柳州市人民病院 協力隊員 柳州市科技局成果 副科長 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 通 訳	胡 世紅 郊 小鷹 杜 娟 Jd-l@sohu.com 欧陽 小琳 韋 金沢 郁恵 蔣 氷 宇田川 和夫 程 芸
場 所	病院会議室	
概 要	<ol style="list-style-type: none"> 協力隊員のことを科技局から説明を受けて知り、1996年から要請書を出している。職種はリハビリ、看護師、放射線技師。 目的は、日本の進んだ技術を導入したかったから。 1999年に理学療法士の派遣が決まり、2000年7月14日に初代の小川隊員が到着した。 一方で、人民病院は1997年に、江西省で始めてリハビリ科を設立した。 2004年10月にリハビリ科は神経内科リハビリ部に改組して、対象患者を拡大した。 中国と日本の違いのひとつは、患者の評価の仕方とデータの記入方法だった。隊員による改善案が取り入れられた。 隊員が日本から持ってきた古い装具を手本に、中国で模倣して作成した。 隊員は日本のリハビリや医学についての講義を行った。 日本語の勉強時間を持った。 小川隊員は広西自治区から医療貢献者として表彰された。 小川隊員は料理が好きで、CPにご馳走したり、病院内の年1回の懇親会で、四季の歌を日本語と中国語で歌ったりするなど積極的に病院の中に溶け込もうとしていた。 小川隊員は帰国してすぐ結婚。新婚旅行で病院を訪問した。その時に中国式に、結婚写真のセットも作っていった。小川隊員は今でも日本で理学療法士を続けており、CPとメールの交換も続けている。 小川隊員の継続派遣を要請していたが、候補者がケガでキャンセルになるなどして、結局3年待って2代目の金澤隊員が赴任した。 この間、病院のリハビリ患者の受け入れが、回復期にある患者から、その前の病気の重い時期の患者に変化して来た。つまり早期リハビリで早期回復を目指す医療に変化した。 昨年、中国リハビリ医療の先端を行く中日友好リハビリセンターの秋山専門家ら4人が人民病院を訪問し、2日間の勉強会が行われた。 金澤隊員は今年5月には北京で開かれた国際学会にも参加した。 金澤隊員は仕事振りが勤勉、努力家で困難を克服し、環境に慣れるのも早い。患者からも信頼されている。 金澤隊員の活動は、神経内科に留まらず、整形外科の患者も見えるようになった。Manpowerから病院スタッフのOJTにシフトしてきている。神経内科のリハビリ専門家は現在3人いる。 2代の隊員により病院のリハビリ医療の発展を促進した。初代で種が撒かれ、2代目で花が開いたという状況。次期隊員も要請済み。 課題として、隊員の派遣時期に大きな間隔が空くと、宿舎や備品の確保が困難になるので、次の隊員は金澤隊員の離任時期を考慮して派遣してほしい。 2008年には3km離れたところに建設中の新病院に移る予定で、広西自治区で一番の病院になる。理学療法、作業療法のスタッフを充実させる予定。 初代から続くCPの日本での研修を計画している。 	
		以上

面談録 広西壮族自治区4

2006年11月29日
記録者：宇田川和夫

日 時	11月28日(火) 午前9:00-10:00	
参 加 者	柳州市直属機関幼稚園 園長 柳州市直属機関幼稚園 書記 柳州市科技局 成果科 副科長 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 通 訳	栗 玉 Jysuyu@126.com 陳 霞 蔣 氷 宇田川 和夫 程 芸
配 布 資 料		
場 所	園長 来客室	
概 要	<p>当日になってから急遽科技局を通して面会を依頼したのだが、快く受け入れてくれた。園長先生は少なくとも日本語を聞いて理解することができるようだ。</p> <ol style="list-style-type: none"> この幼稚園には1992年から2002年までのあいだに4人の協力隊幼稚園教諭が派遣された。 園長の栗さんは、初代隊員のときからずっと見てきた。 始まりは、科技局からの情報があり、開放政策が開始され、日本の進んだ幼児教育を導入することが子供の教育に良いということで要請した。 幼稚園の傍にアパートを借り、電気製品など生活に必要なものも揃えて隊員の受け入れ準備を行った。 初代の小林隊員は美術が得意だった。担当クラスを持たず、全てのクラスで、担任の先生と共に子供達に美術を教えた。教え方を広く紹介することができ、他の先生と親近感も生まれ、またすべての園児と接するように配慮した。 最初は言葉が通じないので子供達も戸惑いがあったため、CPの先生が通訳した。しかし徐々に中国語も達者になり、通訳の必要もなくなった。 中国と日本の園児の指導の仕方が異なっていたが、相互に検討し、学びあった。 色々なものを作るアイデア、作り方については今も役立っている。 2代目の市橋隊員は歌と踊りが上手だった。日本の伝統的な踊りや歌も紹介してくれた。 明るい先生という印象で、幼稚園にもすぐに馴染んだ。 この時期に、柳州市の市長が「先生の日」の演説で、海外から来て働く先生を大切に、部屋にエアコンを取り付けるよう指示をだした。市橋隊員の部屋にもエアコンを取り付けることとなった。 市橋さんのお母さんが手作りの日本人形などを贈ってくれた。いまでも幼稚園の会議室に飾られている。 3代目の川合隊員は体育が得意だった。中国では全ての科目を教えるので、体育が専門の先生というのは居なかった。年齢の高い子供達に様々な運動を教え、子供達の反応を大切にしていた。 4代目の窪田隊員はイタリアで開発されたモンテソリーの教育手法を紹介してくれた。 CPの先生と一緒に3つのクラスで実験的に教育を開始した。1クラス2-3ヶ月でクラスを換えていった。現在では、全20クラスのうち、10クラスでモンテソリー方式の教育を行っている。 これまで、要請に当っては、完全に言葉だけに頼った授業は難しいと判断し、体育とか音楽とかの職種を選んでいった。 可能なら、栄養の専門の人や、美術の先生に来てもらいたいと思っている。 協力隊の幼稚園での教育は、長く子供達の心に残り、日中友好に大変役立って居ると思う。 今でも隊員と連絡を取り合っており、市橋隊員(現 管未帆)は「中国児童教育援助協会」の代表となっている。Http://homepage2.nifty.com/oceas 川合隊員は帰国後、パンダ保護にかかわる活動をしている。 <p>以上</p>	

面談録 広西壮族自治区5

2006年11月29日
記録者： 宇田川和夫

日 時	11月28日(火) 午前9:00-10:00	
参 加 者	桂林市芦笛小学校 校長 桂林市芦笛小学校 副校長 桂林市芦笛小学校 副校長 桂林市芦笛小学校 美術教師 桂林市芦笛小学校 協力隊員 美術教師 桂林市科技局 国際合作科 科長 桂林市科技局 国際合作科 科長 桂林市科技局 副局長 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 通訳	陳 海栄 林 娜 斎 偉麗 李 芳 千田 恭子 李 旭 吳 林佳 戸 向堅 宇田川 和夫 程 芸
配 布 資 料		
場 所	芦笛小学校美術室(隊員が任された教室)	
概 要	<p><陳 校長、林 副校長、李 副校長></p> <ol style="list-style-type: none"> 1.芦笛小学校は生徒数1200人、先生の数60人。 2.科技局から頻繁に連絡があり、要請を出すことにした。 3.校長は隊員受け入れ前に、科技局の吳さんと一緒に柳州市の美術隊員の現場を訪問し、芦笛小学校でも美術室を作ることにした。 4.今年7月23日に赴任したが、丁度夏休みだったので、少し日本語のできる先生により中国語のレッスンを行った。言葉で不足するところは筆談と身振り手振りでコミュニケーションを取っている。 5.美術の授業を任せしたが、子供達に美術だけでなく日本の文化を紹介してもらっている。 6.教育の研究活動に参加し、先生に日本の美術教育を紹介してもらっている。 7.美術は千田隊員の他に3人の中国側の先生がおり、そのうち1人の李さんがCP。 8.千田隊員は2年生の担当。3クラス2時間ずつ受け持っている。 9.火曜日の午後の3時限目に美術クラブを主宰するようになった。参加者は1年、4年、5年生の26人。クラブを通して日本との交流も行う。 10.隊員を受け入れて、子供達の勉強する意欲が高まったこと、日本の文化を知ることができ良かった。 <p><千田 隊員></p> <ol style="list-style-type: none"> 11.日本では全教科教えていた(15年のベテラン先生)ので、当地でもクラスを持って教えたいという希望があるが、今は中国語が不自由なので美術に専念している。 12.言葉ができないので、子供達を十分に教えてあげられないのがつらいと感じている。 13.CPからは専門用語などを教えてもらっており、感謝している。 14.日本の学校を休職してきているので、その学校の子供たちと芦笛小学校の子供達がクリスマスカードの交換を行った。 <p><エピソード></p> <ol style="list-style-type: none"> 15.ある日、千田隊員の宿舎のドアの前に、数本の花が置かれていた。生徒からのプレゼントと察した千田さんは、しおれていたその花を水差しに入れた。千田さんは、「花が元気に生き返ったよ、ありがとう」というお礼のノートをドアの前においておいた。すると翌日、今度は違う花(金木犀)がドアの前に置かれていた。誰が花を送ったのか千田さんはまだ知らない。 	
	以上	

面談録 広西壮族自治区 6

2006年11月29日
 記録者： 宇田川和夫

日 時	11月29日(火) 午前10:10-11:10	
参 加 者	桂林師範高等専門学校 物理と情報技術学科主任(副教授) 桂林市科技局 国際合作科 科長 桂林市科技局 国際合作科 科長 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 通訳	莫建平 李 旭 吳 林佳 宇田川 和夫 程 芸
配 布 資 料		
場 所	桂林師範高等専門学校会議室	
概 要	<p>1.1990年頃、視聴覚教育の学科を作ろうと計画していたが、新しい分野で先生が不足していた。</p> <p>2.日本の大臣が桂林を訪問し、教育局の人と会って協力隊のことを知り、隊員を要請して学科を一緒に作ろうと考えたのがきっかけだった。</p> <p>3.隊員要請の目的は教員養成と大学生(3年生の短大)に対する授業だった。</p> <p>4.1992年に初代隊員が来たとき、学科のCPとなる先生は3人。</p> <p>5.学科は発展して学生数500人になったが、CPで残っているのは莫教授だけで、他の2人は海外に出ている。</p> <p>6.隊員の活動は授業をすることと、学生と一緒にテキストや教材を準備すること。</p> <p>7.ビデオカメラや編集機器の使い方を学んだ。当時はビデオが映像の主体だった。</p> <p>8.黄崗の病院の看護師研修用のビデを教材を作ったこともある。</p> <p>9.昨年も桂林の看護学校の協力隊員と一緒にビデオ教材を作成した。</p> <p>10.編集機材は日本から援助してもらったものが多かった。今でもその機材を使って学生の卒業ビデオ作成に活用している。</p> <p>11.初代の外山隊員は責任感が大変強いという印象。例えば、市中で買い物をしていて雨になった時、その夜に講義があったので雨に打たれながら学校に戻り、教室ではびしょぬれの状態で授業を行った。</p> <p>12.赴任中に父親が亡くなったが、自分の任務に差し支えると考え帰国しなかった。</p> <p>13.外山さんは学校をとっても大切に思い、桂林を自分の第2の故郷と考えている。日本の高校の先生をしながら、毎年1月と7月に必ずここを訪ねてくる。その時に日本の新しい技術を学生に教えている。</p> <p>14.2代目の池末隊員も外山隊員の後を継いで活躍した。</p> <p>15.次の隊員も要請したが、学校が発展し、要求した技術レベルが高くなったことから適任者が見つからなかった。</p>	
	以上	

面談録 広西壮族自治区 7

2006年12月2日
記録者： 宇田川和夫

日 時	11月29日(火) 午後3:00-4:00	
参 加 者	桂林市七星幼稚園 副園長 桂林市七星幼稚園 書記 桂林市科技局 国際合作科 科長 桂林市科技局 国際合作科 科長 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 通 訳	秦 艶鈴 馬 蓉暉 李 旭 吳 林佳 宇田川 和夫 程 芸
配 布 資 料		
場 所	七星幼稚園会議室	
概 要	<p>1.1999年から2人の林先生が来てくれた。</p> <p>2.初代の林隊員はモンテソリーの教育方法を紹介してくれた。</p> <p>3.JICAからモンテソリーの道具や機材の支援してもらった。</p> <p>4.初代の林隊員はモンテソリーの教育方法を学んでいたが、実際の幼稚園で使っていたわけではなかった。2代目の奈々子隊員は日本でもモンテソリーを使っているベテランだった。</p> <p>5.初代の時、全部で8クラスあったなかの1クラスについて、午前中だけモンテソリーの教育法を用いて試した。</p> <p>6.良いと判断されたため、2代目の時はモンテソリー教育を4クラスに増やし、1日中行うようになった。</p> <p>7.日本人の先生は仕事熱心で、知っていることは全て教えてくれた。</p> <p>8.食事の時にコップを両手で支えて持つようにするとか、音を立てて食べないようにしようとか、食事の後にイスやテーブルを片付けるなどのしつけにも心がけていた。</p> <p>9.初代は、6月1日の子供の日に子供と一緒にウルトラマンの音楽をかけて踊りを楽しく踊った(今では誰でも知っているウルトラマンだが、当時ウルトラマンを知っている子供は少なかった)。</p> <p>10.当初、中国側は日本の教育方法を理解せず、隊員も中国式を理解していなかった。</p> <p>11.中国側は計画通りに授業を進めたいが、林さんは授業時間が短いので1時間に伸ばして欲しいと要求し、時に口論にもなった。</p> <p>12.ただ、1-2ヶ月でお互いに理解できるようになった。</p> <p>13.初代は最初から中国語が良くできたが、判らないところは辞書を開きながらコミュニケーションを取った。初代は性格が明るく、間違っても良いから発言し、行動するタイプ。</p> <p>14.2代目はおとなしい人だったが、実力が有った。</p> <p>15.2代目の奈々子先生のおかげで小町先生が来てくれた。大きな会場を借りて土日を使ってワークショップを行った。</p> <p>16.音楽を使うこと、小町先生の使った道具を、模倣して作り、活用している。</p> <p>17.3代目を要請したが実現していない。美術や音楽、体育の隊員が欲しいと思っている。</p> <p>18.七星幼稚園は広西自治区のモデル幼稚園で海外からの先進的な育児方を取り入れている。</p> <p>19.2人の隊員との連絡は途絶えている。</p>	
	以上	

面談録 広西壮族自治区 8

2006年12月2日
記録者：宇田川和夫

日 時	11月29日(火) 午後4:00-5:30	
参 加 者	桂林市旅遊職業中等専門学校 副校長 桂林市旅遊職業中等専門学校桂林市奇星芸術教育センター長 桂林市科技局 国際合作科 科長 桂林市科技局 国際合作科 科長 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 通 訳	李 依奇 馬守正 李 旭 吳 林佳 宇田川 和夫 程 芸
配 布 資 料	桂林市旅遊職業中等専門学校隊員受け入れ資料	
場 所	桂林市旅遊職業中等専門学校 会議室	
概 要	<p><李副校長、馬センター長></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 桂林市旅遊職業中等専門学校は幾つかの中学校が合併してできたもの。 2. 桂林市第一職業中学(1991年派遣の日本語教師の橋本佐知子隊員)と桂林市第15中学校(2000年派遣の幼稚園教諭兼日本語教師の吉本美紀隊員)も現在の専門学校の前身である。 3. 現在の幹部で1991年当時に在籍していた人がいないため、学校では北本隊員を吉本隊員の後任の2代目の日本語教師と考えている。 4. 協力隊員は勤勉で、授業の準備に時間をかけ面白い授業を行っている。他の教員に良い影響を与えていると評価されている。 5. 学生達と共に食事をしたりして仲良く過ごしている。 6. 副校長が音頭を取って、桂林に派遣されている協力隊員を招待して滝を見に行くなど交流をしている。 7. 12月の行事にも隊員たちを集めて、日本紹介のイベントを計画している。 8. 熊本の開新学園と姉妹校関係があり、今年は17人の高校生が来る。 9. 日本語の先生は2人いるが、1人は非常勤。 10. 北本隊員の前任は日本語が専門ではなかった(幼稚園教諭)、特に引継ぎはなかった。 11. 学生の学生意欲は決して高くなく、学校も厳しく指導するという方針ではない。 12. 学校には観光サービスだけでなく、料理や美容部門、幼稚園もあり、様々な分野で日本と交流し、世界の平和を目指している。 <p><北本隊員></p> <ol style="list-style-type: none"> 13. 隊員を派遣するとき、職場の上層部だけでなく、現場の責任者やCPが隊員派遣の意義や目的を理解していることが大切。 <p style="text-align: right;">以上</p>	

面談録 広西壮族自治区9

2006年12月2日
記録者： 宇田川和夫

日 時	11月30日(火) 午前9:30-11:00	
参 加 者	桂林旅遊高等専科学校 校長 桂林旅遊高等専門学校 国際交流処 処長 桂林旅遊高等専門学校 外語系主任 桂林旅遊高等専門学校 旅遊系主任 桂林旅遊高等専門学校 国際交流処 桂林旅遊高等専門学校(元隊員、元SV) 視覚芸術学科 桂林旅遊高等専門学校視覚芸術学科(CP) 桂林科技局 国際合作科 科長 桂林市科技局 国際合作科 科長 アイ・シー・ネット(株)シニアコンサルタント 通 訳	李 羊生 姜 ビン 饒 莉拉 戸 例玲 李 云 小川 景一 許孝偉 李 旭 吳 林佳 宇田川 和夫 程 芸
配 布 資 料	派遣協力隊員名簿、受賞記録	
場 所	桂林旅遊高等専門学校	
概 要	<p>大学は昨年創立20周年を迎えた。桂林市内のキャンパスから、今日訪れた郊外の新キャンパスに移転中。キャンパスには大学の歴史を見せる資料室、大学の先生や学生が作成した美術品の展示室もある。</p> <p><デザイン></p> <ol style="list-style-type: none"> 1.観光関係の学校なので、土産ものの開発のために美術科ができたが、様々なデザインができる人材が必要とされた。特に Visual Identity (VI) の指導を期待した。1994年以來4人のデザイン隊員が派遣された(最後はシニア海外ボランティア)。 2.1996年当時、美術科は8人の教師と200人の学生だったが(全学では2000人)、現在は先生40人、学生数800人(全学で8000人)と発展した。 3.96年に鈴木隊員が広西自治区金秀球賞(友誼獎)、1998年には小川隊員が同じ獎を、1999年には小川隊員が国家友誼獎を受けている。 4.大滝隊員は幼稚園教諭隊員と共同で絵本を作ったこともある。 <p><小川元隊員></p> <ol style="list-style-type: none"> 5.99年に協力隊の活動が終わっても、桂林を訪れ、水墨画を描いたり、授業を行ったりしていた。 6.2003年にシニア海外ボランティアの募集があり、運良く来ることができた。任期を1年延長し、昨年10月まで活動した。 7.その後大学に乞われ、あと1年間教えることになった。 <p><許孝偉 CP></p> <ol style="list-style-type: none"> 8.小川隊員は学生に教えるために準備をきちんとすることに感銘した。 9.大きい鞆を持って歩く姿が印象的で、クラスには授業開始10分以上前に入っていた。 10.文献だけでなく、スライドや道具を多く使い、学科の先生はもとより、他の学科の先生にも良い影響を与えた。 11.郷に入れば郷に従うという態度が良かった。兄のように感じている。 <p><日本語></p> <ol style="list-style-type: none"> 12.当時の日本語のCPは日本で1年間研修を受けた経験を持つ。半年間は民間の旅行代理店で働き、裏紙の利用や、私用電話の禁止など、日本の企業の厳しさを学んだ。 13.杉原隊員(1997から1999年)の時、日本語の観光ガイド教本を作った。国際交流基金、JICAが 	

支援した。最後の 2-3 ヶ月は休みなしで、頑張って作り上げた。小川隊員も装丁などを手伝った。

14.教科書は、画期的な試みで、その後も改定をしながら大学のテキストとして使われている。

15.3 年間のコースで、毎年 4 クラス、約 100 人の学生が学んでいる。この外に成人クラスに 200 人おり、全体で 500 人が日本語を勉強している。

16.広西自治区には日本語専科を持つ大学が 4 つあるが、本学が一番大きい。

17.毎週木曜日は日本語コーナーを開いている。先生と学生が集う時間で、この夜は先生も学校の宿舎に泊まる。

18.先生は中国人 10 人と日本人 3 人。この外に 2 人の中国人教師が日本で研修中。

19.3 人の日本人はインターネットなどで募集し、大学が雇用する。中には協力隊 OV も入っている（滝沢隊員、安野部隊員）。

20.小川隊員以外にも、大学で働いた隊員は帰国後も中国と関係している。鈴木隊員は上海電通に勤め、昨年は大学を訪ねてきた。

21.浅野隊員は大阪で日本語学校に勤務し、中国にも学生募集にくる。

22.大滝隊員は静岡で JICA の国内協力員をしている。

以上

添付資料 3-1

湖南省日本青年海外協力隊員受入れ業績の総括

湖南省科技厅資料の翻訳

日本青年海外協力隊員を中国に要請するのは中国政府と JICA との技術協力に関わる重要な構成部分であり、中日両国が未来を前向きに考えたり、世代々に友好したりするのを促進するには非常に積極的な役割を果たしています。湖南省では 1980 年代の半ばから JICA と技術協力を展開し始めました。今まで合計で 68 名の日本青年海外協力隊員を受入れました。人数では中国国内では一番になっています。JICA という名前は湖南で誰でもよく知られています。日本青年海外協力隊員を受入れた事については、ある意味では湖南が日本との技術交流をするには積極的な役割を果たしました。ここでは当省が日本青年海外協力隊員を受入れる業績状況や経験及び心得について、下記総括しました。

一、基本状況

我が省は 1988 年に最初の日本青年海外協力隊員を受入れ始めました。2006 年 11 月までに合わせて協力隊員を 68 名受入れました。職種については、日本語教師、美術教師、自動車整備、スポーツ(水泳)、服装、キノコ、看護師、幼稚園教諭、園芸と果樹栽培、助産師、獣医、塗料などがあります。その中には、職種別の人数は下記の通りです。

職種	人数
日本語教師	27 名
美術教師	2 名
自動車整備	10 名
電子機械	1 名
水泳	2 名
服装	6 名
キノコ	4 名
看護師	2 名
幼稚園教諭	4 名
植物と野菜栽培	5 名
助産師	1 名
塗料	1 名

JICA を通して、我々は諸領域に広範な中日間の技術人員交流を行いました。

下記対照表をご参照ください。

年度	中国への協力隊員人数(名)	日本への研修生人数(名)
2004 年	10	3
2005 年	8	1
2006 年	9	2

中国へ来て頂くか日本へ派遣する方式のどちらのやり方でも、日中の良好な友好を促進しました。中には中日社会の差異の認知、文化差異の認知、風俗習慣差異の認知及び科学技術レベル差異の認知等を含めます。それは中日両国の相互理解を増進したり、中日人民の友誼を促進したりするには積極的な役割を果たしてきました。特に湖南に来ていた日本青年海外協力隊員により創始した《湖南省日本文化祭》はすでに 2004 年、2005 年、2006 年連続で三回を円

満に行き、各関係先から熱烈な応援を得て、素晴らしい効果を収めました。
それは我が省の大学生たちに日本文化を深く知って貰ったり、湖南で日本語を勉強する良好な雰囲気を作ったりするには積極的な促進役割を果たしました。また、日本青年海外協力隊員が湖南へ働きに来て、言葉の障害及び仕事上、生活上の困難を克服して、“三同主義”を真剣に徹底し、つまり受入れ先の人々と同じ仕事をし、共同生活したり、一緒に思考したりします(共同思考)。受入先から評価されています。中には僻遠の地へ派遣されていた協力隊員たちは厳しい環境の中で勤勉に働いて、高く評価されました。

二、主な経験

我が処は協調管理セクションとして、今までの仕事経験をベースにして、《在湖南日本青年海外協力隊員管理方法》を作成しました。それに、各協力隊員の受入先へ配布し、協力隊員が着任後の準備作業を全て整えるように指示しました。また、協力隊員の宿舎、安全、居留証の手続き及び仕事配置などについて明確に指示しました。その他に、毎年協力隊員を集めて、懇談会や色々な活動を行っています。同時に受入先の関係者にも参加して頂き、その機会を利用して、協力隊員の仕事や生活状況及び問題点を聴取して、素早く解決するようにしています。

湖南師範大学の旅遊学院に来ていた飯牟礼浩一隊員はホテル観光業に関わる豊富な仕事経験及び海外での仕事経験を持っています。それに、高い言語文化レベルと独自で仕事をしたり、問題を解決したりする能力も持っています。彼は学生達と一緒に同学校の日本語の先生の授業を受けたり、定期的に座談会、討論会を行ったりして、中国側の教師たちと積極的に意見交換しながら、教学方を討論していました。より早く学生たちに日本語に関する会話能力とレベルを向上させるために、彼は日本語の会話の訓練と能力試験の研修授業も担任することになりました。2005年の年始に国際二カ国語使用クラスの日本語レベルを更に一段と向上させるために、彼は昨年の教学経験を総括して、同学院の指導者に教学意見書を提出しました。その提案書に同学院の日本語学科の長期発展向や現在執行している方案に存在している問題及びその原因について、解決方法を提出しました。それに、学生たちの現在のレベル、勉強意欲の強さ及び教師たちの教学方法の長所と短所など各方面についてそれぞれ対応策を提案しました。この現実的な提案書は同学院にて改めてベストの教学方を設定するにはかなり役立ちました。

日本青年海外協力隊員は湖南で著しい成果が取得できたことは下記主要な原因にあると思われる。

ひとつは協力隊員自身が積極的に努力した結果です。

- ◎ 協力隊員達が現地に来る前には、中国への友好的な情誼と良い実績を作りたいという願望を持っています。
- ◎ 現地入りしてからは、言語の支障及び文化上の差異を克服しました。
- ◎ 現地のCP及び周囲の人達への影響と評価も、仕事の勤勉さ、真面目さ、遣り甲斐を認識させました

もうひとつは受入先からの重視度が高いことです。

- ◎ 協力隊員に関わる配慮グループを作り、受入先の指導者より責任者を配置する
 - ◎ 仕事や生活上へ十分な配慮をして、問題点があれば、素早く解決できるようにする
- さらに三番目には、湖南科技厅からこの事業を大事にしていることがあげられます。
- ◎ この事業の担当者を配置
 - ◎ 受入先と積極的な連絡を保つ

- ◎ 問題点があれば素早く対応して解決する
- ◎ 1998年に湖南科技庁より資金を出して、《協力隊員達が湖南での協力活動をテーマにするテレビ番組》を撮影して湖南テレビ局で放送した。
- ◎ 湖南祭りに一部分の経費を調達して、支援活動を展開した。

三、JICA へのアドバイス

◎協力隊員を選抜する際に、専門知識レベルなど基本条件の他に、性格の明るい、中国に友好的な感情を持つ隊員を選定して頂きたい。

◎中国の経済や科学技術及び社会の発展レベルに合わせて、シニア海外ボランティアと専門家の派遣を増やして頂きたい。

湖南省科技庁より
2006年11月

添付資料 3-2

攀枝花市スポーツ中学校の総括資料

攀枝花市競技場管理センター 趙勇氏作成分の要約

派遣協力隊員：富田政行
 煤孫泰洋
 赤井崗史

- ◎ 隊員達は昼休みと夜間の時間を利用して、標準語ではなく、四川方言も良く覚えた。方言を良く覚えたので、現地のコーチ及び選手とスムーズにコミュニケーションができた。
- ◎ 隊員はいつも選手より一時間前にグラウンドへ行き、整地や水掛及び器材などトレーニング前の準備をしていた。
- ◎ 隊員から野球の最新技術を学び、選手たちは、苦にも疲れにも恐れず、よく考える野球をする攀枝花のチームを養成した。
- ◎ 6年間の攀枝花市少年野球チームの実績：

大会名	成績	回数
四川省野球大会	優勝	1
四川省青少年野球運動会	2位	2

- ◎ 今まで攀枝花市から四川省のプロチームに隊員を 11 名送り込んだ。
- ◎ できるだけ食事の時間を短縮して、トレーニングに時間を多く使った。
- ◎ 隊員たちは停電や停水や宿舎の水漏れなど出会ったが、隊員達の努力で仕事にも何も影響を与えたことが無かった。
- ◎ 昼間はトレーニングを指導して、夜にいつも翌日の訓練計画や野球ボールとグラブの縫い合せなどをした。
- ◎ 日本の野球雑誌や VCD を利用して選手に野球技術を丁寧に教えた。
- ◎ 隊員は週末にも少年野球クラスを指導して、野球の楽しさを感じさせた。
- ◎ 消耗品の多い野球にとっては、隊員たちは資金を募金したり、メールで日本国内と連絡したりして、できる限り野球用の器材を集めてくれた。今日になっても日本の友人から野球器材を寄付しつづけてくれている。
- ◎ 隊員達から教えてくれたのは単なる野球に関わる新しい理念だけでなく、厳しい環境の中でも勤勉に仕事をして、損得を考えず、私心が無くて、奉仕する精神という事は何よりも貴重な財産だと思っている。

趙勇

2006 年 11 月 23 日

添付資料 4-1 年度別職種別隊員派遣状況 1986-2006 隊員、短期派遣隊員、シニア隊員を含む

派遣年度	農林水産	加工	保守操作	土木建築	看護師	その他保 健衛生	日本語	幼稚園・小 学校	婦人子供 服	その他教 育文化	スポーツ	計画・行政	総計
1986	3		1		1	0	1	0		1	1		8
1987	1	1	2		0	4	3	0	1	3	2	1	18
1988	2		4		1	3	10	0	1	2	2		25
1989	2	1	1		3	0	4	0	1	3			15
1990	2		2		0	1	10	0	4	3			22
1991	7	1	1	1	2	2	9	1	2	3	2		31
1992	9		1	1	1	1	20	1	1	3	2		40
1993	6		1		1	1	14	0	4	2			29
1994	4	1	3	1	4	2	13	1	1	2	3		35
1995	2	1		1	1	1	12	0	2	0	1		21
1996	2		2		1	1	20	1	2	1			30
1997	4	1	2	1	5	2	17	2	3	1	3		41
1998	3				3	3	12	1	1	0	2		25
1999	1				5	0	15	4		2	2		29
2000	7				4	2	23	2	3	1	1		43
2001	2				6	0	21	5		2	2		38
2002	1		1		6	1	20	3		5	2		39
2003					1	2	25	2		0	2		32
2004			1		6	1	15	1		3	1		28
2005					6	3	23	4	1	3			40
2006					3	2	11	2		2	1		21
総計	58	6	22	5	60	32	298	30	27	42	29	1	610

添付資料 4-2 派遣職種の5年後との変遷

人数

派遣年度	農林水産	加工	保守操作	土木建築	看護師	その他保健衛生	日本語	幼稚園・小学校	婦人子供服	その他教育文化	スポーツ	計画・行政	総計
1986-1991	17	3	11	1	7	10	37	1	9	15	7	1	119
1992-1996	23	2	7	3	8	6	79	3	10	8	6	0	155
1997-2001	17	1	2	1	23	7	88	14	7	6	10	0	176
2002-2006	1	0	2	0	22	9	94	12	1	13	6	0	160
合計	58	6	22	5	60	32	298	30	27	42	29	1	610

割合

派遣年度	農林水産	加工	保守操作	土木建築	看護師	その他保健衛生	日本語	幼稚園・小学校	婦人子供服	その他教育文化	スポーツ	計画・行政	総計
1986-1991	14%	3%	9%	1%	6%	8%	31%	1%	8%	13%	6%	1%	100%
1992-1996	15%	1%	5%	2%	5%	4%	51%	2%	6%	5%	4%	0%	100%
1997-2001	10%	1%	1%	1%	13%	4%	50%	8%	4%	3%	6%	0%	100%
2002-2006	1%	0%	1%	0%	14%	6%	59%	8%	1%	8%	4%	0%	100%
合計	10%	1%	4%	1%	10%	5%	49%	5%	4%	7%	5%	0%	100%

添付資料5 アンケート調査集計

協力隊受け入れ機関質問票

<協力隊事業の理解>		集計	37件中		
Q1	最初の受け入れ年	1999	平均的な受け入れ開始年		
	職種	日本語14、看護師7、幼稚園教師3、野球2、			
Q2	次に受け入れた年	服飾、設計、作業療法士、小学校教師、			
	職種	視聴覚教育、声楽、果樹、食品加工、研修生各			
	次に受け入れた年				
	職種				
	次に受け入れた年				
	職種				
Q3	協力隊に2種類有るのを知っている	29	知っている	78.4%	
Q4	協力隊員を受け入れている	36	受け入れ	97.3%	
	SVを受け入れている	4		10.8%	
Q5	協力隊に期待するのは 技術移転	3.6	平均		0から4点
	協力隊に期待するのは 技術提供	3.1	平均		
	協力隊に期待するのは 資機材供与	3.0	平均		
	協力隊に期待するのは 日中友好	3.5	平均		
	協力隊に期待するのは 日中若者の育成	3.3	平均		
	協力隊に期待するのは その他				
Q6	要請から派遣までの期間は 非常に早かった	5	合計	14.3%	35回答中
	要請から派遣までの期間は 適当だった	21	合計	60.0%	
	要請から派遣までの期間は 少し遅かった	7	合計	20.0%	
	要請から派遣までの期間は 非常に遅かった	2	合計	5.7%	
Q7	協力隊の活動への満足度は 大いに満足している	8	合計	22.9%	35回答中
	協力隊の活動への満足度は 満足している	22	合計	62.9%	
	協力隊の活動への満足度は やや不満	5	合計	14.3%	
	協力隊の活動への満足度は 大いに不満	0			
Q8	Q7で満足している、大いに満足していると回答した時、その理由は？				35複数回答中
	01.技術力	12	○を1、◎	34.3%	
	02.コミュニケーション能力	11		31.4%	
	03.労働時間	10		28.6%	
	04.勤労態度	22		62.9%	
	05.人柄	11		31.4%	
	06.その他()				
Q9	Q7で不満、大いに不満と回答した時 その理由は？				
	01.技術力	9	合計	25.7%	35回答中
	02.コミュニケーション能力	13		37.1%	
	03.労働時間	6		17.1%	
	04.派遣期間	7		20.0%	
	05.その他()	1		2.9%	
<ボランティア活動の成果>					
Q10	ボランティア活動の達成度は何%？	81.8571	平均値	Rangeは40から100	
Q11	Q10で60%以上と回答した時、達成度が高い理由				
	01.受け入れ体制が整っていた	25	合計	71.4%	35回答中
	02.スタッフ(カウンターパート)が意欲的だった	10		28.6%	
	03.ボランティアに指導力・積極性が高かったこと	18		51.4%	
	04.ボランティアの技術力が高かったこと	26		74.3%	
	05.活動の内容が受け入れ機関のニーズと合っていた	29		82.9%	
	06.活動の内容が受け入れ機関のニーズと合っていないかったが、調整してニーズの合う活動ができたから	5		14.3%	

	07.受け入れ機関とボランティアとの意思疎通やコミュニケーションがうまくできた	30		85.7%	
	08.ボランティアが現地の文化・習慣に馴染むことができたから	27		77.1%	
	09.ボランティアとスタッフや関係者との人間関係が非常によかったから	30		85.7%	
	10.JICAが支援してくれたから	15		42.9%	
	11.その他（具体的に）				
Q12	Q10で60%未満と回答した時、その理由は？				
	01.受け入れ機関の受け入れ体制が整っていなかった	2			
	02.同僚(カウンターパート)が意欲的でなかった	1			
	03.ボランティアが積極的でなかった	2			
	04.ボランティアの技術力が低かった	1			
	05.活動内容が受け入れ機関のニーズと合っていなかった	1			
	06.ボランティアと受け入れ機関との意思疎通やコミュニケーションがうまくできなかったから	0			
	07.ボランティアが現地の文化・習慣に馴染むことができなかったから	2			
	08.スタッフとボランティアとの人間関係がよくなかったから	2			
	09.ボランティアが体調を崩してしまったから	2			
	10.JICAの支援があまり得られなかったから	2			
	11.カウンターパートや技術移転の対象者がいなかったから	1			
	12.活動に不可欠なものがなかった、調達できなかったから	0			
	13.派遣期間中に配属先や活動地域が変更になったから	0			
	14.その他（具体的に）				
Q13	(派遣の引継ぎがあった場合)ボランティア同士の引継ぎはスムーズに行われていましたか？				
	03.引き継ぎがよく行われていた	17	合計	68.0%	25回答中
	02.引継ぎがほぼ行われていた。	6		24.0%	
	01.引継ぎが行われず、両者の活動が重複した	2		8.0%	
	<協力によるインパクト、持続性>	0			
Q14	Q14協力隊員が教えたり、紹介したりした技術や活動で、今でも続けていることが有りますか？ はいの回答	30		85.7%	35回答中
Q15	それは何ですか？(記述式回答)				
Q16	CPの人たちは、協力隊から教えられたことが自分の仕事の役に立っていますか？				
	01 非常に役立っている	18		52.9%	34回答中
	02 役立っている	14		41.2%	
	03 少しだけ役立っている	2		5.9%	
	04 役立っていない				
Q17	隊員が授業を受け持っている場合、これまで何人の生徒が授業を受けましたか？	406.815	平均		
Q18	授業を受けた生徒たちの就職や進学に役立ちましたか？				
	01 非常に役立った	9		33.3%	27有効回答中
	02 役立った	12		44.4%	
	03 少しだけ役立った	3		11.1%	
	04 役立っていない	0		0.0%	
	05 わからない	4		14.8%	

Q19	ボランティアが派遣されたことでプラスとなった点はなんですか。(複数回答可)				
	01. スタッフの技術・能力の向上	28	合計	80.0%	35回答中
	02. 受け入れ機関のサービス・活動内容や規模の拡大	14		40.0%	
	03. 新規サービス・活動の開始	16		45.7%	
	04. 受け入れ機関の広報効果、認知度の向上	22		62.9%	
	05. 受け入れ機関の方針、体制、システムの改善	4		11.4%	
	06. 日本人の仕事への姿勢や取り組み方のスタッフへの影響	29		82.9%	
	07. 受け入れ機関のインプットの改善(予算配分、人員配置、資機材など)	4		11.4%	
	08. その他()	1		2.9%	
Q20	ボランティア受け入れ前に比べて、日本や日本人についての印象は？				
	06. 受け入れ前 非常にポジティブ	4	合計	11.4%	35有効回答中
	05. 受け入れ前 ある程度ポジティブ	18		51.4%	
	04. 受け入れ前 ある程度ネガティブ	4		11.4%	
	03. 受け入れ前 非常にネガティブ	1		2.9%	
	02. 受け入れ前 特に印象はなかった	6		17.1%	
	01. 受け入れ前 一概に言えない	2		5.7%	
	06. 受け入れ後 非常にポジティブ	11		33.3%	33有効回答中
	05. 受け入れ後 ある程度ポジティブ	22		66.7%	
	04. 受け入れ後 ある程度ネガティブ	0			
	03. 受け入れ後 非常にネガティブ	0			
	02. 受け入れ後 特に印象はなかった	0			
	01. 受け入れ後 一概に言えない	0			
	受け入れ前と後で印象に変化があったとき、その理由を記述してください。				
Q21	ボランティアを通して、日本や日本人について知識・理解を深めたことはなんですか？(複数回答)				
	01. 仕事に対する姿勢や仕事の進め方	30	合計	85.7%	35回答中
	02. 当該分野の日本の技術や制度	16		45.7%	
	03. 日本人の生活・行動様式	18		51.4%	
	04. 日本の政治や経済	8		22.9%	
	05. 日本の文化	24		68.6%	
	06. 両国の歴史理解の相違	8		22.9%	
	07. 日本語	21		60.0%	
	08. その他()				
Q22	協力隊員は中国(人)のことを理解するようになりましたか？				
	よく理解した	2	合計	5.9%	34有効回答中
	理解した	18		52.9%	
	少し理解できた	10		29.4%	
	まだ理解できていない	1		2.9%	
	わからない	3		8.8%	
Q23	協力隊員を受け入れたことで、日中の友好・親善に役立ったと思いますか？				
	非常に役立った	22		64.7%	34有効回答中
	役立った	7		20.6%	
	少しだけ役立った	5		14.7%	
	役立っていない	0		0.0%	
	わからない	0		0.0%	
Q24	これからも協力隊員を受け入れていきたいですか？ はいの回答	32		94.1%	34回答中

Q25	上のQ24で「いいえ」の場合、受け入れない理由は何でしょうか？				
	受け入れに必要な資金不足		2	5.9%	
	協力隊員の技術不足				
	すでに必要な技術は学んだ				
	その他				
Q26	上のQ24で「はい」の場合、受け入れたい協力隊員の職種は何ですか？(複数回答可)				
Q27	将来受け入れる協力隊員に何を望みますか？(複数回答可)				
Q28	ボランティアの派遣期間中、あなたの機関ではJICAボランティア以外の外部からの支援を受けていましたか？				
	受けていた		10	38.5%	26有効回答中
	受けていない		16	61.5%	
＜他の支援やNGOとの連携状況＞					
	Q28で受けていたと回答した方、以下の質問にお答え下さい。				
Q29	その組織は何ですか？				
	01.海外の政府機関 ()		KOICA		
	02.海外の民間団体 ()				
	03.国内の政府機関 ()				
	04.国内の民間団体 ()				
Q30	協力隊員と他のボランティアを比較した場合、協力隊の何が優れていて、何が劣っている点でしょう。協力隊の方が非常に優れている(◎)、優れている(○)、同じ(△)、劣っている(x)、非常に劣っている				
	a)技術移転		24	○を1、◎を2としてカウント	
	b)技術提供		18		
	c)資機材供与		8		
	d)相互理解による友好親善促進		24		
	e)若者の育成		10		
	f)その他:				
Q31	ボランティアと他の支援との関係はどうでしたか？				
	03.両者が連携した		8		
	02.両者の活動が重複した		1		
	01.両者の活動地域・内容等に関連性がなかった		3		